



はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

もう限界だ。まじやばい。足がふらつく。絡まる。激しい眩暈で何度もぶっ倒れそうになる。駄目だ。追いつかれる。やばいっ、死ぬ！

一体どれ位走り続けてんだろう。目の前どころか、上も下も見渡す限りの真っ暗闇。実際のところ、何に追いかけてるかもわかつちやいない。ここは何処で、なんでこんなところに居るのか、そんなこと考えてる余裕もない。

あたり一面異様な鉄の匂い。いや、これは血だ。吐き気を催すような濃厚な血の匂いが充満している。

この圧迫感。背後から押し掛かってくる、足を止めたら潰されそうな巨大な圧力。振り向いても何も見えない。けど、確実に迫ってくるモノ。全神経が緩慢になる。体の限界はとっくに超え、関節が逆切れした様に意志に逆らってストライキをおこす。

うご……かねえ……。

とうとう足が止まって、上半身だけ勢いで前に流された。顔から突っ込むところを、寸前で肩から落ちる。あぶねえ。痛みはない。もう眼も開けてらんねえ。全身からあふれ出る汗が、沸騰しているはずの体温を氷みたいに冷やしていく。体温と一緒に頭の方も冷めてきた。聞こえる音は自分の激しい呼吸と鼓動だけ。これで最期か。人間、究極に追い込まれると、ぶっ壊れるか、妙に冷静になるもんだな。あ～俺は後者でよかった、なんとなく。

倒れた俺を見下ろす気配。まるで笑っているようだ。

いいよ、もう。好きにしろよ。五歳以前の記憶が全くない以外は、養父母にも恵まれて、平凡な俺の人生、生まれてきてよかったよ。

達観した僧侶のような気分になり始めていたその時。血みどろの匂いにマヒしていた嗅覚が、そのまま天国へ直行してしまいそうな、場違いに安らかないい香りをキャッチした。朦朧としながら重い頭と瞼を弱冠持ち上げてみる。すぐ目の前にはすらっとした白いきれいな生足が二本、敵から俺を守るように立っていた。もう少し頑張っって鉛のような頭を上向けてみる。華奢な身体つ

きと、丸みを帯びたお尻に、きゅっと締まった細腰からして女子には違いない。まるでとび職のようなびしとしたカッコいいスタイルの和装の後ろ姿に、真っ黒な腰まであるストレートのさらさらそうな髪。ああ、あの髪に触ってみてえ……顔が見てえ……。

ぼ~とした思考の中、一瞬、後退した様にした閻が、一気に最大瞬間風速で彼女と俺に向かって突っ込んできた！ 眼を見開いた瞬間————、

いつもの朝 ～ 白昼夢？

天井だった。いつもの見慣れた天井。身体の方は瞬間移動してきたように疲労度MAX、全身汗だく、呼吸も荒い。そして意識の方は、完全置いてけぼりを食らってた。

———ここ、俺の部屋だよな……。この光、朝——？ 今、何処に居たんだっけ……。いや、違う。ここが現実。そうか、戻って来れたんだ……。ん？ って、待てコラ。戻って来れたも何も、あれはただの夢だろ。何だっけ……。あ～、思い出した、またあの夢だよ！

記録更新。今日で一体何回連続だ！ もういい加減、夢落ち的な寝覚めには慣れたけど、朝っぱらからのこの疲弊感だけは勘弁して欲しい。最初のうちこそ、その余りのリアルさになんかワクワクして、夢占いの本だとか立ち読みしてみたりもしたけど、さすがにそれが何日も続くとなると疲れるだけの日常に変貌だ。

俺に毎朝、絶大的な体力気力の消耗をもたらす夢の内容と言えばいつも同じ。毎回暗闇の中で、俺一人得体の知れないモノに追いかけている。今日のあの女子こそ初登場だったものの、ラストも同じような感じで目が覚める。そういや繰り返しみる夢は深層心理の欲求の現れなんて、どっかで読んだ気もすんなあ。こんな夢見る心当たりなんか、普通に思い出せる中では全くないんだけど。強いて言うなら五歳以前の失くした記憶になんか関係がある？ でも今更十二年もたってから出てくるって、しかもあんな夢から推測される欲求ってどんなソレだよ。

暫く夢の回想に浸りつつ、ベッドの上で胡坐をかいて汗で湿った布団をぼ～と見下ろした。また干すしかないか……。すっかりここ最近の日課と化してるし。まじで布団乾燥機買ってこようかな。なんか毎晩寝小便してるガキンちょの気分だよな……。

時計を見るとまだ六時ちょっと過ぎたところだった。普段ならあと一時間は寝てられる時間帯だけど、汗まみれの布団やスエットに二度寝する気にもなれず、制服の着替えを持ってシャワーを浴びに廊下に出た。台所の方からは養母が作る朝ごはんのみそ汁のいい匂いがする。なんかみよ～に身に沁みる、夢とは全く真逆の、いつも通りの平和な朝。

かいと

「あら海翔くん。今日も早いよねえ。最近ちゃんと眠れてないんじゃないの？ 大丈夫？」

風呂場に向かう途中、欠伸のついでに思いっきり伸びをしてたら、台所から養母が顔を覗かせて穏やかな優しい声で話しかけてきた。

「だ〜いじょ〜ぶ。なんか変な夢ばっか見てるけどね。あ、母さん、またさあ、悪いけど布団屋になったらとりこんどいて」

「あらまあ、今日もそんなに寝汗かいたの？ いつも朝から辛いわね。一回不眠症とかでお医者さんに診てもらおう？ お父さんにお話ししておきましょうか」

「いって、そんな大げさなもんじゃないから。シャワー浴びてくる」

養父は私立病院に勤める医者で、人手不足のせいで昨夜も帰れなかったらしい。俺より、養母の方が眠れてないんじゃないか？ いつも養父の体を心配して起きていることがままあった。二人とも高二的の俺からすると、父母というより祖父母くらいの歳だっただけ。

全く、養父母ともお手本のようにいい人たちで俺にはもったいないくらいだ。なんたって記憶喪失で正体不明の俺を保護してくれたついでに養子にしてくれ、十二年間も育ててくれた。いくら子供に恵まれなかったとはいえ、出来た人たちじゃないか。これで自分の不幸を理由にぐれようもんなら殺されても文句言えねえよな。不幸っていっても俺の場合、実の両親を知らないってくらいで、養父母の御かげでほとんど感じたことないんだけど。

たわいもない考え事をしながら湿ったスエットを脱ぎすてて浴室の引き戸を開けた。そんな日常的な行動に、いちいち緊張する奴なんているわけがない。俺だってそう。だから、思いっきり力の抜けた動作で戸を開けて、すぐ目の前に立っていた女子の存在が、全く理解できなかった。

最初に目に飛び込んだのは黒いセーラー服。白いリボンタイ。真っ黒なストレートの腰ぐらいまでありそうなさらさらそうな髪。眉毛のあたりでざん切りに切られた前髪。そして、無表情のままじっと俺を見つめる大きな黒眼と白い肌。一言でいうならツンデレ系美少女？ 形のいい、桃色の唇が動く。活舌のいい少し見た目より大人びた口調で、よく通る耳触りのいい声がそこから零れ落ちた。

「緊急事態だ」

「は？」

まさしく、この状態？

そこでようやく、今のこの状況に我に返った！

「うっわあっ！」

俺ってば、どれくらい彼女と対面していたんだっ？ 俺は勿論、そのままシャワーを浴びるつもりだったので、当然の如く全裸のまんま。顔から火が出るってのはこういうことか！ とか実感してる場合じゃないって！ とりあえず彼女の視界から消える！ 脱兎の如くすごい勢いで浴室の戸を閉める。閉まる瞬間、まっすぐ俺を見て立ったままの彼女のストレートの長い髪が風圧に煽られて、シャンプーの宣伝さながらもの凄く綺麗に横に広がった。それさえも、油断すれば見とれてしまいそうになる光景で、どう見ても幻とは思えない。実体だ。あとは、そうそうっ、とりあえず、そばにあったバスタオルを腰に巻いて……。

「海翔くん？ どうしたの？ 大丈夫？」

俺の叫び声と勢いよく閉めた引き戸の音を聞いて養母が心配して脱衣所の扉のすぐ向こうまで来ていた。

「だ、大丈夫！ ちょっと足滑らしてドアに思いっきりぶつただけ！」

「まあ、怪我してない？」

「平気平気！ ごめん、驚かせて！」

「そう？ ならいいけど……気をつけてね」

なんか一気に脱力して、その場にしゃがみ込んだ。頭を抱え込んで考え直してみる。ん～、夢か？ やっぱり夢か？ 白昼夢ってやつ？ 連日のあの変な夢のせいで確かに不眠症気味なのかもしれない。そう言えば彼女、今朝の夢に出てきた女子に似てたもんな。やっぱり一回病院行った方がいいのか？ 俺。とにかくだ。もう一度確かめてみよう。

少し落ち着きを取り戻してそ〜っと浴室の引き戸を開けていく。居たらどうしよう。どうする？ 自己紹介でもするべき？ いや、まず謝るべきじゃねえか？ 俺が悪いの？ でもあれは不可抗力だよな……、下らない自分突っ込み入れつつドキドキしながら彼女が居た空間寸前まで戸を開いた。

半分妙な期待を抱きながら一気に開け切る。

—————……。

そこには、—————誰もいなかった……。

それはそれでまた力が抜ける。そして、じわじわと自分の頭が心配になってきた。浴室の窓は内

側から鍵が掛ってるし、まさに密室状態。常識的に考えて、自分の頭を疑う意外ありえねえじゃねえか……。——まあ待て。こんなこと今日が初めてのことだし、もう少し様子を見てから病院行こう。養父母にも心配掛けたくないしな。

はるにい

まさや

かおり

そうだ、波留兄に相談してみよ。征哉はともかく花織だと速効病院連れてかれそうだからな。

少し気分が上向いたところで思いっきりシャワーの蛇口をひねると水だった。

いつもと違う朝 ～ 兄妹

いつにないドタバタな朝を迎えて、正直もう一日終わった気分だ。だけどまだ起きて一時間しか経っていない。早めに家を出て波留兄の住む養父母が大家のアパートに向かった。すぐ隣なんだけどさ。一応、歩きながらケータイを入れてみる。

『もしもし？』

「あ、波留兄、寝てた？」

『起きてるよ。何？ なんかあった？』

波留兄は俺が電話かけたり、遊びに行くといつも第一声はこれだ。何にもなかったら電話しちゃダメなのかよ、家行っちゃダメなのかよと、何度か本人に言ったけど直してくんない。もう、いいんだけどさ。

「う～ん、今そっち向かってるところ。ちょっとさ、とりあえず直接話聞いてくんない？」

『今から？ お前学校だろ？』

あれ？ なんかいつもと反応が違う。

「なんだよ、女でも連れ込んでんの？」

『え？』

あれれ？ まじ？ 今まで女の気配なんて全くなかったのに、まあ二十四って歳と波留兄の容姿からすりゃ居ない方がおかしいんだけど。

「そっか～、じゃあいいよ。遠慮しとく」

『ばか！ ちげえよ。ちょっと待て』

なんか挿話口を押さえるようなざわざわした音を聞いている間に、二階の部屋の扉の前までついてしまった。

『海翔？』

「ん、ごめん。着いちゃった。今扉の前。彼女の顔見ていい？」

『だから違うって。妹来てんの』

「妹っ？」

初耳だ！ 俺がここに引き取られてから波留兄ともずっと付き合いあんのにだ。知り合ってから

十二年だゾ。何か結構ショック。何なんだよ、今日ってもう、こういう日なのか？ 戸口の前で微妙に落ち込んでると波留兄が出てきた。

「悪い、海翔。お前初めてだよな。実は異母兄弟でさ、しかも体弱くてずっと田舎暮らしの引き籠りだったから世間知らずで」

俺の顔を見るなり入口に手をついて体を支えたまま一気にしゃべり出す。まあ、そういう理由なら納得もするけどなんか取り繕ってる感が否めない。いつもの斜に構えたような波留兄らしくないんだもんな。顔に出てしまったらしく波留兄がひとつため息をついて続けた。

「別に隠してたわけじゃないんだぜ。今まで話すついでが全くなかったからさ、改めてべらべら話すことでもないだろ」

「俺、別に何も言ってねえよ。正直少しショックだったけどね。ま、いいや。紹介してよ」
「ああ、入れよ」

決して狭い間取りではないのだけど一九〇センチの長身はいつ見てもこの部屋には窮屈そう。高校に入ってやっと一七五センチ越えの俺からするといつまでたっても近所の兄ちゃん気分が消えない。

玄関を入れてすぐのキッチンの奥にはふた部屋の入り口が続いてる。右手は閉め切られた波留兄のネット関係の仕事部屋。左手は開け放たれ、ベッドとテレビのある八畳の部屋。その部屋の奥、逆光になった窓際にセーラー服の女の子が立っている。

一瞬、硬直した。何が何だか、目の前の現実を受け入れられない。考えることを脳が完全に拒否してる。アクセス不能。エラーエラー。

「こいつ、妹の比呂」

え？ 何？

もう一度よく見る。対象物が、ついさっき見た記憶の中の画像と合致する。

その子は、まさしく。

風呂場であったあの女子じゃないか！

黒いセーラー服。白いリボンタイ。真っ黒なストレートの腰ぐらいまでのさらさらそうな髪。眉毛のあたりでざん切りに切られた前髪。そして、無表情のままじっと俺を見つめる大きな黒眼と白い肌。こんな偶然ってあんのかつ？ 偶然？ そんなばかな！ 俺の思考回路は今度こそパニックに陥った！ ショート寸前っ。誰か、ちゃんと説明してくれ！ 波留兄っ。

「は、波留兄！」

「海翔？」

自分の妹に、ましてやこんな美少女な妹に、まるで化け物に会ったような反応されたら、そりゃ兄としちゃいい気分しないだろうけど、俺もそれどころじゃない。けど波留兄は嫌な顔というより、俺の反応に心底驚いた感じで俺の両肩を掴んで顔を覗き込んできた。

「お前大丈夫か？ 海翔っ」

一体朝から何回言われてるセリフだろう。当の妹の方は風呂場で会った時と同じ、無表情のまま俺の方を静かに見ている。美少女なだけに異様な迫力があって、俺が小学生だったらとっくに大声出して泣き喚いてこの場から逃げ帰ってるところだ。

「海翔！ しっかりしろって！」

肩を揺さぶられて波留兄の方に顔を向けると、妙に焦った心配そうな眼がこっちを見ていた。そこでやっと少し冷静さが戻ってくる。

「波留兄……、ごめん……えっと、俺……、」

そうだ、落ち着け俺。他人のそら似とか？ 分かんないけど、とにかく、なんか他にもいろいろ理由は考えられる、はず……多分。

「いや、お前は悪くない。比呂！ お前海翔になんかしたのかよ！」

「えっ？」

なんだって？ 波留兄がいきなり矛先を妹に向けて怒鳴りだした。妹は相変わらず無表情で無言のままだったけど、や、この場合明らかに態度がおかしかったのは俺じゃないか？ ここ、妹を責めるところじゃないだろ。

「お前な！ ここでも常識知らずもいいところなんだから、勝手な真似すんなって言っただろ！」

「波留兄！ 待ってよ俺、何もされてねえし！ ちょっと、落ち着いてくれよ！ 何いきなり怒

り出してんだよ！」

「海翔、」

「おかしいよ波留兄。らしくないって。はははっ、それじゃあ、波留兄、妹さんDVか、俺のこと、めっちゃくちゃ愛しちゃってるくらいに聞こえるよ？」

精一杯の笑えない冗談。でもこれで空気が冷え込んでくれればその方がいい。むしろしらけてくれた方がまだいいよ。案の定、波留兄の顔に何言ってんだこいつって文字が読める。ま、いつもの顔っちゃそうなんだけど。戻った。その時。

くすっ

窓際を見ると妹が、俺たちを見てかすかにほほ笑んでいた。ほんの、わずかな表情の変化。それだけなのに何だこの娘、さっきと印象が全く違う。めっちゃ可愛いじゃないっすか……。癒し系だ……。思わずじっと見とれてしまい、残念なことにすぐに元の無表情に戻ってしまった。それにしても今までが怖いくらいの美少女鉄仮面だっただけにギャップが凄まじい。けど何？ もしかして今のが受けたの？ それだとなんか、笑いのツボが違うよな。そうするとまた笑かすのって難しいよなあ。

「あいつ……、笑った……」

隣でつぶやいた波留兄を見ると、俺より驚いた顔で妹に視線が釘付けになっていた。波留兄のそんなに驚いた顔も初めて見るんですけど。そうか、妹さん滅多に笑わないんだな。絶対また笑わせてえなあ。

「海翔」

「あ、ん？」

「悪いな、なんか朝から騒がしくして。お前、大丈夫か？」

「あ～、だんだん自信無くなってきた。俺、頭変かも」

「話ってそのことか？」

「ん～……。それより妹さん、ずっとあそこに立ったまんまなんだけど」

「あー、あいつはいいよ。気にすんな」

て、言ったって、気になるよ！ 波留兄はホントに気にする風もなくその場に胡坐をかいて座った。俺も妹さんをちら見して申し訳なく思いながらも向かい側に胡坐をかいた。波留兄は妹さんが嫌いなのか？ こんな美少女なのに……。

「気になる？ あいつ」

「そりゃ……！」

ひろ

「あれね、比呂っての。歳はお前とタメだよ。今日、お前と同じ学校受かったんで連れて行こうかと思ってたんだ」

「え？ じゃ妹さん、これからずっと波留兄とここに住むの？」

「ああ、当分の間な」

何もかも初耳だらけだったけど、もう今更どうでもいいや。比呂は自分の話をされてるのに相変わらずじっと窓際に立ったまま。疲れないのだろうか。なんか、等身大の人形に思えてきた。自閉症とか、そういう子なんだろうか。さっきの微笑みも気のせいに思えてくる。

「お前さ、比呂と前にどっかで会ったのか？ なんであいつ見てパニックだったんだよ」

「うっ……」

言えるわけないよ。本人の目の前で……。もし仮に彼女にそういう？ 能力があったとして、本人の口からでも説明されるのなら納得もしよう——それがどんなに荒唐無稽な話でも真実なら受け入れられるハズ！ 多分……——でも、それ以外は哀しいことに俺の妄想の可能性が限りなく高いわけで。俺に予知能力まがいの力でも身についたとか？ それにしても、だ。やっぱり夢や妄想の中で会ったなんて、現実にその女子が目の前に存在するいま、おいそれと相談できる代物ではなくなってしまった。

「海翔、お前一回記憶喪失やってんだろ？ もう十年以上も前のことだけどさ」

「あー……、うん……」

「つまりだな、お前の場合はそういう過去があるんだからさ、普通のやつが聞いて頭おかしいとか思われそうな話でも、何かあったら俺には何でも言えよ。何がきっかけでどうなるか分かんねえだろ？ いきなり五歳以前の記憶が戻ってそれ以降のこと忘れられちゃ哀しすぎるしな」

「さすがにそれはないっしょ。今頃五歳以前の記憶が戻ったら俺の方が困るよ。俺にとっちゃもう、今更実の両親が分かった処で今のこの生活が全てだしな。まあ、自覚は常にあるから、波留兄には何かあったらすぐ話すよ」

既に話せてないけど。ごめん、波留兄。心の中で謝っておく。妹さん、比呂は俺のこの事情、兄から聞いてるんだろうか。なんとなく視線を彼女の方に向けるとぼっちり目が合う。何？ ずっと見られてたのか俺。風呂場での事がもし現実なら、俺、彼女に全裸見られてんだよな……。

途端に耳まで熱くなってくる。波留兄が片方だけ口角をあげていつもの斜め視線で俺に訊いてきた。

「海翔、お前意識しすぎ。あーゆーのがタイプなの？」

「それ、本人目の前にして聞くわけ？ 俺、もうガッコ行くわ。波留兄と妹さんは？」

「ん、午前中には行くつもりよ。午後から授業参加ってことはないと思うから来週からよろしくな。それはそうとお前、話は？」

「学校終わってからまた来るよ。覚えてたら」

立ち上がって去り際にもう一度比呂の方を見る。やっぱり目が合った。そのまま少し作り笑顔で彼女に会釈して波留兄の部屋を出た。比呂は予想通り無表情、無言のままだったけど部屋を出る直前まで視線を感じてしまった。あんな美少女にじっと見られてて、まあ悪い気はしないけど、それがどういう意味なのかが全く不明だ。喜んでいいのか哀しむべきなのか。そういやとうとう波留兄の部屋では一言も声を聞かなかったな。でも声を聞いたらとどめの様な気がした。もし彼女の声が、風呂場で聞いた声と同じだったら。納得できる現実的な言い訳が思いつかない限り、何か、後戻りできなくなりそうな、知らない世界に引きずり込まれそうな、そんな気がした。

悶々とした気分のままアパートを出た。このまま自主休校したいところだけど、担任から家に連絡が入るとメンドーなので仕方なく学校へ向かう。それに学校に行けばクラスメイトや授業やらで、少なくとも今より現実世界にどっぷり浸れそうだ。あまりにも身近で異常事態が続いたので少しその場から離れてみたい思いもあった。

学校へ向かう途中に草野球が出来る位の広い公園がある。かなりしっかりした作りで、子供の背丈くらいの低木とイチヨウや桜の高い木々に周囲を囲まれ、昼間はいいけど夜は人气が全くなくなると女子など危険なので立ち入り禁止になるような場所だ。

その公園の入り口、少し奥まったところに見慣れた後姿が入っていくのを見つけた。征哉だ。しかも何やら他校の制服を着た女子と一緒にらしい。ちょっと気になって背伸びしながら眼で追っていると、横からブレザーの制服の肘を引っ張られた。

「何やってんの？ 海翔」

「花織。あれ、征哉」

征哉も花織も腐れ縁の幼馴染で、家も隣とお向かいさん、幼小中高と学年も一緒ならクラスもずっと一緒の仲だ。花織は俺の体を壁にして、同じように俺より低い位置から背伸びして征哉の方に視線を定めた。

「あら～、朝っぱらから、新手じゃない？ 征哉も大変だね」

「新手って？」

「ばか、告られてんでしょ」

「は～、あ～、そ～、」

確かに、征哉は幼稚園の時からモテまくってた。顔が中性的で背は今でも一六三センチしかないのに——本人はものすごくコンプレックスみたいだけど——それがまたカワイイとかで、年上からも年下からもモテまくった。残念ながらここからじゃ相手の女子の顔がよく見えないな。もう少し身を乗り出そうとすると、花織に思いっきり両手で腕を引っ張られた。

「ばか！ 何間抜けなことしてんのっ」

「だって、相手の顔みてえじゃん。あ、征哉！」

溜息をついてうつむき加減で征哉がこっちに向かってくる。俺の声に気付いてあからさまにばつの悪そうな顔をする。相手の女子は反対方向へ消えたようだ。

「モテる男は大変だな～征哉。朝っぱらからお疲れ！」

「お前らこそ、朝っぱらからいちゃいちゃしてるバカップルに見えるぞ」

？ 何言ってんだ？ こいつ。言われて頭ひとつ下の花織の方を見ると、花織も子犬みたいなくるっくる眼で俺を見返してきた。お互い分けわからん顔をしていたけど、花織が俺の腕を抱きかかえたままなのに気付いて納得する。花織は征哉に見せつけるようにさらに、肩までのふわふわな髪を押しつけて腕に密着してきた。瞬間、いい匂いが鼻をくすぐる。

「羨ましい？ 征哉も腕、組んであげようか」

「ば～か、間に合ってるよ」

「そうでしたそうでした。モテ男クンだもんね～」

そうか、普通に見ると花織もかなり可愛い女子の部類に入るんだよな。あまりにも小さい頃から慣れすぎてそういう意識が全く欠けてる。征哉も同じだろう。そこでふと、比呂の顔が浮かんだ。彼女に触られたら、ものすごいドキドキしそうかも。あのさらさらそうな髪に触れたら……。やばい。考えただけでもドキドキしてきた。

「やだなあ、海翔ってば。何赤くなってんの？」

「え？ あ……、他の女子のこと考えてた」

「ひど——いっ！ すぐ目の前にこんな可愛い子がいるってのに！ 全く、征哉も海翔も女心ってやつ、全っ然解ってないよね。征哉、あんたまた泣かせたんでしょ」

「俺が悪いのかよ。勝手に盛り上がり勝手に完結してさ。もういい加減ほっといてほしいんだけど」

心底疲れた風に征哉は通学路に戻って歩きだした。花織も俺から離れて征哉を追うように歩きだす。俺も後に続いた。

まあ、俺も二三度経験あるし——俺の場合は丁重にお断りした——、征哉の気持ちも分らないけど、やっぱりモテるやつのセリフだよな。だけど片っ端からフリ続けてるもんだから、一部でそっちの気があるんじゃないかって噂されてるの、征哉のことだから知ったらムチャクチャ切れまくるに違いない。

「でも、だいぶ減ったじゃない？ 皆あんたの性格分かってきたからさ。ホント、見かけと中身のギャップが激しいよ征哉は。やさしそうに見えてクールすぎ。なよなよそうに見えて海翔よりよっぽど男っぽいもんね」

「もしもーし花織ちゃん？ それどういう意味かなー？」

「そーいや海翔、さっき他の女子って誰のこと考えてたんだよ」

「え？」

いきなり振るか？ こいつ自分は女に興味なくせに人のことは気にすんだよな。

「あたしも気になるー。誰誰？」

「んー、波留兄の妹。明日から俺らの学校に転入してくるんだって」

「妹っ？」

征哉と花織の声がハモった。二人とも波留兄には俺と同じで小さい頃から面倒みてもらってる間柄だ。やっぱ征哉も花織も初耳だったんだ。自分だけじゃなくてなんかほっとした。

「花織、そんな話聞いてたか？」

「ううん、聞いてない。妹って……」

「だろ？ やっぱショックだよな。話す機会がなかったとか言って、今までずっと黙ってたんだぜ、波留兄。異母兄妹なんだってさ。今朝波留兄んちで会ったんだけどずっと体弱くて田舎にいたらしいぞ」

「体が弱い？」

「そういう設定なんだ……」

「何？」

？ なんか会話が噛み合わないぞ？ その時、

パパパパ————ツ

前方、学校の1本手前の交差点で派手なクラクションが響き渡った。見ると黒髪をひつつめにした地味な服の細長い女の人が車道の傍で腰を抜かしたようにへたり込んでた。あれって…

「あれ、南ちゃんじゃん」

花織が一番に反応して南ちゃん————俺らの学校の現国教師————のそばに駆け寄った。南ちゃんは花織に支えられてようやく立ち上がった。

「大丈夫？ センセ、ひどいね、あの車。ここ裏道だし通学路になってんだからもっとスピード落とせっての。あっ、そこの二人！ あんたら男のくせに何のんびりしてんのよ！ はい、征

哉、バッグ持ってあげて！」

「あ……、大丈夫だから、B組の白河さん……だったわよね。ありがとう……」

「センセ、声が死にそうだよ。遠慮しないで。学校目の前だし、海翔がおぶってあげるから」

「俺？」

一瞬、南ちゃんの目が驚いたように俺を見たが、すぐに逸らされた。ま、いざとなったら別におぶってもいいんだけどさ……。ただでさえ影の薄い南ちゃんは花織のテンションについていけずますます見え入りそうだ。こんな近くに居ても眼鏡の奥の目は、さっきの一瞬目が合っただけで、俺たちと滅多に視線を合わせようとしなないし、やたらおどおどしている。頭はいいらしいけど、よくこれで学校の先生やってると思う。俺ら三人の場合、南ちゃんに対しては同情が大半を占めてたけど、他の生徒らは馬鹿にしたり呆れてるのがほとんどだった。現に通学路のこの路上で車に轢かれそうになった南ちゃんの傍にいるのは俺達だけだ。

「ほんとうに大丈夫よ。ちょっと貧血がしてそこに運悪く車が来ちゃっただけだから……。えっと……蒼井くん、ひとりで歩けるから大丈夫。一條くん、バッグ、ありがとう」

文字通り、蚊の鳴くような声で征哉からバッグを受け取り南ちゃんは学校に向かって歩き出した。なんとかまっすぐ歩いてるって感じでちょっと見えていて痛々しい。すぐ隣で、花織が俺の思ってることを口にした。

「大丈夫かな」

「本人が大丈夫って言ってんだから、いいんじゃないの？」

「まあね、でもあんたが言うとなんか冷たいよね。同じセリフでも海翔が言うのと違って聞こえるのが不思議だわ」

「本人が大丈夫って言ってんだから、大丈夫なんじゃない？」

「ほら、やっぱり全然違うー」

「言ってんじゃないよ、海翔」

そのまんま俺たちは南ちゃんのことは一瞬で忘れて、何事もなかったようにいつも通り校門をくぐって教室へ向かった。

二限が終わった後の十分休憩、三限目は現国だけど、四時限目の数学の課題をすっかり忘れてた！ 慌てて征哉のノートを奪って必死で書き写す。

「いや～、持つべきものはやっぱり頭のいい優しい～幼馴染だね～、感謝してるよ、ホント。ありがとう、征哉くん！」

「昼飯、何にすっかな～、今日ってオムライス弁当あったよな、確か。食後にアイスもいいねえ。味が違うの二つ喰いてえなあ」

「分かってますよっ。こんちくしょう、なんならドリンクも付けてやるよっ、おーじサマはよおっ」

束の間の貴重な休憩時間、二階窓際の一番後ろの特等席で、無言でせっせとノートを書き写していると、他のクラスメイトのざわめきがいつになく耳に付く。

「次、なんだっけ」

「現国。南だからこのまま遊べんじゃん」

「あ～、あいつ今朝車に轢かれそうになってたな」

「え、南に死なれたら困るべ！ 授業で遊べる時間減るじゃん！」

「南の場合、死んでも授業来そうじゃね？」

「こえ～。死んでること気付いてないってパターンかよ、ま、今でも実は死んでました！ て言われても納得しそうだけどな～」

いつものことだけどひどい言われようだな。今朝のことは少なからず関わった身としてはなんか複雑な心境だ。会話をしてるやつらを見るわけにもいかず、正面に座ってる征哉に視線を移すと征哉も渋い顔で見返してきた。そのまま一つ溜息を落とすと、俺が書き写してるノートを人差し指でとんとんと指さした。

「ここ、写し間違ってる。ま、わざと一問位間違っという方がいいかもしれねえけど」

「あれ？ あ、ほんとだ」

そこで丁度始業ベルが鳴り、ほぼ同時に教室の前扉から南ちゃんが現れた。相変わらず視線は前方斜め三〇度下をむいたまんま、若干猫背なせいで、余計貧相に見えるよ。教室のざわめきは休憩時間そのまんまで、南ちゃんに気付いてるのも三分の一もいなさそうだ。

「ごめんなさい、もう少し静かにしてください。隣の教室に迷惑だから、お願いします。授業始めます。」

いつもの南ちゃんの第一声。ほんの少し、全体の音量が下がっただけでまたすぐに元に戻る。俺や征哉の席からだとは完全に南ちゃんの声は聞こえない。唯一、テストやなんかに照らし合わせて言うなら南ちゃんの黒板さえ写しておけば何とかだった。なのでそれを知ってるやつらはざわめくやつらをよそに無言でただ黒板を書き写していた。それでも真面目な生徒の中じゃ、もっと静かに勉強したいと、学年主任や教頭に親から苦情をいわせるやつもいた。普通ならとっくに辞めさせられてそうだけど、校長の親戚だか何だかで、それでやっと首の皮一枚つながって辞めさせられずに済んでるって話だ。

しばらく真面目にノートをとってたけど、教室のざわめきと窓際特有の日差しと風がいい感じでだんだん目蓋が重くなってくる。気分転換も兼ねて伸びをしたついでにふと外に目をやると、ぴったし校門から入ってきた長身の男と髪の高い少女と視線がぶつかった。波留兄と比呂だ。波留兄が軽く俺に向かって手をあげる。授業中だったけど、南ちゃんだし俺も波留兄に向かって手をかき振った。比呂はまたじっと俺の方を見てる。何だろうな、朝から。そんなに俺の顔が珍しいんだろうか。前の席の征哉にも教えてやろうと肩に手を伸ばすと、もう気付いて征哉も二人の方に視線を向けていた。そのまんま征哉の肩を後ろに引っ張って耳元で話す。

「あれだよ。波留兄の妹。比呂って名前。すげえ美少女じゃね？　なんかちょっと変わってるけど」

「んー、なんか人形みたいだな。仕方ないのかもしれないけど」

「ん？　何？　征哉お前、あの子のことなんか知ってるの？」

そういや通学途中も花織と噛み合わないこと言ってたな。征哉は二人を見ていた姿勢からそのまま俺に視線だけ向けて、女子みたいにまつ毛の長い黒目がちな目で無言で見返してきた。

「な、何だよ。俺、あの比呂って妹にもずっと顔ロックオンされ続けてんだよな。何か俺の顔についてる？　変な跡とか……。あ～、なんかムシヨーに気になってきた！　鏡もってない？　お前」

「持ってねえよ」

自分で顔を触りまくった感じじゃ全く分からない。隣の席の有坂さんに鏡を貸してもらった。

「どうしたの？　いきなり」

「ん、あのさ、俺の顔なんかついてる？」

「別に？　いつも通り男前だよ」

「ありがと、やさしいなあ。有坂さんて。有坂さんもいつも通りかわいいよ」

いけね、一応授業中だった。南ちゃんの方に視線を向けるが、南ちゃんはロボットのように黒板に授業内容を書き込んでいた。まあ、少し遠慮して鏡を机の下に隠して自分の顔を覗き込む。見慣れた顔。自分じゃ男前だとかイケメンだとか——同じことか、自惚れたことこれぽちも思わないけど、まあ並みじゃね？ って程度。女顔でもないしとりあえず特にコンプレックスもない。それだけは記憶にない両親に感謝だ。強いていうなら緊張感に欠ける顔？ まあそれは表情か。

うつむき加減で鏡に向かって百面相してる俺に有坂さんや周りの女子が受け出した。笑い声がひとしきりする。前を向くと征哉の呆れた顔があった。

「面白〜い。蒼井くん、何やってんの？」

「あ？ ん、助かった、これありがと」

「どういたしましてえ」

鏡を返すと、前方から何やら鋭い視線を感じた。教卓のまん前の席の花織がどういうわけかこっちを睨んでる。うるさくしすぎたか？ 分けわからんけどとりあえず笑って手を振ってみた。まさしくパイっという感じで正面に向き直り、一心にノートに書き込みだす。肩が怒ってるよ……。何が気に入らなかったんだか。後で現国のノート見せてもらわなきゃいけないからなるべく機嫌損ねたくないんだけどな。そうこうしているうちに終業のベルがなった。

昼休みの職員室。教師はそれぞれの準備室や外食に出たり教室で生徒と昼食をとる者もいて、人影はまだらだ。

ひとり、自分の席で弁当を食べながら南は今日何回目か、朝の出来事をまた思い返していた。

やっぱり似ている——。顔というより、雰囲気。今まで教室の教壇からや、廊下で一瞬すれ違うだけで、かもしれない、くらいにしか思ってなかったが。

蒼井海翔——。

背もちょうどあの位だった。体格も似ている。笑った時や人と話すときの空気に何とも懐かしい、胸が締め付けられるような甘い想いが南の中に蘇った。

——先生ってさ、実は美人だよね。でもさ、俺の前以外では眼鏡外さないでよ。他の奴に知られんの、悔しいじゃん——

だが南にとっては、元となっている生徒をそれ以上思い返すには苦すぎる過去だった。

「先生、先生、南先生」

「あ、はい、すみません……」

自分の世界に埋没していた南の後ろに、いつの間にか学年主任の男性教諭が立っていた。五十前後のいかつい体格に上下ジャージ姿で、見た目社会科というより竹刀を振り回す体育教師のようだ。実際は腕を組んだその右手には、竹刀でなくボールペンが絶え間なく弧を描いて回っているのだが。

「どうしたんです？ さっきから呼んでるのに。全く困りますよ。先生、そこらのやんちゃくれな生徒よりたちが悪いじゃないですか」

「すみません……」

弱冠、横向きに椅子の向きを変え、学年主任の視線を避けて座ったまま対応する。

南はこの上司が苦手だ。南でなくても避けたくなる要因はいくつも持ち合わせているのだから、何より保護者の受けがよく、大半の同僚が心の中で納得いかない中、数年前に学年主任になってしまった。大声で正論を唱えてるかと思えば、やたら粘着質で、常に一言多い。気に入りの生徒や

保護者の前と態度がかけ離れていることも、反感を買っている一因だった。南にとってはそれ以外にも避けたい明白な理由があるのだが。

「また保護者から私の方にクレームが入ったんですよ。いったい何回目か数えてますか？ なんとか保護者の方には納得してもらいましたが、あなたももう三十でしょ。新米教師じゃないんだから」

何もまばらとはいえ、他の教師もいるこんな公の場で歳を公表することはないだろう。また始まったとばかり、点在する教師は見て見ぬふりをするが、ただでさえ音量のある声で聞こえないわけがない。恩がせがましい言い方もいい加減慣れてはきたがやはり場所が場所だけにいたたまれない。しかし、言い返す気力もない。助けを期待するのともとの昔に放棄した。南はじっとうつむいたまま、両手を膝上に置いて嵐が過ぎ去るのを待った。

「すみません……、ご迷惑をおかけいたしました」

「おっと」

わざとらしくボールペンを落とし、南のすぐわきにしゃがみ込む。来たと思った瞬間にはもう、ごつごつした太くて短い芋虫の様な五本の指が、南の太腿の付け根近くをいやらしく掴んでいた。スカートの上からでも寒気が立つ。完全なセクハラだ。気付くものは誰もおらず、そのセクハラオヤジはボールペンを拾うと何事もなかったように立ち上がる。が、そのほんの短い間でも感触を存分に味わおうとする、指の動きが南の脳裏には異生物のように記憶に刻み込まれた。

「十分、精進して下さいよ」

何が精進だ。どこの口からそんな単語が出てくるのか。掴まれた位置を上着の裾で力強く拭き取る。それでも我慢ができなくて引出しから安定剤をつかみ取り南はトイレに駆け込んだ。

「比呂？」

転入届を出して、教頭、学年主任、担任とも挨拶をすませ少し校内を見て回った。昼休みに入って特別教室の方は人気がなくしんとしている。波留の後ろをついて来ていたはずの比呂がはるか後方で窓の外を向いたまま立ち止まっていた。比呂の気配の変化に気づかなかった自分に舌打ちして、その傍まで戻る。と、比呂の視線の先、学校の向かいに見える高層マンションの屋上から懐かしいような幽かな波動を感じた。

ほんとに幽かな、自分でさえ集中しないと見落としてしまう位の波動。わざとそれを消している二つの存在。両方とも自分と同じくらいの力のレベルだ。比呂はそれらに普通に歩いて気づいたのだろう。圧倒的な能力の差を見せつけられる。どうしようもない悔しさも感じるが、諦観もしていた。比呂とは持って生まれたモノが違うのだ。比呂の能力を切望もするが、それと引き換えに与えられる苛烈を極めた試練を思うと今の自分に満足せざるを得ない。比呂には複雑な思いと同時に、その背負わされた過重な責務には同情していた。

「緊急事態か……こんなに早く来るとは思ってなかったな」

「直接には仕掛けてこない。やつらは継承者を恐れている。陸斗もここへは来ていない」

「あいつらは？」

べに ひびき りくと

「紅と響。陸斗の両腕だ」

「お前の方が強いんだろ？」

「強い。だが、二人で同調されると五分だろう。それに此処では力の調整がうまくできない。攻撃するにせよ、反撃するにせよ、高いレベルの補佐役がいる」

「わかってる。ただそうなるなら征哉と花織の力が必要だ。けどあいつらにはまだ詳しい話してねえんだよ。俺はお前と同じタイプの守護者だから更に力を暴走させちゃうだけだしな」

「継承者は」

しょうれいかい

「記憶が全く戻らない。折角唯一、この影霊界で何の影響も受けずに行動できる存在だけだな。まるっきり普通の人間だよ。保険のつもりで記憶をロックしたのが、嚴重にかけすぎて解除できなくなってる状態。お前が言うように多少の荒技は必要かもしれないが、あの歳まで放置したツケだな。やり方を間違えたら記憶どころか、全てにおいて制御不能に陥る可能性大だ」

「人格が崩壊する」

「それじゃ全く意味がない。暴走だけは避けなければならないからな。だからとりあえず海翔には何もするなってあれほど言ったんだよ、俺は」

「.....わかった」

「出来る事なら、このまま普通の人間でずっとここに居させてやりたかったんだけどな.....」

「面白いもん見つけた」

「遊びに来てんじゃないよ、響」

ひょうひょうとした長身の緊張感のない男に、グラマラスな美貌の女が気だるそうに忠告する。

「うるせえよ紅、年下のくせに」

「あんたホント精神年齢低すぎ」

正面に海翔たちの通う学校を見下ろせる高層マンションの屋上。二人とも着物をアレンジしたようなすその長い前合わせの上着を数本の長い帯で縛り、男の方は安全ブーツの様ながっちりした履物に、たっぷりしたパンツの裾も帯の様な長い布でひざ下まで縛り上げている。女の方は体のラインがまるわकारいの膝上までの黒いレギンスの様なものを穿き、ヒールの高い黒い編みあげブーツの様なものを穿いている。全体的に真っ黒ないでたちだが、腰に巻いている数本の長い帯とそれぞれ肘のあたりで切り裂いたような袖口から様々な色や柄が踊り、個人の好みを主張していた。

「黙って見てみろよ、あの女、使えんぜ」

「比呂？」

紅が形のいい細い眉毛を引きつらせ、白い眉間にしわを作って響を睨みつける。無造作に頭頂部で留められた長い黒髪の本束が数本、緩やかに頬を経由して垂れ下がり、真紅の唇と共に白い肌を余計引きたたせている。

「なわけねーだろ。チゲーよ、あそこ、今吐いてるやつ」

オレンジに近い茶髪のアールバックの髪を呆れたように掻きあげ、切れ長の目を校舎の一室、窓が開かれた女子トイレの方に向けた。

「ふ～ん、継承者と関係あり……、まああんたにしては、いいものみつけたね」

「底に憎悪と恨み辛み、怒りが溜まりに溜まって凝り固まってやがる。い～燃料タンクだぜ。二人、殺ってるしな。おまけにもう一人殺りそうだ。紅、お前が背中押してやれよ」

「簡単に言うな。影霊界じゃ、力がうまく調節出来ないんだよ。下手すりゃこっちに全部撥ねっ返って来かねない。あんた、ちゃんと支援してくれんの？」

「しゃ～ねえな～。俺様がここで本領発揮したら世界を滅ぼしちゃうからな。ここでの主役はお前に譲ってやるよ」

「世界どころかあんた自身も滅ぶだろうからね」

「うるせえ女」

真っ直ぐ正面を見据える響の視線は、とうにトイレで苦しむ女からはそれ、同じ校舎の三階、比呂の隣に並ぶ長身の男、波留に向けられていた。薄い唇の片方が弓なりに引き上げられる。

「やっとてめえを殺れるときが来たぜ、波留……」

放課後 ～ 教室

放課後。やっと起きてから一日の半日が過ぎ去った。学校じゃ特に変わったこともなくいつも通りの平和な時間。これが日常。だからと言って朝方の出来事が夢だったとは思ってないけど。あれはあれでずっと気になってるんだ。一度ちゃんと比呂と話がしたい。カバンを持って立ち上がりかけた征哉の制服の裾を引っ張る。振り向いた征哉はなぜかいつもより表情がこわばって見えた。

「なあ、征哉、これから何か用事ある？」

「何？」

「波留兄んち付き合っよ。妹と出来れば二人で話したいんだけど、ちょっときっかけ作ってくんね？」

「告んの？」

「ちげえよ！ 確認したいことがあってだな」

「いいよ。俺も波留に用があるから。花織！ おまえも来いよ！」

教室が一瞬しんとした。他の女子たちと談笑していた花織がびっくり顔でこっちを振り返る。正直、俺もびっくりだ。征哉が教室なんかで大声で女子の名前を呼ぶことなんてまずない。だいたい大声自体、出すことないのに、どうした征哉。花織は女子たちに手を振って別れると、こっちに呆れ顔で向かって来た。

「何よ、びっくりすんなあ征哉、どうしたの？」

「波留んち行く。お前も来いよ」

なんとなく、征哉の発する空気がぴりぴりしてる。何緊張してんだ？ 花織も気付いたっぽい。上目使いで俺を見てから征哉に向きなおった。征哉は体はこっちに目線だけ窓の外のどっか遠くを見ている。

「いいけどね。海翔も一緒？ 征哉、あんた波留兄に喧嘩でも売りに行くつもり？ 何ぴりぴりしてんのよ」

「お前は感じないのかよ」

？

「…………。波留兄に会ってからでいいじゃん。その話は」

「何？」

俺だけ置いてけぼり食らってる。この状況も今日何度かあったよな。

「何なんだよ、お前ら。俺に何か隠し事してる？」

「してる」

視線を俺に向けて悪びれもなくしれっと征哉が言ったのけた。いっそすがすがしいよ。反論して喚く気力もくじかれた。花織が複雑な表情で俺たちを見比べてる。

「あ、そ。で？ 話してくれる気あんの？」

「話すよ。ここじゃ無理だけどな。波留もグルだから」

「何っ？」

「征哉！ 何余計に混乱させてんのよっ。海翔、波留兄の家まで我慢して。ちゃんと話すから」

花織に手首を掴まれて荒げそうになった声をひっこめた。花織は俺と征哉の間に立たされて困ったような、少し泣き出しそうな顔を向けてきた。どちらかという気が強く、しっかり者で場を仕切るのが上手い花織にしては珍しい。こんな顔されたらそこら辺の男なら簡単にころっといっちまいそうだ。

ここで怒鳴って喚いてもどうしようもないんだろう。二人の態度からしても、とにかく朝から、今までと違うことが進行してるのは間違いないようだ。全部ひっくるめて何か覚悟を決めといた方がいい気がしてきた。征哉も花織も話すって言ってんだし。俺の失くした記憶に少なからず関係あることかもしれない。

「分かったよ。分かりました。じゃ、早く波留兄んち行こうぜ。花織が泣かないうちに」

「泣かないよ、ばか」

小さい鼻の付け根をくしゃっとさせて俺の頬にグーにした小ぶりの拳を押し付けてくる。こういうところは小さい時から変わらず可愛いと思う。少し気分が和んだところで征哉を見ると、そんなことしてる場合かってな苦々しい顔をしていた。

波留の部屋 ～ 失われた記憶

自宅の隣、波留兄が住むアパートに、三人連れ立って到着した頃には空が夕焼け色に染まりかけてた。すぐ隣なので二人を待たせて、とりあえず鞆だけ置き養母に波留兄の部屋にいることを告げる。通りに戻ると、波留兄の部屋の二階の窓がちょうど開いて、煙草をくわえた本人が顔を出した。

「よお、海翔。お、征哉と花織も一緒か。丁度いいや。来いよ」

「そのつもりで来たんだよ」

即答したのは征哉だ。花織が言ってたように口調が波留兄に喧嘩売ろうとしているようにしか聞こえない。ここへ来る間は話しかけても生返事でほとんど無言だったのに。波留兄は一瞬真顔になったかと思ったら、すぐにいつものわざと惚けたような顔に戻って、煙草をくわえ直し、手で来いというジェスチャーをして部屋に消えた。

「比呂が、居るんだよね。あたし初めて会う」

「ん？ 何緊張してんの花織。らしくねえな」

「遠目には人形みたいなやつだったぞ。早く行こうぜ」

征哉はさっさと階段を上っていく。俺と花織が階段を上りきると、もう部屋の中に入っていた。扉を開けると征哉の怒鳴り声が響く。

「おせえんだよ！ 話が！」

「悪かったって。こんな急な展開になると思ってなかったんだよ」

「こいつが来るって時点でもう尋常じゃねえだろがっ」

征哉が指さした先に比呂が朝と同じ状態で立っていた。授業中に見かけていなければずっとそこにいたみたいだ。彼女は全く、朝のまんまだった。おそらく、俺が部屋に現われた時点でまた彼女の視線は俺をロックオンしてしまったのだろう。こんだけ人数がいるってのに、全くどういう理由だか俺に視線が固定されてしまってる。いっそ笑えるくらいだ。波留兄は部屋の真ん中で胡坐をかいて、征哉に上から怒鳴られながら煙草の火を消したところだった。

俺も征哉のいつにない興奮っぷりに少々気押されながら、まず一つ、気になることを聞いてみる。

「征哉お前、この子のことやっぱ知ってたのかよ」

「面と向かって会うのは初めてだけだな」

全くこっちを見ようとせず、背中を向けたまま勢いに任せた声音で答えが返ってきた。興奮する征哉とは対照的な波留兄のゆっくりした声が後に続く。

「花織、征哉、お前ら、海翔に話したのか？」

「まだ何にも」

「これからここですんだよ。皆揃ってっから丁度いいだろ」

一向に治まらない征哉の剣幕ぶりにここにきた目的を忘れ去りそうだ。波留兄の視線が花織、征哉、ちらっと妹を見て俺で止まった。

「まあ、座れよ。海翔、お前ここ。お前の話だから」

波留兄のまん前に席を指定された。そうだよ、話を聞きに来たんじゃん。十畳のキッチンに続く八畳の一部屋は大の男二人と、女子サイズの男一人、女子二人でややいっぱいっぱい。入って左側の壁に沿って置かれたベッドを背に結構窮屈だったけどなんとか胡坐をかいて座った。俺の右側にイライラの隠せない征哉、波留兄の左側に比呂をしきりに気にしている花織。ベッドと窓際の間狭い空間には……。

「あのさ、妹さん、そこで立ったまんまなんだけど……」

「あいつはそこが定位置なんだよ。気にすんなって」

無理だって……。眼で訴えかけてみるが無駄だった。波留兄は猫背の姿勢をさらに前のめりにさせて、胡坐をかいた両膝に両肘をそれぞれ乗せ臍の前あたりで手を組んで、俺を真正面から見据えてきた。顔が近い。けど、ベッドのせいで後ろに引く空間の余裕がない。

「さて、と。まず最初に言っとく。海翔、ここにいる俺らは皆、今までずっとお前を騙してきたわけじゃない。これからする話はお前でなくても、到底すんなり受け入れられるものじゃない類の話だ。常識的に思いっきり引かれても仕方ない内容だからな。けど、これだけは信じてくれ。俺らはどんなことがあっても決してお前を裏切ったりしない。どんなことがあってもだ」

一瞬、何の話をされてるのか分からなくなった。

——まじ……？

安いドラマか映画じゃあるまいし、正面切って信じろとか裏切らないとか、真顔で言われる日が来ようとは——しかもここにいるメンバーから——夢でも見たことない展開になってるぞ。増し

て今までにない、波留兄の重い深刻な口調と強い目線にも戸惑わずにいられないんだけど。真剣に受け答えるべき？ 答えたとたんに大爆笑されるなんてことないだろうな。

「何？ほんとにそんな深刻な話？ そうなの？」

すぐ横の征哉に確認を求めてみたけど、上目使いで無言で見返されただけだった。波留兄はともかく、征哉が俺をひっかけるためだけにこんなワザとらしい悪い冗談に参加するとは思えない。ってことはこれが答えか。イマイチすっきりしない複雑な心境で波留兄に向きなおった。

「一体……、どんな話？」

「ん、海翔、お前今朝、お前んちで比呂に会ったんだろ？」

「えっ？」

なんで波留兄が知って……、あ、比呂が言ったのか？ あれ？ ってことは、何？ あれって……

「あ、え……？ 何？ あれって、じゃ、やっぱ現実……？ 何か手品みたいな？ トリック？
なんで？ どうやったの？」

俺の頭の中では又もや混乱が始まった。目的が分からん。風呂場に初登場してどうしようってつもりだったんだ？ そりゃインパクトは大ありだけど俺なんか比呂に真っ裸見られて……

当の比呂を見る。やっぱり俺を見たまんま微動だにしない。その美少女鉄火面な無表情に、なんかムショーにムシャクシャしてきた！ 何だよ、自分の話されてるんだろ？ 比呂のせいで俺だけ訳わからなくなってるってのに、何澄ました顔してんだよ！ 辛抱溜まらず思わず立ち上がって今まで溜まっていたストレスを一気に比呂にぶつけてしまった。

「あ～、もうっ！ 気にすんなってのが無理！ 頼むからこっち来て座ってくれよ！ それとさ、俺に何か言いたいことあるんだったら、ちゃんと言葉で言ってくんない？ ずっと見られてめっちゃ気になんだよな！」

比呂の大きな丸みをおびた目が俺を見上げたままみるみる見開かれる。生まれて初めて叱られて何を言われてるか分からなくなってる小さな子供みたいだ。やべ、感情に任せて大声出しすぎたか？ 美少女鉄火面の、今日二度目の小さな表情の変化に頭が冷やされ少々反省。

とりあえず八つ当たり気味だったこともあり、謝っとうとう口を開きかけたとき、比呂の小さな桜色の口元が先に言葉を落とした。

「言いたいことなど、ない。継承者とは初めて会うから、いろいろな場合を想定して、行動様式を観察してただけだ」

「観察う？」

行動様式だ？ 全く言ってることは意味不明だったけど、その声はまぎれもなく今朝聞いた、見かけより少し大人びた口調の感情のないそれだった。

声だけなら女らしい、聞いてるだけで気持ち良くなるようないい声してるってのに、言ってる内容と全く合致してなくて、却って一言一語が耳に残る。外見の完璧な美少女ぶりとも巧く合わさって、その口調がらしく聞こえるから妙に違和感がないのも手伝っていた。

それにしても、だ。観察って、そのためにあんなに俺をじっと見続けてたのか？ いろいろな場合を想定って、一体どんなだよ。怪訝な顔をしている俺をよそに比呂が言葉を続けた。

「自分は、継承者の一の守護者。継承者を守るために生きる存在」

「は？」

ここまで来るとさすがに彼女の頭が心配になってくる。さっきから言ってる継承者ってのはどうやら俺のことらしい。この場合、下手に逆らわない方がいいのだろうか。こんな特殊な子だったんなら先になんか言っといてくれよ。その思いをこめて波留兄に視線を送った。

「比呂、こっち来てお前も座れ。海翔が気が散るって」

やっぱり、否定しないのか？

「ここがこの部屋で一番最適な場所なのだが」

「こんな狭い部屋のどこに居てもそう変わんねえよ。お前ならどこに居ても異変はキャッチできるだろ。それよりただでさえ荒唐無稽な話に、海翔の気が散って話に集中してもらえない方が大いに困る」

「……わかった」

意外と素直にそう言うと比呂は俺の左側に三〇センチ位間を開けて、片膝を立ててようやく座った。どこかで嗅いだ様ないい香りがふわっと舞う。俺も比呂に続いてその場に座りなおした。視線も俺からは外されて——実際、こんな至近距離で見つめられたらそれこそ集中出来たもんじゃないからホント良かった、——瞑想する僧侶のようにやや下向きに何も無い空間に固定された。

立っている時もそうだったけど、隙がない、ってこういうことなのか、どんな動作をしてもかっちり型にはまっていて全てが計算されたように整っている。だけど華奢な躰付きとその言動にそぐわない美少女っぷりが、触れたら端から脆く壊れるんじゃないかって思うような儂い感じも一緒に持ち合わせていた。

「海翔、見すぎ」

「え」

どうやら今度は俺が比呂をロックオンしてしまっていたらしい。声の方を振り向くと花織が上目使いで睨んできた。そのまま正面の波留兄に視線をずらすと片方の口角だけあげて鼻で笑ってる。途端に顔の温度が急上昇してきた。

「いやっ、えっと、何の話してたんだっけ？ そうだよ！ 今朝の話っ、波留兄、妹さん、手品師かなんか？ イリュージョンとかやってんの？」

「いいや、手品でもイリュージョンでもない。いいか、海翔。俺らは本来、この、今いるこの次元、この世界の間人じゃない。別の、異次元世界からここへ避難してきた。此処にいる、海翔、お前と、俺、征哉、花織の四人でな。十二年前、お前が記憶を失う前の話だ」

「————？」

真顔で一語一語、確認していくようにゆっくり、波留兄が言葉を紡いでいく。だけど、全く俺の中には浸透してこない。どこのSFファンタジー物語、語ってんだ？ 花織を見るとさっきの上目使いのまま心配そうにこっちを見ている。征哉は、無表情のまま立膝をついた自分の足元に視線を落としていた。波留兄に視線を戻す。

「何？ 何の話？ ここにいる皆で芝居かなんかでもやろうっての？ 皆で小説書くとかゲームか何か作るとか？ 波留兄の新しいネットビジネス？」

半笑いで問いかけてみる。実はそうなんだ、って答えを期待して。暫くの間。溜息をひとつついて波留兄の表情が同情めいたものになる。

「訳わかんなくなっていて当然だな。いきなり信じろって方が無理な話だ。けど事実、今現在俺らは、緊急事態に追い込まれようとしている。それであっちの世界から比呂が来た」

比呂を見る。今までと違ってゆっくりと、比呂は視線を合わせてきた。水気の多い黒い大きな瞳に吸い込まれそう。異次元から来た少女？ まさに比呂にはぴったりのイメージかもしれないけど……、めちゃくちゃ安っぽいキャッチコピーには違いないな。

「で……？ 俺は、何なの？ 俺の記憶喪失がそれに関係あるっての？」

「さっきも言ったとおりに俺らはここに避難してきた。俺らには回避すべき敵がいる。そいつらに下手に居場所を悟られないためにお前の記憶をロックしていた。保険のつもりだったが、それが嚴重に効きすぎて、どうやっても全く思い出させることが出来なくなってしまった。そのため、お前にはあるべきあっちでの最低限の記憶さえ一切リセットされた状態で、ここでの記憶が全てとなった」

「—————.....」

.....
.....
.....
.....

.....全く——、よく出来た話だな.....。異次元？ 敵？ なんだよそれ。現実逃避もいところだ。真剣に考えられるわけがない。頭が混乱するどころか、あまりの内容に妙に冷めてきた。波留兄の口からこんな話が出てくるなんて予想外も遥かに超えてる。妹まで巻き込んで、花織や征哉まで.....。

いつの間にか外は夕陽も沈みかけて急に部屋が暗く感じた。こんな暗い空間にいるから余計におかしな雰囲気になるんじゃないか？ 脱力したまま中腰になって真上の電気のひもを引っ張った。白熱灯の淡いオレンジ色はあまり雰囲気が変わったとは言い難いけど。そのまま元の位置に座る気にならず、ベッドの上に腰掛ける。誰も一言も発しない。花織がしきりに何か言いたそうに俺に視線を向けたり逸らしたりする以外、波留兄も征哉もそれぞれ考え込んでしまってるようだ。比呂は無心っぽいけど。

「——……。まだ、続きあんの？ 聞いた方がいい？ 俺」

「お前、全く信じてないだろ」

俺のやる気のない問いに見かけとかけ離れた低音で征哉が答えた。男から見ても可愛いって言われてる顔が、下からありったけの眼力を込めて睨みつけて来る。

「作り話じゃねえんだよっ。俺も花織も波留も比呂も！ お前のためにここにいるんだよ！」

「俺のため？」

「征哉、落ちつけよ」

「だってこいつっ！」

言った矢先、いきなり立ち上がると瞬速で征哉が俺に掴みかかってきた。同時に俺の左側で比呂が立ち上がる気配。

瞬間、花織と波留兄の叫び声の様な大声が重なり、波留兄の長身が比呂に向かってスタートダッシュした。

「だめ！ 比呂っ！」

「ばかっ！ 比呂！」

一瞬遅れて部屋が大きな風圧と一緒に真っ白な閃光で埋め尽くされ——……。！

.....？

何が何だか、ベッドの上で後ろ手に自分の体重を支えた姿勢のまま、目の前の出来事にボ一然となる。ふと肩口にかかる重さに我に返ると、目の前にいたはずの征哉が背中を丸め、額を押し付けて呻いていた。

「征哉？」

「い.....てっ.....——」

征哉の両肩に手をやって、ゆっくり離してみる。左手で手首を抑えた征哉の右手の甲がぱっくり割れていた。真っ赤な血が湧き水みたいにどくどくあふれ出し、フローリングの床に血だまりが広がっていく.....！

「征哉っ！ 波留兄！ 早くっ止血止血！ 何かないっ？」

「花織！」

「あ、うんっ。貸して、征哉」

花織は四つん這いになって急いで近づくと血みどろの征哉の右手を手に取り、もう片方の手を上から傷口にかざした。眼の前で、あふれ出してくる血がみるみる逆流していき、あっという間に血みどろの中に皮膚の下の肉をさらけ出した痛々しい傷口だけが残った。まるで立体映像で逆戻しにそのテの映画を見てるようだ。俺は瞬きも忘れて目を見開いたまま静止してしまった。

「ごめん、あたしの力じゃここまで。痛いよね、ごめんね」

「なんで花織が謝るんだよ。それよりほんと助かった、お前がいて」

なんだなんだなんだ？ 混迷を極めた意識の遠くでは波留兄の怒鳴り声が聞こえてくる。

「比呂っ！ 大バカ野郎が！ おまえ仲間傷つけてどうすんだよ！」

「継承者を攻撃しようとした」

「程度を知れてんだよ！ 殺そうとしたわけじゃないだろっ？ 咄嗟に花織が制御効かせたからこの程度で済んだものの、ただでさえここじゃ力が暴走すんだから、無闇矢鱈に使うんじゃないよ！」

————…つまり、これが異次元の力ってことか？ 比呂が征哉を手も触れずに傷つけて——
かまいたちみたいに——、どうやったんだかそれを花織がガードして、征哉の血を手をかざす
だけで逆流させて止血して……。征哉も波留兄も当然のように受け答えしてるし。朝の瞬間移動
も異次元の力？ 俺もそうなの？ 俺も？

ええいっ！ 待て俺！ やばいぞっ！。また混乱の無間地獄に陥るところだ。いい加減落ち着
こう！ もう、いい加減パニくるのもやめようぜ。深呼吸だ！ 深呼吸——。落ち着け、こ
れが現実だ。目の前で、起こったことが現実だ。トリックじゃない。よし、確認確認。

「波留兄、花織、征哉、」

ゆっくり、はっきり呼んでみる。皆の視線が俺に集中したけど、俺の目線は宙を漂って考えを
なんとかまとめる努力をする。

「えーっと、皆、絶対、俺を嵌めようとしてるわけじゃないんだよな。こんな手の込んだトリッ
クないって、う～ん……、う——ん……、だから、信じちまうぞ、信じるぞ、俺。征哉の傷口
も、血も、どう見たって本物だもんな。皆、芝居してるわけじゃないんだよな」

「継承者、」

「え？」

比呂の通る声が、思考中の俺の脳に割り込んできた。立ったままの波留兄の体の向こうから余
計華奢に見える体を覗かせ、こっちをじっと見つめてる。

「比呂だ。今、自分の名前が入ってなかった。自分は継承者の一の守護者だ」

「その、継承者って……」

一個一個声に出して、何とか頭を整理しようと頑張っている俺の向かいから、今度は征哉の声
が割って入ってきた。

「比呂、一の守護者なのは認めるけどな、俺たちの方がお前より十年以上海翔の傍にいるんだ
ぞっ。お前だけじゃねえんだよ。いい加減うぜえよ。そのアピール」

「征哉……」

容赦ないっつーか何っつーか……。ま、こんな怪我させられて頭にくるのは分かるけどさ。

「分かっている。ただ、自分は継承者にまだ名乗っていなかったから言ったまでだ」

「あー、そ。お前、波留か花織にまず常識習え。それからしゃべれ。いってっ！」

「動かないでよ、征哉。手当てしてんだから。でもこれ、病院行って縫ってもらわないとダメだ

よ。きっと」

「征哉、気持ちは分かるけどあんまりいじめてやるなよ。海翔、薄々予想してるだろうけど継承者ってのはお前のことな」

「へ？ ああ、あー、そう……。何の？」

「偉大なる力」

瞬時に答えた比呂に、先刻のセリフは何処へやら珍しく波留兄が感情露わに突っかった。

「あ〜、もう！ 征哉じゃねえけど、お前はしゃべんなくていいから比呂！ 直球すぎて話がまとまなくなるんだよ！ まあ、いずれ引き継ぐ特殊な力ってとこだ。俺たちの世界にとっては何よりも重要な力で今のとこ海翔、お前にしか引き継げない。けどそれを横取りしようとするやつらがいる。それでお前は常に狙われる羽目になって、俺たちがお前を守る役割なわけ。大体こんなとこだ。理解できるか？」

「ん————……」

理解というより自分のこと言われてる実感がまるでない。まあ……、おおよその立場は何となくわかった。多分。ゲームの設定説明受けてるような気分だけど。

それより、皆にしゃべるなど言われて比呂が少し可哀相じゃないか？ 当の本人は見た感じ、傷ついた風でもなく口を閉ざして、いつもの人形のような無表情に戻っただけだけど。なんかこの連中は比呂に冷たいよな。いつもなら率先して面倒みそうな花織が全然らしくなく、よそよそしいし、征哉はイライラ敵意むき出し、肉親のはずの波留兄まで、肉親ゆえか？ でも厳しすぎるだろ。

「比呂、さん……？」

「比呂でいい」

素晴らしい瞬発力で比呂が答えた。心なしか嬉しそうに感じる。水分の多い瞳のキラキラ度が増したようだ。名前を呼んだだけで？

「比呂」

「なんだ？」

キラキラ黒眼でまっすぐ俺を見たまま波留兄を押しつけて前に出てくる。なんだこの可愛い生物は。なんかわからないけどワクワクして次を待つ子犬みたいだぞ。見えない尻尾がせわしなく振られてるのが見えるようで思わずニヤケそうになる顔を引き締める。やばいやばい、またその他三名にしかめっ面されるところだ。

「征哉の怪我、比呂がやったんだよな？ 波留兄も言う通り、これやりすぎだから、こういう場合はちゃんと謝らないと。な？」

言われてる意味が分からないのか、俺の眼を見たまま比呂がフリーズした。一回瞬きした後、ゆっくり征哉の傷口に視線を向ける。それからもう一度確認するように俺に視線をよこした。

「謝るって、何だ？」

「はい？」

そこからか！ 謝ったことないってどういう環境で育ったんだよ。いや、謝ることがない環境？

「そういうとこなの？ 比呂がいたとこって」

「いや、比呂が特殊なんだよ。一の守護者として必要なこと以外は教えられてないから」

波留兄の眼がどこか憐れむような視線で比呂を見下ろす。そんなことは意にも介さず、比呂もベッドに座る俺を弱冠見下ろす形で真剣な眼差しを向けてきた。

「継承者を守るのに必要なことであれば覚える。教えてくれ」

「あ——……、えっと、教えるのはいいけど——……、あのさ、その前に、継承者って呼び方とりあえずやめてもらっていい？ 海翔でいいよ」

「海翔」

黒い大きな潤んだ目で見つめられ、きれいな声で名前を呼ばれてまたまた意識を持ってかれそうになったその時、

「あいつて！ 何握ってんだよっ花織！ いってーよ！」

「あ、ごめん。もうっ、早く病院行こーよ！ 征哉っ早く！」

「ったく……焼きもち焼いてんなよな。いてっ！ 俺に当たるなよ」

小声でぶつぶつ言う征哉の頬をつねって傷ついてない左手を引っ張り上げ、花織は半分征哉を引きずるように玄関に向かった。波留兄が後ろ姿の二人に呼びかける。

「花織、征哉、何かあったらすぐ連絡入れるから、そのつもりでいてくれ。一気に最悪のパターンに突入するかもしれないからな」

「……わかった」

二人とも無言で波留兄を見てから声を揃えて返事をし、そのまま靴をひっかけて部屋から出て行ってしまった。

覚悟 ～ 信じられるモノたち

征哉と花織がいなくなっただけで随分部屋が空いた気がする。波留兄がやれやれという感じで片膝を立てて座り込んだ。俺はもともとベッドの上に座ったままだったけど、もう一人、立ったままの比呂と目が合う。

「比呂……も、座れば？」

「ん、」

そのまま素直に座りかけた比呂の髪が、目の前できれいな軌跡を描き波打って拡がった。シャンプーのコマーシャルにそのまま出ても絶対おかしくない、さらさらの細い髪の毛の束が元の位置に落ち着くと、比呂は立ったままじっと窓の外を見つめて静止した。緊張した後ろ姿に波留兄も同じ方向を見て神経を張り詰めたように動かなくなる。一人だけついていけず、どうすればいいかわからない俺もとりあえず同じ方向を見てみた。逢魔ヶ時。外はすっかり暗くなってきている。でもどう見てもただの夜寸前の風景だ。何が見えるんだろう。いや、感じる？

「学校で捉えた波動と同じだ。一瞬で通り過ぎて行ったが」

「ああ、でもいい気はしないな。条件はあっちも同じだからそう易々と仕かけては来ないだろうけど。花織と征哉を帰したのは失敗だったかな」

「何？ もしかして敵ってやつ？」

「そう、お前を狙ってる」

「えーっと、まさか命狙われてるとかじゃないよね」

「残念ながらそう」

「え……」

全くいつもと変わらない調子でさらっと言ってくれる。けど、言葉の意味が理解出来てくるとだんだん心拍数が上がってきた。

「ちょ……、ちょっと待って。俺、殺されるかも、ってこと？」

「それは絶対はない。継承……、海翔は自分が守る」

「俺も一応そのために居るんだけど」

「……」

……———どうやら、本気で何か覚悟を決めなきゃいけないらしい。毎晩見ていたリアルな夢での心境が、こんなところで活かされることになろうとは。

正直、言われたこと全てを実感持って認識したとは言い難い。けどとりあえず、信じる方向で考

えることにした。一体俺が何なのか、何が理由で命を狙われる羽目に晒されるのか、詳しいことは今聞いても既に許容範囲はいっぱいだ。ただ、今迫ってる危機と独りじゃないってこと、それだけしっかり認識出来れば何とか対処できる気がしてきた。

そうだ。独りじゃない。

うろたえかけた俺に、見かけとは裏腹のびしとした口調で、自信たっぷり即座に答えてくれた比呂。反対に緊張感のない日常会話の延長のように言っただけのけた波留兄も、むしろ余裕たっぷりで二人とも頼もしいったらない。

「————波留兄、比呂、めっちゃ恥ずいこと聞いていい？」

「なんだよ」

「なんだ？」

改めて見られると余計恥ずい。けど、もう一度しっかり確認しておきたい。

「信じて、いいんだよな？ 俺、正直、頭ん中もういっぱいなんだけど、波留兄と比呂と征哉に花織。四人のこと、ホントにホントに信じて、いいんだよな？」

波留兄のでっかい手が、ガキの頃よくしてたように俺の髪をくしゃくしゃに撫でまわした。

「お前に信じてもらえないと、俺らの方が惨めだぜ？ 良かったよ。あのまま変人扱いされた上、全部聞かなかったことにされるんじゃないかって、真剣に悩んじまった。海翔、初めにも言ったけど、俺たちは何があってもお前を裏切らない。これだけはどんなことがあっても絶対だからな。全身全霊で信じてくれていい」

「……————」

穏やかながら力強く断言され、とたんに顔の温度が上昇してきた。やばい……！ 言われてるセリフはやっぱり赤面ものだけど、なんかめっちゃ嬉しいんですけど。

なんだかんだ言っても、俺は天涯孤独だと思っていたから。無条件な絶対的な繋がり、養父母には悪いけどそういうものにいつもどこかで憧れてたんだ。

血のつながった楽しそうな家族を見て羨ましく思わないわけがなかった。花織や征哉や他の家族を見て、家族の話をする奴らを見て、ホントに俺は独りなんだっていつも感じずにはいられなかった。

だから今日の前で波留兄に、血のつながった兄貴が可愛い弟を見るような眼差しを向けられて、なんかすごく胸に迫るものが込み上げてきてしまった……！ 感極まりだ。眼え放せねえし。なんも言えねえ。でも、頑張っって絞出す。

「あ、ありがと……」

波留兄は女殺しの笑顔でにっこり笑うと再度俺の髪をくしゃくしゃ撫でまわして手を離した。

「……波留兄、で、命を狙われている俺としてはこれからどうすればいいんだ？ 家に帰っても平気？ 養父母には俺のことで余計な迷惑掛けたくないんだけど……」

「大丈夫だよ。お前んちは征哉が結界張ってるから、一番安全な場所だ。むしろ外に出たときが危ない。今までは俺か征哉か花織の誰かが気をつけてればそれで終わったけど、居場所を知られた以上、これからはチームプレイでいかなければ対処できないだろうな。俺と比呂は攻撃専門。花織と征哉が守備とサポート役だ。一応、お前も俺らと同様の力は使えるはずなんだけど、それはまた追々な」

「……わかった」

最後の一文がかなり頭に引っかかった。俺にも同様の力が使える？ 比呂みたいな？ 花織みたいな、征哉みたいな？ 気になったけど、とりあえず素直に頷いておく。殺されるかもしれないと分かった今———二人は絶対ないって言うてくれたけど———急に養父母の顔が見たくなってきた。一度ゆっくり気持ちも整理したくて家に戻ることを優先させた。

「じゃあ、俺、今日は家に戻るわ。何かあったら連絡入れるよ」

「自分も行く」

「え」

立ち上がった俺を、濡れた大きな黒曜石の瞳が、まっすぐ力強い視線で見上げてきて、きっぱり言い切った。ちょっとやそっとじゃ揺らぎそうにない。

「傍に居た方が確実だ。特に夜は危険度が増す。紅も響も油断できない。結界も手放しで安心できない」

「それ、征哉が聞いたらまたあいつ切れるぞ」

「比呂、まさかこれからずっと傍に居るとか言わない、よな……？」

「その方が確実だ。他に最善策があるのか？」

最善策……。そりゃ、それが一番かもしれないけど無理だろ……。いろいろと。どう説得したもんか。困惑して波留兄に眼で助けを求める。

「とりあえず、すぐ隣だけど家まで送る。晩飯の後、お前んちで皆で宿題やるとか何とかおばさんに言って口実作っとけよ。花織と征哉には連絡入れとくから。比呂は俺が挨拶がてら後で連れて行く」

「……了解」

「比呂も、いいな？」

「どうして、すぐ傍に控えているのが駄目なんだ？」

あ～、やっぱりだ……。

「気にすんな、海翔。先に進めやしねえ。比呂、後で説明してやるからちょっと置いとけ。そんじゃ、送ってくから行こうぜ」

比呂の疑問をバツサリ切って、波留兄が玄関に向かう。無表情で黙り込む比呂。何を考えてるのか全く掴めないけど、納得はしてないだろうな。比呂の世間知らずの質問攻めには、正直、先が思いやられる。まだまだこれから苦労しそうだ……。

回想 ～ 告白

南は終業時刻になって真っ先に職員室を後にした。あれから一向に気分は収まらず、唯一、職員室以外でじっとしていても不審がられない資料室で、授業準備をするフリをして時間を潰した。

毎日毎日、本当にどうしてこうまでして生きていかなければならないのか分からなくなる。一生食べていける金さえあれば、誰にも迷惑掛けることなく引き籠りでいられるのに。そんな究極に都合のいい、何もせずに叶うわけのない望みをいつも抱かずにはいられない。生きていくためには働かなければならず、働けば嫌でも人との接触が発生し、嫌な思いばかりする。もともと、望んでなった職業だったのに、どこで道を過ったのか。

そんなの、あの時、あいつのせいに他ならない————。

鳥羽愛美。二年前、現在とは違う高校で副担任として勤務していた南の元、そのクラスで彼女はいわゆる裏番の顔を持った生徒だった。

その頃の南は教員生活にもすっかり慣れ、今となっては考えられない位、むしろ毎日が遣り甲斐に満ちて充実した日々を送っていた。

何がきっかけだったのか、思い返しても全く分からない。ただ生理的に受け付けただけだったのか、なんかムカつく、その程度だったのかもしれない。確かめることはもう、永遠に出来ない事のだが、気づけば南は愛美の標的になってしまっていた。

愛美は権力者の親を持ち、誰もが振り返るほどの美少女で性格も表面上はとても可愛らしい女の子だった。しかしその実態は、我儘の塊で、正に悪役の女王様宜しく人の気持ちを遊び、徹底的に踏みにじるのを楽しみにするような少女だったのだ。

「あの、大丈夫ですか？」

南は不意に声をかけられて、不毛の記憶の中からいきなり現実に戻された。いつの間にか、周りの景色はいつもの乗車駅のすぐ近くのものだった。全く意識せずに思いふけたまま歩いていたらしい。そして、これも全く意識がなかったのだが、自分は今、帰路に就く人並みの行き交う、駅前のコンコースのど真ん中に立ち尽くしていた。

声をかけてくれた女性の方をゆっくり振り仰ぐ。南も女性にしては背のある方だが、相手は更

に五センチほど目線が上にあった。履いているヒールのせいかな。真っ黒の髪を無造作に頭頂部でまとめていてゆるく後れ毛が顔に掛かる。それさえも彼女の美貌を引き立てる計算されたヘアスタイルのようで、紅い唇と共に白い肌を余計に際立たせていた。こんな美女がこんな街に存在するものなのか。同じ女性でありながら、南は暫く見とれてしまった。

「あの？」

女性が少し戸惑ったように小首をかしげて問い掛けて来る。じっと見つめてしまった非礼に我に返りそれでも目が離せず、呟くように言葉を落とした。

「あ……、すみません……。あまりにも、綺麗な方で……」

「あら、有難うございます。それより、大丈夫ですか？ どこかお体の具合がよろしくないのではありません？」

こんなに綺麗な女性に優しく心配そうに声をかけられ、見ず知らずの相手だというのに、ふいに胸に込み上げてくるものが南を襲った。途端にそんなつもり毛頭なかったのに涙が溢れ見る間に頬を伝い零れ落ちる。その事実には南自身が一番驚いた。慌てて口元を押さえて顔を伏せる。

「あ……、すみません。なんだか、急に……」

「構いませんわ。もしお時間が宜しければ何処かに入りませんか？ 顔色も良くないようですし、何か思いつめるような辛いことがおありでしたら、通りすがりの私などで宜しければお話し相手になりますよ？」

どうしてこの女性は自分なんかになんかにこんなに優しいのだろう。もしかしたら宗教の勧誘か何かかもしれない。いや、きっとそういう類なのだろう。それ以外で優しくされる理由が思い当たらない。そうだとしてももう、どうでもいい。付いて行って話を聞いてもらいたい。誰にも話せなかった話を……。

「聞いて、いただけますか……？ あたし——、人を……、殺してるんです……」

気づけば、駅のホームだった。もうすっかりあたりは暗く、ホームは帰りのラッシュでごった返している。この空気、この感覚、数年前にも同じ場所、同じ時間に立っていた気がする。今日、何があったんだっけ……。そうだ、鳥羽愛美。あいつ、もう許せない。もう、耐えられない。

『南センセ、辛い？ 死ねば？』

彼女は職員会議室で放心状態のあたしに向かって、これ以上はない優しい天使のような微笑みでそのセリフを言っていた。

自分さえ我慢していればいいと思っていた。子供相手に本気になることはない。ただ、忠告だけは怠らないように。あたしは十分に大人の対応をしてきた。だが、彼女の下準備は用意周到、完璧だった。気づけば誰もあたしの言うことを信じる人間は周りにいなかった。

あたしが何をしたっていうのだ。彼女に何かした？ 小学生レベルのいじめから始まって、毎日毎日、飽きもせずクラスメイトまで巻き込んでの授業妨害、ボイコット。挙句の果てに男性教諭とのあらぬ噂を触れまわし、今日は――。

苦痛の日々の中、唯一の安らぎだったひとりの男子生徒との時間。鷹島速人。よく授業準備など手伝ってくれ、いつも笑顔で冗談を言って和ませてくれていた。必然的にその生徒によくものを頼むようになり、他の生徒より話す時間も一緒にいる時間も圧倒的に多かった。いつの頃からか、相手を生徒以上の想いで見ていたのも確かだ。相手もそうとしか思えない言動を取っていた。だから……。でもそれさえも彼女の仕掛けた罠だった。あたしは、見事に踊らされたわけだ。

『南先生、あなた、鷹島くんのことを付け回しているって本当ですか？』

『はい？ 何のことですか？』

『鳥羽くんの方に鷹島くんから相談があったそうですよ。恋愛関係を迫られて困っていると。それ、本当ならあなた、犯罪ですよ』

いつにない中年の担任教師の強い口調。その背後、数メートル離れた階段に続く廊下の角から、愛美が制服を着せられた着せ替え人形のように佇んでいた。その可愛らしい口元がうっすら笑う。愛美の向かい側には男子生徒がひとり、こちらに背中を向けて立っている。愛美に即されて振り向いた無表情の顔は、―――彼だった。そして、見たことのない酷薄な笑顔をあたしに向けた。

————あんたみたいなのはあに誰が本気になると思ってんの————

あたしは、その男子生徒が愛美とグルだったことの方に、目眩がするほどの酷いショックを受けてしまい、全く反論することができなくなってしまった。

あの学校は鳥羽愛美の王国だった。よくもここまで、と感心するほどに、彼女のシナリオ通りに周りが動く。あたしは愛美の暇つぶしのおもちゃ役。彼女もここまでくれば楽しくて仕方ないのだろう。止めるなんてとんでもない。どこまで自分の思い通りに出来るのか、歯止めが利かなくなりどんどん感覚がマヒして悪意がエスカレートしていった。生きている人間が相手だということが全く欠落している。

でも、あたしは違う。あんたなんかに屈しない。てゆうか、あんたこそ生きてるだけで存在が罪だわ。排除しないと。早く、これからも被害者が増える前に。あたしのような。

そう、思い知らしめてあげる。あたしを標的にしたことを心底後悔させてあげる。

同じホームの反対側に電車が滑り込む。電車を待つ人と、降りる人でホームがあふれかえる。アナウンスがすぐにこちら側にも電車が来ることを告げた。ごったがえす人波の中、視界の端に愛美の姿が映った。ほぼ先頭の位置でひとりで電車を待っている。

近い。手を伸ばせば触れる距離。

今しかない。

ホームはあふれかえる人、人、人。

電車が警笛を鳴らし滑り込んでくる。

手を伸ばす。

思いっきり素早く、確実に、力強く。

押した瞬間に手を引っ込めた。

走ってくる電車に向かって押し出した瞬間、相手はひきつった顔でこちらを振り返った。まるでスロー再生を見ているようだ。

続いて内臓を引き千切られそうな、空気を切り裂く長いブレーキ音が駅に響く。実際、ソレは重量級の冷たい鉄の車輪に引きずられて肉の塊と化しているのだろうけど。あたしは周りに溶け込んで放心状態を装った。すぐ傍で様々な叫び声が共鳴し、そこかしこでパニックが起こる。後ろの方へ伝達ゲームのように事情が呑み込めていない人々へ状況が知らされていく。

「人身事故！ 人が電車に轢かれた！」

「なにになに？ どうなってるの？」

「自殺？」

「轢かれたって」

「誰が？」

「男の人みたい」

え？

「離れて！ 離れて！」

「事故が起きました！ 申し訳ございませんが電車、暫く停車いたします！ すぐに警察が来ますので目撃された方、事情聴取にご協力お願いします！」

駅員が飛んできて、現場付近を封鎖に掛かる。すぐに警察も第一陣が駆けつけてきた。

「どなたか、瞬間を見ていた方、いらっしゃいませんか？ ご協力お願いします！」

「見てた？」

「男の人でしょ」

え？

「五〇代ぐらいの人だったよね」

「そうだった？」

まって。今は、いつ？

「男性です！ 男性！」

押し出した瞬間、振り返ったひきつった顔。

あれは……。愛美じゃない。

「おめでとう。これであなたを苦しめる人間が、またひとり消えましたよ」

艶を帯びた声が耳元で囁く。何を言われているのか、すぐには理解出来ない。まさか、見られた？ ゆっくり後ろを振り返る。

「あなたは……」

白い肌を引き立たせる、ゆるく波打った真っ黒な長い髪の毛の房。形の整った紅い唇。妖艶な美貌の女性がゆったり微笑みかけてくる。あの、女性だった。

と、いうことは？ あれは過去の出来事ではないの？ まるでタイムスリップしたようにいやにリアルだったけど……。

もう一度落ち着いて思い返す。

押し出した瞬間の、あの生々しい手の感触。振り返ったひきつった顔。

あれは、愛美じゃない。ごつごつした脂ぎった顔。学年主任。

あの、男だった。

———そうか、あの男も消えたのか……。これでまたひとつ苦行から解放された……。

もう一度、電車の方を見る。今ではすっかり警察に包囲され空間が出来つつある先頭車両の方へ。ふと、ホームの上に目を落とすと、小さな塊が目に入った。芋虫の様な、短くて太い塊。先端が赤く見える。どうした弾みからそこに存在するのか、それは、引き千切られた指だった。

視界がぶれる。目が離せない。するとその指がひくひくもがき出した。まるで指さす様に位置を変え、こちらに先端を向けた。そのままそれこそ芋虫のようにゆっくり這って自分の方に迫ってくる。周りは誰も気付いていない。来るな……。いや。来ないで。

嫌……。いや……。い……。や……。

「いやあああああああああ——っっっ！」

今頃になって、本当のパニックに陥った南を、目の前で壊れていく人間を、紅は満足そうに見つめた。表面上はあくまでも周りに合わせた姿勢を貫く。

「大丈夫ですか？　大丈夫っ？　落ち着いて！」

いかにも親切な、気丈な女性を演じて南を支えた。南は紅に触られた瞬間、魂が抜けたようにその場にへたり込んだ。眼は見開かれ、口は叫んだ形のまま。呼吸をするのも忘れてしまったような南を、抱えあげようとした紅の反対側から別の手が伸びてくる。響だ。視線を合せ進行を確かめ合う。

南の叫び声に一瞬静まり返った周りからざわめきが蘇り、警察に遅れて到着した救急隊員に声をかけられる。

「大丈夫ですか？　その方。心神喪失状態のようですが、運びますか？」

「いえ、ちょっとショックを受けただけですわ。こちらで暫く休ませます。ご親切にどうも」

振り向いて答えた紅の美貌に南より彼女に心を奪われ、若い救急隊員はそれ以上強いることもなく、暫く見送った後名残惜しそうに持ち場に戻った。

一向に人の減ることのない駅構内を、紅と響で放心状態の南を抱え、ごった返す人波を掻き分けなんとか改札を抜けた。

「あ——っ、くそ！　うぜえ！　全部消してやりてえ！」

「巻き添えはごめんだよ！　あたしだって嫌って程我慢してんだからっ」

爆発寸前の響をぴしゃりと言葉で打ちすえ、人のいない空間に入る。

「準備はいいね？」

「ああ、完璧。調整は任せる」

「了解」

そのまま三人の姿は一瞬でその場から消え失せた。

波留のアパートから五分程の駅に近い総合病院。運よく、征哉はすぐに右手の手当てをしてもらえた。処置室を出ると、人影もまばらな救急外来の受付前の椅子で、花織は自分のつま先を見つめてじっと考え耽っている。征哉がその茶色がかった柔らかい髪で覆われた頭を小突くとやっとな顔をあげた。

「あ、ごめん。どう？ 手」

「ん。四針縫った。比呂のこと考えてたのか？」

「ん————、それだけじゃないけどね。行こ」

「まだ金払ってねえから。ったく、比呂に治療費請求しても埒あかねえだろうから、波留に領収書押し付けてやろうかな」

支払いを済ませて出口に向かうと、外はすっかり夜に染まっていた。暑くもなく寒くもない。春と梅雨の間の心地いい空気があたりを満たしている。

何だか、駅の方角が騒がしい感じもしたが、大して気にすることもなく人通りの少ない夜道を無言のまま並んで歩きだした。暫くして、征哉の方が先に口火を切った。

「海翔のやつ、波留の説明、信じたと思うか？」

「ん————？ 五十パーセントいくかいかないかってところじゃない？ 口で言われただけじゃ急には無理だよ、やっぱり……。比呂が暴走して目の前であたしとか、力使う羽目にならなきゃ絶対信じなかつただろうしね。そう考えたら彼女の暴走も結果的には良かったのかも。征哉は災難だったけど」

「まあ、それなら怪我した甲斐もあるけど……。————とうとう来たって感じだな」

「どっちにしてもあたしたちも海翔の記憶がないのを放置し過ぎたんだよね。出来るならこのまま皆で、本気でここに一生いたいくらいだったからさ」

ホントに残念そうな声が隣から返ってきた。ほんの五センチほど自分より背の低い花織を横目で見るが俯き加減なのと、肩までの緩いウェーブのかかった髪が影を作って表情が見えない。

————十二年前、皆で海翔をかばって元いた世界、迦霊界からここ、影霊界に来た時は征哉も花織も海翔と同じまだ五歳だった。それでも生まれた時からその資質を見定められ五歳でも十分にその役割は当たり前のように刷り込まれていた。七歳上の波留が二人の教育係も兼ねていて、ここでも継承者を守るための必要な修練は重ねてきた。

征哉と花織の場合、波留や海翔、比呂と違って精神のみこの影霊界へ移動してきている。同じ五

歳でも海翔とは明らかに持って生まれたモノが異なり、二人はこちらの世界に肉体ごと移動するには幼すぎた。精神力で肉体にかかる負担をカバーできるまでにはまだ成長しておらず、結果、本来の体を捨てて、こちらの世界でそれぞれの肉体の持ち主だった精神を乗っ取ることでこの世界に存在していた。征哉と花織という名前も、こちらの体の名前であり、本名ではない。しかしもうすっかり二人とも本名より定着してしまっていた。

出来るならこのまま一生ここで、なんて、本来この身体の持ち主だった『征哉』や『花織』を精神的に抹殺しといてよく言えたセリフだと思う。とは言え、征哉も夢見ないことはなかった。あまりにも普通の人間に育った海翔と一緒に居て、自分を本当の息子と信じて疑うことを知らない、『征哉』の両親の元で育てられて。花織もきっと同じ気持ちだろう。元の世界に戻ればこんな暢気な学生生活なんて送っていられたもんじゃない。

「でも、いずれ帰らないと。向こうは向こうでやらなきゃいけない使命がある。居場所を知られた以上、やつらが絡んでくればこっちでも死人がいくら出てもおかしくないしな」

「わかってる」

さっきとはうって変わって自分に言い聞かせるように、しっかりした返事が返ってくる。相変わらず俯き気味で表情は見えないままだったけど。

再び沈黙が二人の間に漂い始めた時、征哉の携帯の着信音が鳴った。

「波留からだ」

足を止め、画面を見て目線があった花織に相手の名を告げる。少し緊張が走る。花織の表情もひきしまり、じっと征哉から視線を外さない。通話をオンにして相手より早く口を開いた。

「なに？緊急事態？」

『いや、とりあえずまだ大丈夫だが、お前らが出てった後近くに気配は感じ取った。相手も様子を見ているようだ。それで今夜、お前花織も一緒に海翔んち泊まってくれ。比呂も行くから』

「比呂も？」

思わず眉間にしわができてしまう。じっと目線を合わせていた花織の顔も怪訝そうに歪む。

「……ああ、……分かった。替わる」

波留の説明に渋々承知し、無言で花織に携帯を手渡した。花織も訝しげな表情のまま受け取った。

「もしもし？うん、.....うん。.....———」

波留に受け答えする花織を横目にゆっくり歩き出す。征哉の携帯で話しながら数歩遅れて花織もついてきた。白い包帯に包まれた自分の右手に目を落とす。比呂か.....。どうも比呂とは相性そのものが合わないらしい。確かに美少女ではあるけれども、あの常識外れの無知っぷりは征哉の我慢の度を遥かに超えていた。波留から話には聞いていたがあれ程までとは。これから先、嫌でも同じ目的で仲間として動かなければならず、避けては通れない現実には先が思いやられた。海翔は気にしているようだったが、花織にとっちゃそれが比呂に対する弊害なんだろう。鈍感な海翔の莫迦は花織の気持ちには全く気付いていない。まあ、でも女同士なんて恋敵だろうが何だろうがどう転ぶか解ったもんじゃないからな。

「何考えてるの？ 征哉」

「あん？」

とっくに波留との通話は終わったようで、花織は携帯を征哉の目の前に突き出してちょっと拗ねたような顔を向けてきた。

「お前、比呂のお守頼まれたんじゃないかねえの？」

「まあね。ま、いいんだけどさ」

「いいのか？ 海翔の莫迦、ずっとあいつのこと気にしてるみたいだったけど」

「だから何だって一のよっ！ 海翔がどう思おうとカンケーないでしょ！ 人のことだとホントうるさいよ征哉はっ」

だって、ばればれだっつ一の。ムキになって反論しながら花織は征哉の制服のポケットに携帯をつっこんだ。そのままさらに拗ねた顔でソッポを向く。これで自分は隠してるつもりなんだからな。まあ、そういうところが可愛いちゃ可愛いんだけど。

「夕飯、どうすっか。家に電話して海翔んちにそのまま飯、持って行こうかな」

「あ、あたしもそうしょ」

びっくりするくらい切り替えが早いのも花織らしい、いいところかもしれない。少し気持ちが軽くなった状態で、夜道を二人で並んで海翔の家のそれぞれ向かいと隣にある自宅に向かった。

一分もかからない距離を二人にボディガードされ、家に戻った。比呂はやっぱり納得いかないのか、波留兄につつかれるまで俺ちの玄関の前で動かなかったようだ。

ホントに一体あの歳までどんな生活してきたんだか。でも比呂がそうになったのが、異世界で継承者を守る守護者になるための結果なら、継承者であるらしい俺にも少なからず責任があるってことだよな……。

養父母と夕飯を食べ、波留兄に言われたとおりに征哉、花織、比呂が来る口実を告げる。征哉が来たり泊まったりは今でもしょっちゅうだし、花織も泊まりこそしないが割と今でもよく来ているので何の問題もなかった。それより養父母とも、波留兄の妹の比呂に興味を持ってかれていた。

「ホント全然知らなかったわね。波留くんにそんな病弱な妹さんがいたなんて」

今となっては、花織や征哉が病弱と聞いて納得いかなかった気持ちがよくわかる。でも、あの世間知らずは他にうまい理由付けが思いつかないよな……。

「波留の妹なら美少女なんじゃないか？」

「うん、ちょっとすごいよ。作り物の人形みたいな感じ」

「早く来ないかしらね。楽しみだわ。花織ちゃんもアイドル並みに可愛いし、海翔くん、どっちと付き合うか迷っちゃうわねえ」

「はい？ ちょっと何言ってんの母さん」

「ここのご近所さんの若い子達は、みんな美男美女が多いから目の保養になっていいわあ。征哉くんも波留くんも可愛いイケメンだし。うちにも一人いてくれるしね」

「母さん、それ、親ばかっていうんだよ」

和やかな家族団らんだ。これがもし最後なんて言われたら、思わず泣きそうになるかもしれない。まあ、そうと決まったわけじゃないし、実際家に帰ってきて、継承者だ、命狙われてるだなんて話、余計に実感が薄れていってるのだけだ。

穏やかな空気のリビングに来訪者を告げるチャイムが割って入った。

「来た」

玄関に向かう俺の後に養母もついてきた。リビングの扉からは養父が顔を覗かせている。余程

気になるんだな。玄関の三和土に下りて引き戸の入口に手を掛け鍵を外して戸を開いた。

「波留兄？ 征哉？」

あれ——？ 違ったのか。波留兄や征哉ならいつも目の前で待機しているはずなのに、そこにはどっちとも姿がなかった。けど、俺の立つ真正面、数メートル先の門柱の外、暗闇の中に灯りを避けて黒っぽく人影が浮かんでいる。細長い、女の人？ 花織や比呂より背が高い感じだ。

「どうしたの？ 海翔くん？」

「いや……、ちょっと待って」

俺の様子に養母が不思議そうに声をかけてきた。何か、嫌な予感がする。

「母さん、中入ってて」

「何？ 海翔くん、大丈夫なの？」

「うん。とりあえず、波留兄でも征哉でもないけど、知ってる人の様な気がする」

事実、あれって、南ちゃんじゃないか？ なんでこんな時間に、しかも俺に何の用事だ？

「——海翔くん？」

「大丈夫、ちょっと出てくるわ。すぐ戻るから」

一気に心配度が増したらしい養母をとりあえず家の中に入れ、後ろ手に戸を閉めた。南ちゃんが家に来るなんて、全く心当たりないんだけど。とにかく人影の方へ数歩歩み寄ってみる。

「南、センセ？」

「蒼井くん……」

やっぱりそうだ。相変わらず消え入りそうな音量の声で、だけど南ちゃんはぴくりとも動こうとしない。灯りを避けた夜の中、門柱よりさらに数メートル離れた道のど真ん中にいるため、まさしく、幽霊のようにここからじゃ黒っぽい影だけの物体に見える。当然、表情もよくつかめない。何とも言えない異様な雰囲気、頭の中のどこかで危険信号が明滅している。俺は門扉のところでいったん立ち止まって頭の中の警告に従った。

「どうしたの？ 先生。家まで来るなんて、俺、なんかした？」

「そう……、君のせいよ」

「え？」

「君と関わったせいで、あ、あたし、は……」

なんだって———？

「先生——？」

「いえ、あ、あたしは、違う……。もう、君しか、頼める、が、いないの……。願い、蒼井くん……、これで、お願い、全部、処分、して……、あ、あたし、は、も、う……———」

得体のしれないものに耐えるように震えながら、何かをのせた右掌を俺の方へ差し出し、言葉の途中で南ちゃんの体がぐらりと揺れた。そのまま正面に倒れこんでくる。俺は慌てて南ちゃんの体を支えようと門扉から飛び出した。

「先生！」

「海翔っ！」

南ちゃんの体を受け止めた瞬間、ぶわっ、と台風のような風圧が俺たちの周りを一気に通り過ぎた！ 訳も分からず俺は南ちゃんをかばってその場にしゃがみ込んだ。

なんだなんだなんだ？

大声の主は征哉と波留兄だ。ちょっと安心。征哉が俺たちの傍に駆け寄ってくる。視界の片隅に周りを警戒して緊張した波留兄と比呂が映った。

「海翔お前っ、何ひとりでふらふら外出てんだよ！ 波留に言われなかったかっ？」

「うるせえな！ そんなこと言ったって、南ちゃんが目の前で倒れてきたんだから仕方ねえだろっ」

「南センセ？ なんで先生がここにいんだよ」

「知らねえよ。俺が聞きたい。なんか、でも、俺のせいだって言ってた」

「お前のせい？」

俺の腕の中でぐったりとした南ちゃんを二人で見下ろす。夜の中でも白い肌が目立つ。なんか印象が違うと思ったら、いつもの黒ぶち眼鏡が失くなってるのか。

「なんか……、よく見ると綺麗な顔してんのな、南ちゃんてば。初めて気付いた」

「お前なあ……」

征哉に呆れた声で脱力された。でも実際苦しそうに眉間にしわを寄せて目を閉じる南ちゃんは、十分美人で通る顔をしていたんだ。いつもがいつもだけに結構新鮮な発見じゃないか？

誰かが近づく気配と一緒にすぐ傍の地面に何かが落ちてるのに気付いた。さっき南ちゃんが差し出したモノ？ 鍵束……？

「何男二人して女性の顔覗き込んでんのっ」

見上げると仁王立ちした花織がいた。が、次の瞬間、花織の目が見開かれ、俺の視界から消えたと思ったら、俺は気を失っていたはずの南ちゃんにアスファルトの上に思いっきり押し倒されていた！ 形勢逆転、頭は打たなかったものの、肩をしたたか打ちつけられ、おまけに腹の上に馬乗りになられて、息がつまる。

「うっ……！」

「海翔！」

征哉と花織、波留兄の声が三重になって耳に響く。撥ね退けようにも、両手とも南ちゃんの足で押さえつけられて手首より下しか動かせない。すごい絞め技だ。思わず嚙めた脛を無理やり開けると、すぐ目の前、ほんの数センチ、鼻がぶつかるほどの至近距離に赤い眼がふたつ、俺を見降ろしていた。やばすぎるだろ、この距離……っ。

「せん……せ？」

「くっそ……、離れろ！ こいつっ」

視界の端では征哉が横から必死で、俺の首を絞めようとせんばかりの南ちゃんの左右の手を押さえつけていた。かなりの力を押さえ込んでるようで両手が小刻みに震えている。比呂にやられた白い包帯を巻いた右手が痛々しすぎる。

「征哉、手っ」

「お前は、気にすんなっ」

「せんせっ！ しっかりして！」

花織も征哉を手伝うように赤い眼をした南ちゃんの体を後ろへ引っ張ってくれている。

「比呂！ いいというまで絶対攻撃すんじゃねえぞ！ 解ったな！」

波留兄が駆け付け俺の頭の上から、征哉が横から、花織が後ろから、三人掛かりでやっと俺に覆いかぶさる南ちゃんの上半身を起こしてくれた。自由になった首から上だけを南ちゃんの方に向けると、赤い眼は無機質に俺を見据えたまま、ロボットのよう口が動いた。

「そう易々とはいかないようだな。継承者、場所を変えよう。ここは雑多な人の念が多すぎる」

南ちゃんの口から聞いたことのない声で言葉が発せられる。考えてみれば赤い眼も、その声も、あり得ないことだらけだ。これってどう見てもTVでよくやってる憑依現象、悪魔憑きってやつだよな。けどもう、理屈じゃねえんだ。目の前で起こっている、これが現実。パニくるより受け入れることに、だいぶ順応してきている自分がある。

波留兄が南ちゃんでないその声を受け応えた。

「お前は？ どこに行けばいい」

「条件が悪いのはお互い様だ。これの後について来るがいい」

そう言うと、まるでスイッチが切れた人形のように南ちゃんの体がぐにやりと全ての力を放棄した。

「いてっ」

「いったっ」

今まで必死で押さえてくれていた征哉も花織も力あまって後ろに倒れこむ。俺の真上に倒れこんできた波留兄は、かろうじて両手をついてぶつかる寸前でバランスを取り戻していた。

そして、俺の上に跨っていた南ちゃんは周りを一切気にすることなく、操られるようにふらふら立ち上がった。いや、実際操られてるとしか思えないし。催眠術にかかったように覚束ない足取りで、そのまま俺たちを置いて歩きだす。やっと解放された俺はその後姿を見送りながら、次に取るべき行動に頭めぐらせた。

「ついて来いって、言ったよな……。このままぞろぞろ皆で後付いて行くの？」

「まあ、あの状態で放っとくわけにもいかねえしな」

「心配すんな、結界張ってるから周りには見えないさ」

「そうなの？」

「じゃなきゃ、とっくにあたしんちや海翔んちの家の人が飛んで出てきてるでしょ」

言われてみればそうだ。あんだけ大声出して叫んだりしてたのに真っ先に出てきそうな養母の姿は見えない。周りの家もここからじゃ静まり返って見える。これが結界の力？ すげえな征哉。そういえば、

「征哉、手、大丈夫か？ あんな力入れたんじゃ傷口、開いたんじゃねえの？」

「お前は気にすんなって」

白い包帯の右手を左手で支え、さらっと流しやがった。相当痺れてるか、痛みが戻ってるだろうに、見かけによらず全く男前だよ。征哉は。

四人それぞれ立ち上がり、既に数メートル先を歩く南ちゃんの後に続く。立ち際、俺は南ちゃんが落としたモノを拾ってデニムのポケットに仕舞った。それはシンプルなキーホルダーに家の鍵らしいものと、何かの小さな鍵がふたつ付いていた。

比呂はじっと波留兄に言われたとおりに攻撃することもなく、目の前を夢遊病者のように通り過ぎる南ちゃんを見送り、俺たちが近付くと俺のすぐ前に駆け寄ってきた。そこが定位置のように先頭に立って南ちゃんの後を付いて行く。その華奢な背中にさらさらと揺れる綺麗な長い黒髪を見ながら俺はもう一度比呂に念を押しておくことにした。

「比呂、」

「なんだ？」

正面を向いたまま比呂が即座に答える。

「あの人、俺たちの学校の先生なんだ。もともと何の関係もない人だから、絶対間違っても傷つけないでくれよな」

比呂が歩きながら振り返り、無言でいつもの無表情そのままに、黒い大きな瞳で俺を見上げてきた。歩調はそのままいつまでもこっちを見ているので危なっかしいतरらない。

「比呂、前見て歩けよ。危ないだろ」

半分照れ隠しも手伝って比呂の両肩を掴み前に押し出す。初めて触れた比呂の身体は見た目よりさらに細くて、少し力を入れただけで壊れてしまいそうでちょっとビビった。だけど彼女は前を向くどころか、びっくりしたように目を丸くして、さらに俺の顔を正面から捉えようとするかのように見上げてくる。肩を掴んだのが悪かったのか、余計危ない体制になってしまった。

「んもうっ！ はいはいはいはい！ 油断するとすぐ見つめ合っちゃうんだから！ 比呂、当面あなたのパートナーはあたしだからっ。海翔もそのつもりでねっ」

またもや二人の世界になりそうだったところを、後ろから花織が割って入ってきて、比呂の右腕を取ってひっぱるように前に進み出た。俺の両手は比呂の肩から離され、空しく宙に浮かぶ。比呂は今度は花織の方にびっくりした表情をそのまま向けていた。

「あいつ、人に触られんのに慣れてないんだよ」

手持無沙汰になった両手に比呂の感触を思い返していると、ふいに肩に手をかけられて頭の上から声がした。

「波留兄」

「殺し合い以外で、触られたの、お前が初めてだったんじゃない？」

殺し合い以外——？ それって……—。

それって俺にはもう考えも及ばない、想像以上に比呂は酷い生き方をしてきたってことじゃねえか……？ いや、させられたんだ。多分、ここまで洗脳されてるってことは物心つく前から……。

「全部……、俺のためなのか？ 俺を守るために比呂がああなったんだったら、全部、俺のせいだよな……」

比呂だけじゃない。向こうの世界とやらがどんなだか全く分からないけれど、征哉も波留兄も花織も、俺のためにここに来たって言った。向こうにも親や兄弟がいたろうに全部捨ててここに来たってことか——。それからずっと十二年間も、否応なしに俺を守るためだけにここにいたってことなのか……？

「波留兄も、征哉も、花織も、俺のせいで……いって！」

波留兄に正面から拳骨でこを小突かれ、同時に征哉には思いっきり背中を叩かれた。

「アホなこと考えてんなよ？ 誰もお前のせいだなんて思ってねえつーの。ひとつ教えといてやるよ、海翔。俺たち守護者は全員の意味で継承者を簡単に殺すことができる。継承者つたって、誰もが適任ってわけじゃねえからな。けどお前にとっちゃ、幸か不幸かここにいる四人、誰一人お前を殺そうとは考えていない。そういうことだ」

ぶっきらぼうに征哉が言い放った。前方で花織がこっちの会話が聞こえていたのか、俺の方を向いてにっこり微笑んだ。片手は比呂の腕に絡ませたままだ。

「そういうこと。海翔じゃなきゃ、誰もついて来なかったよ。記憶がなくなってからは余計にね」

「ふーん……」

やっぱりイマイチ、自分がそんな大それた中心人物的な自覚がないためか、そう言われても歯がゆいだけで実感が湧かない。一体どれだけ俺にそんな力があるって言うんだ？ 記憶を失う前は五歳といえ、俺にも自覚があったんだろうか。今じゃ想像もつかないんだけど。せめて、俺にも何か結界が張れるとか、怪我が治せるとか、超能力が使えるれば考え方ももっと変わってくるかもしれない。そういや、波留兄が俺にも使えるはずって言ったよな。

「波留兄、俺にも力ってやつ、使えんの？ どうやったら使えんの？」

「ん——……、普段から訓練していて使い慣れてりゃ、何の問題もないんだがなあ……。お前の場合、十二年間全く使って来なかったから、いきなり発動させると肉体的にも、精神的にも何らかの負担が強えられるかもしれん。時間かけてゆっくり使いこなせるようになればいいさ」

「なんだ、そう簡単に使えるもんじゃないのか」

「まあ、精神力とか、集中力とか、その時の感情によって発動するモノだしな。俺たちが元いた世界、迦霊界でも全員が使えるわけじゃないんだ。俺らの様な特殊な性質をもって生まれた奴以外は、何千万分の一以下の人間が素質と訓練でやっとある程度使いこなせるようになる程度のもんだよ。ただ、お前の場合は生まれつき持っている核があるから少しコツをつかめばすぐ使いこなせるようになる、はず」

「核？」

「そ、俺たち守護者がもってるのは玉」

波留兄は俺の左肩に右腕をかけたまんま、左掌を上に向けて俺の目の前に持ってきた。それはまるで手品としか言いようがない。波留兄の広い掌から淡い光とともにコバルトブルーに光るガラス玉の様な、鉱石の様な掌にすっぽり収まる大きさの、文字通り球体の玉がゆっくり現れた。

「滅多やたら見せるもんじゃないけどな。これを使って力を発動させる。これは具現化させただけのものだから、実体はここにある」

そう言って、手を握りしめると一瞬で玉が消え、波留兄は自分の左胸を指さした。ってえ、ことは、俺の中にある核ってのも心臓にあるってことか？ 自分の左胸に手を当ててみるがやっぱりわからん。普通に心臓の鼓動がするだけだ。

「やつらの狙いはお前の核だ。それを奪って自分たちの力にしようとしている」

「力……」

「街ひとつ簡単に消せる。世界を滅ぼすほどの力さ」

おいおいおい。またまたスケールがでっかくなってるよ？ そこまで話が行くとまた冷めてきちゃうんだな。俺ってば。ホント俺ってこんなにリアリストだったのか。

だけど、事態は着々と俺の常識的現実から遠ざかっていっていた。

歩くこと十分ほど。思ったより長くかかりそうなので征哉に携帯借りてとりあえず家に電話を入れとく。都合のいい言い訳がすぐには思い浮かばず半ば無理矢理ごまかして電話を切った。

俺たちがたどり着いたそこは、学校からも見える高層マンションの豪華な入り口前だった。だっ広いエントランスアプローチに灯る白熱灯の光は、そこに立つ庶民を完全に嘲笑うかのように拒絶していた。今の俺たちには全く場違いな、一生縁がないと思われるセレブ様たちが住む世界だ。

先頭をふらふら操られて歩く南ちゃんにしても、決してここに住んでとは思えない。断言。だけど、南ちゃんはそのまま、よく見ないとガラスが張ってあることすら分からない位に、磨きあげられた透明の自動ドアの前に進んでいく。当然、セキュリティは万全のはずだが、自動ドアは予想に反して難なく開いた。

「なあ征哉、これってさ、俺たちの姿が見えないってことは、監視カメラから見たら心霊現象みたいに映ってるってことだよな？」

「まあな」

呑気にくだらないことを発してしまったが、ここに来て弱冠、周りの空気が違ってきていた。何というか、重いというか、温度じゃなく、全部撥ね退けるような冷たさというか。花織も征哉も波留兄も口数が少ない。

入ってすぐの其処はこれまた鏡のように磨きあげられた大理石？ の白っぽい床と、ところどころ高級そうな木目の入った白い壁に、床と同じような材質の天井を、オレンジ色の温かい明かりが満たした前室だった。

四畳半二つ分くらいの長方形の空間には何もなく、入って右手に入り口と同じようなエントランスホールへと続く大きな自動ドアがあり、そしてそのすぐ隣には、無闇矢鱈な奴が入らないように、セキュリティのBOXが壁に埋め込まれてあった。指紋認証用のセンサーパネルと、カードリーダー併用で来訪者を確認するためのカメラ付きの電話が付属する嚴重なものだ——って、これ位当たり前の設備なのか？

どうやって入るんだろうと思う間もなく、何なく南ちゃんはその関門も突破した。何もせずにエントランスホールへと続く自動ドアが開いたのだ。ここまで来ると一気に警戒心が強くなる。いくら姿が見えないといってもセキュリティまでオールパスで入れるものじゃないだろ。

「セキュリティ、征哉か花織が解除したのか？」

「いや、あらかじめ解除されてたんだろ」

「故障じゃなく？ 故障ならそのうち人が直しに来んじゃね？」

「紅は傀儡の力を持つ。誰かを操ってこの世界の結界を怪しまれないように解いたんだろう」

意外なところから返答が戻ってきた。比呂だ。結界……ね。そう言われればこのセキュリティシステムって現代の結界とも言えるのか。

自動ドアの向こうのエントランスホールはかなり高級なホテルのロビーのようだった。落ち着いた深い茶色の木の壁に、床は高級そうな黒に白の斑が入ったカーペットで敷き詰められている。高い三階分くらいの吹き抜けの天井、間接照明が要所要所を照らす広い空間。外からは遮断されて見えなかったけど、片面は全面ガラス張りになっていて、それに沿ってソファのセットが一〇個くらい並んでる。ここから外を見ていると安全なシェルターから異世界を眺めてるような気分だ。

物音一つしない。ロビーにかかる時計が八時少し前を差している。そんな時間だからか、俺たち以外誰もいなかった。全くの無人。別世界すぎてここがたくさんの人間が住んでいるマンションだということさえ忘れてしまいそうになった。その時。

「燃料タンクを返してもらおうぞ」

いきなり、男の声がエントランスホールに響いたかと思ったら、視界の端に居た南ちゃんの体が一気に吹き抜けの天井近くまで飛び上がった！

「うっわっ！」

今度は何のポルターガイストだっ！ 心臓が飛び出すほどびっくりしちまったじゃねえか！波留兄が後ろから腕を取って支えてくれなければ危うくその場で尻もちを付いていた。けど他の四人は驚いた顔も一瞬で、無言で南ちゃんの体を見上げたまま、次の相手の出方を待っているようだ。俺だけこんな取り乱して、バカみたいじゃない。

三階分くらいはありそうな吹き抜けの天井近くに、飛ばされた南ちゃんは、ここから見ると首つり死体のようだ。全身の力が抜けたまま、見えない何かでぶら下げられている。

「だ、大丈夫なのか……？ 南ちゃん……」

「多分……」

花織が南ちゃんを見上げたまま、呟くように俺の問いに返答してくれた。でも、多分って…。

「いや、だめだ」

「え？」

否定の声を発した波留兄に顔を向ける。瞬間、すぐ近くに何かが降ってきた気がした。何だろうと思って落ちたらしい床に視線を落とす。花織の震える声が同時に聞こえた。

「センセ……」

俺の視界に入ったモノは、何かの肉の塊だった。拳大の、ピンク色の様な、紅色の様な、汁気を帯びてかすかに湯気が立ち上ってる。

「波留兄！ 南先生が！」

今度は花織の叫び声と同時に、すぐ側でまた誰かが天井に向かって飛びあがった。俺は緩慢な速度でその軌跡の後を追う。なんとなく予想はできたんだ。最悪の画像がそこにあることを。

飛び上がったのは比呂だった。南ちゃんと違い、自分の意思で空中に静止して、そこに浮かぶ惨状を見つめている。

南ちゃんは、天井に磔にされたような姿勢で、その腹部には、ここから見てもはっきり分かるくらいの穴が開いていた。そしてそこには、天井のランダムな場所から出た、太い血管の様な長いコードが何本も蠢きながら潜り込んでいた。

どう見ても、尋常じゃない。あんな状態で普通に生きていられるものだろうか……。なんで南ちゃんがあんな目に逢うんだ？ なんで？ 俺に会ったから？

「波留兄、南ちゃん、俺のせいだって言ってた……」

「海翔？」

「俺と関わったせいで、こんな、こんな目に会ったのか？ 先生、関係ないのに……！」

「たまたまだ。お前のせいじゃない」

「でも！ 俺が普通じゃないからだろっ？ こんな、変なよくわかんねえ、命とか狙われるような人間だったから！」

「お前の核を狙ってる、あいつらが存在する限り何処に居ても犠牲者は出る。遅かったか早かったかの違いだ。一人どころじゃない。これからはもっと無差別に何人、何百人と出る」

「え……」

「比呂！ やつらの居場所が分かるかっ？」

今、何気に凄いこと言わなかったか？ 波留兄の横顔を見る。波留兄の視線は天井近くの比呂に向けられていた。

「響も紅も最上階にいる。それより」

ダ————ンっ！

地響きのような、銃声のような思いっきり叩きつけられるような音で比呂の声が遮られた。比呂の方を仰ぎ見るが、南ちゃんの傍に浮かんでいたはずの比呂の姿はそこにはなく、目標物を失った視線が天上のあちこちを泳ぐ。やっと見つけた比呂はもと居た場所から五メートルくらい離れた壁に、大の字になって埋め込まれていた。比呂を中心に堅そうな壁にはだ円形の罅が出来ていてぽろぽろと材質の破片が剥げ落ちている。だけど比呂の表情は、全くダメージを受けていないようだった。

「それより、こいつだ。海翔、こいつはもう、ただの人形だ」

比呂はいつも通りの表情でいつも通りの口調でさっきの話しを続けた。俺はといえば一瞬目の前で3D映画でも見ているような気分になって、自分の名前がそこに登場するのがとても不思議だった。これが夢ならどんなにいいか。いや、俺、ここにきてまた現実逃避してる場合かって一の。

「海翔、こいつはもう助けられない。傷つけないでいることはできない」

俺が南ちゃんを傷つけるなって言ったからか。俺が、じゃ、仕方ないから好きにやれって言ったら、南ちゃんはどうなるんだ？ 比呂はどうするんだ？

「花織、俺と征哉は最上階の元凶に向かう。お前はここでそのまま比呂のサポートと海翔を頼む」

「わかった。一対二だから海翔がいても余裕だよ。それより、気をつけてね。二人とも」

俺の外側で話がどんどん進んでる。波留兄が去り際に俺の頭をまったくしゃくしゃくに撫でまわした。

「気をしっかり持てよ。その気になれば、お前には誰よりも皆を守れる力があるんだから」

俺が、誰よりも——？

まだ思考が宙に浮いたままの俺の目の前で、また世界が真っ白に包まれた。波留兄の部屋で比呂が征哉を傷つけた時と同じ光だ。だんだん元の色に治まる中で俺の眼は南ちゃんの方角へ引きつけられていた。ほんの目の前、俺に向かって一メートルくらい先に透明の壁にぶつかって、南ちゃんの口からでた太いコードが空中で静止していた。そしてその先端に付いていたはずの部分は、すっぱり切れ味最高の刃物で切られたようにカーペットの上に落ちて、鋭い鎌をつけた三〇

センチほどのトカゲの尻尾のように蠢いていた。

ゆっくり見上げた南ちゃんの両目は暗めの天井近くでもはっきり紅く灯って見える。口から伸びたコードの様なモノは、南ちゃんの腹に侵入し蠢き続けているコードと同じモノに見えた。

「大丈夫。海翔はどんなことがあっても守るから」

少し前方で花織が力強く言っただけ。この透明な壁は花織の力か……。コードの先端を切断したのはじゃあ、比呂……？ まだぼーっとなってる俺に征哉が話しかけてくる。

「海翔、女子に守られっぱなしでただでさえカッコ悪いんだから、せめて泣き出さないように気はしっかり持てよな」

「なにっ？」

征哉の聞き捨てならん発言に漂っていた意識がやっと自分の体に還ってこれた感じがした。そうだ。征哉と波留兄がここからいなくなるってことは、男俺だけじゃん。花織も比呂も普通と違う能力持ってるからって、見かけは普通の女子なんだから俺に出来ることったら、せめて足手まといにならないことか？ ——それもなんか情けないけど……。

「さんきゅ、征哉。お前が戻ってきた時には俺だって何か力使えるようになってやるさ」

「頼もしいねえ。じゃ後でな」

「無理すんなよ。海翔」

二人はそういうと南ちゃんを警戒しながらエレベーターではなく、入ってきた自動ドアから外に出て行った。

「あれ？ あの二人最上階に行くんじゃないの？」

「外から様子見て仕掛けるんでしょ。エレベーターなんて狭い個室使ったら逃げ場ないもの」

「それもそうか」

話してる間に南ちゃんの口から伸びていたコードは、うねうねと揺れながら伸縮を繰り返し、再度向かってくる隙を窺っているように見えた。比呂はというと、めり込んだ壁から脱出して俺の正面、丁度南ちゃんとの一直線上に移動してきた。

「海翔、こいつを殺す許可を」

「は？ そんなの、出来るわけねえだろ！」

やっぱり、比呂が求めているのはそういうことだよな。でも、やれなんて言えるわけがない。

「もともとの魂も既に半分殺されたも当然だ。これはもう、皮をかぶった別のものだ。紅の操る人形だ」

「分かってるよ！ それでもさ、なんとかならねえのかよ、花織」

「海翔……、あたしも海翔と同じ気持だよ。でも、比呂の言う通り、あれはもう南ちゃんじゃない。全部吸い取られてしまった残骸だよ……」

「残骸？」

言ってる傍でまた南ちゃんを侵食するコードが南ちゃんの腹からこっちに向かい、瞬速の速さで今度は何本にも枝分かれして襲ってきた！ 瞬きする間もなく、それら全てを全く見えない速さで比呂が切り刻んでいく。そう、いつの間にか比呂の手には日本刀のような刀が握られていた。黒光りする刃が空間ごと切り刻むように残光を残して舞う。

「すごい……。さすがだわ、比呂」

霰のようにばらばらと鋭い鍔をつけた先端部分が、毛の長いカーペットの上に音もなく落ちて行く。攻撃が一時中断した。また、様子を見るように先端を切られた無数のコードが南ちゃんの元へと後退していく。

「花織、この攻撃を止めるためには南ちゃんを切り刻むしかないってことか？」

「うん……。一度浸食されつくした精神はその器がある限り、傀儡から逃れられないの。さっき、男の声が南ちゃんのこと燃料タンクって言ってたでしょ。多分、南ちゃんは奥底に溜まったマイナスエネルギー、それを全部持ってかれてる。人の念は力を使うのに必要なもの。あたしたちの居た世界じゃ他人の念も奪って、力に変えて自分のものにできる。って言っても、限界もあるしそういうこと出来るのはほんの一部の人間に限るけどね。あたしたちが闘ってる相手は、そういうことが出来る、レベルの高い奴らだってことだよ」

「……—それでも、あんな風に、比呂に粉々に切らせることなんか出来ねえよ……」

カーペットに半分量埋もれた黒いコードの欠片が、南ちゃんの残骸だとしたら……。そんなの耐えられるかよ。何とかなんないのか？ 何とか。

考え込んでいると、すぐ目の前に背中を向けて比呂が降りてきた。比呂の前方に目を移すと、南ちゃんも天上に磔の状態から、地面に降りてきていた。相変わらず操られた人形のように、首までふらふらとしながら辛うじて立っている。いや、立たされている。あんなにうようよしていたコードは何処にも見えない。だけど腹部は散々抉られ穴が開いたままだ。白昼の元ならとても

正視出来たもんじゃないだろう。血の匂いが凄い。

「南、センセ……」

南ちゃんの顔ががくと音が聞こえるように俺の顔を見て静止した。目線がまっすぐこっちを見て離れない。紅い眼が徐々に光を失っていく。元に、戻った……？

「鷹島……くん……」

「え？」

生きてる。

「……ントに、信じて、た、のに……」

「センセ？」

南ちゃんの眼から綺麗な水があふれ出した。次から次へと零れ落ちていく。

「どう、して……」

一歩前が出る。

「海翔？」

そのまま進もうとすると、何かにぶつかった。

「海翔、」

誰かが俺の名前を呼んでいる。

「蒼井、くん……」

「紅だ！ 花織、防げないのっ？」

真っ直ぐ進もうとするのに進めない。

「やってる！ とにかく比呂、そのまま押さえて！ 海翔を正気付かせるの！ 名前呼んで！」

「海翔！」

分かってるって。邪魔するな。前からも後ろからも障害物のせいで一向に前に進めない。

「君の、せいよ」

ごめん、先生。

「海翔！」

「君が、いたから……」

俺のせい。俺が、いたから……。

「海翔っ！」

因縁の対決 ～ 波留 VS 響

波留と征哉が外に出ると空からぽつぽつと水滴が落ちてきた。雨だ。遠くの方からは雷の音も聞こえる。

「何か、雰囲気であるなあ」

「アホなこと言ってんなよ、波留。久々の実戦だろ。大丈夫なのかよ」

「お互い様だろ。サポートよろしく。とりあえず、最上階。屋上か」

そう言うと、二人の体は宙に浮きゆっくりと上昇をはじめた。

「気付かれずにやつらの前に行けると思うか？」

「努力はするけど、無理だろうな。多分」

三十階建ての高層マンションの壁沿いに透明なエレベーターに乗っているかのように二つの人影が昇っていく。だが、五階あたりで波留が異変に気付いた。

「静か過ぎるな」

「ああ、全フロア、殺られてるかも」

「あいつら、ホント程度って言葉を知らねえのかよ……」

「何十、何百十人いたか知らねえけど、これから帰ってくる奴も入口で殺られるだろうな」

波留は静まり返ったフロアのそれぞれの窓を上昇しつつ無言で眺めた。不運だったとしか言えなかった。たまたまこの高層マンションが反対分子の二人に目をつけられたばかりに。何世帯という家族が、それぞれの人生を一瞬にして強制終了させられてしまったのだ。今の海翔が知ればこれも自分のせいだと言い出すのだろうか。最早、一人で背負える範囲をとっくに超えている。だからといって、責任を感じて海翔が死んだりすれば、元居た世界、迦霊界の人口何十億人が死滅する確率が格段に高くなる。

本来なら、そういう運命を生まれた時から教育して受け入れさせ、何の問題もなく引き継ぎさせられるものだが、今の海翔にそこまでの責任を一気に告げるわけにもいかないだろう。やはり、十二年間も放置してしまったのは取り返しのつかない大きなミスだった。波留の考えも甘過ぎたとしかいえない。もしかしたら、このままこの影霊界で一生暮らせるんじゃないか、そんな限りなくゼロに近い希望に賭けてしまった。ここに来た十二歳当時の自分にとっては、この責務は自覚していたより重かったのかもしれない。

でも、もう今更だ。五歳でも、記憶を失う前の海翔は十分過ぎるほど、自覚と責任感が備わって

いた。七つも年上の自分が心酔するほどに。後はその人物と同じ人間である海翔の人間性に賭けるしかない。

「よう、波留」

征哉ではない、馴れ馴れしい声に思考を遮られた。あと数階で屋上というところで、男の方に見つかってしまった。男は腕を組んで見下ろす形で、波留と征哉より二フロア位高い位置ににたにた顔で浮かんでいる。それにしてもどうして自分の名前を知っているのか。

「誰だ？ お前」

「冗談だろ……？ 俺のこと、覚えてねえってか」

とたんに、男の表情が豹変した。オレンジ色の髪が逆立つように風になびき、切れ長の目が一層つり上がる。

「まとめて吹っ飛ばしてやるよ！」

「響っ！」

女の悲鳴のような叫び声と重なって、波留と征哉に向かい爆撃が走った。

ゴンッ

鈍い音と共にマンションの一角が巻き添えを食らって抉れ、崩壊する。下に人がいたら一発で死ぬくらいの重さの欠片が雨より早く落下していった。

波留と征哉が浮かんでいた場所は、白い噴煙に包まれ何も見えない。

「ばっかじゃないの！ 短気もほどほどにしなよっ？ あんた、あんな全身全霊で攻撃したら自分の身も滅ぼすって事すっかり忘れてたんだろ！」

「ああ、忘れてた。ここがそういうところだってキレイさっぱり忘れてた」

頭ごなしにダメ亭主を怒鳴り散らす女房のように吐き捨てる紅に、響は自ら死んでたかもしれ

ない可能性などこれっぽちも感じさせないふざけた態度で返事した。

「響——、ね。思い出した。あの、泣き虫か」

白い噴煙の中でのんびりとした波留の声が響を挑発する。

「ああん？ そんな大昔のガキの頃の話してんじゃねえよ」

「波留、何こいつ、波留の知り合いかよ」

「あらっ、かわいい男の子だねえ」

「ああ——んっ？」

「やめろ、征哉。同じ精神レベルになってどうするよ」

眉間に皺を寄せ、紅を睨みつける征哉を制す。当の紅は舌なめずりするように、余裕の視線で征哉を見返していた。

「ははは、気をつけろよお前、紅は跳ねっ返りの年下のかawaiiこチャンが好物だからな、喰われちゃうぞ」

「お前っサイッコームカつく！ ギッタンギッタンに畳んで絶対ぶち殺すっ！」

「だから、挑発されんなって、征哉……」

征哉の攻撃能力もそこそこのものだが、やはり守備専門の能力の方が遙かに高い。征哉だけで響に勝てるわけもなく、この場合やっぱり波留が征哉のサポートを受けて、響をギッタンギッタンにぶち殺すということだろう。まあ、最終目的はそこにあるわけだし、今更古い知り合いに会ったというだけで躊躇することは何もない。あっちにももう一人いるわけだし、丁度二対二だ。

「響、あんた一人でやってくれる？」

「ああ、任せろ」

「あれ？ 美人なお姐さん、参戦しないの？」

「あたし、忙しいから。まあ、サポート出来るだけの分身は置いていくけどね」

「分身——……」

「あの燃料タンクのお陰だ」

「南先生？」

——あの、征哉たちの学校の先生のことか。二人がここまで余裕をかませるとは、余程強いマイナスエネルギーの持ち主だったらしい。まあでも、所詮付け焼刃だ。分身が存在していられるのもそれ程長い間ではないだろう。それがどれだけの時間かが問題だが——思案するする波

留の目の前で紅の全身が、一瞬ぶれて二重になったと思ったら、その一方が圧縮されるように跡形もなく消え去った。だが残された分身の方もそうと言われなければ全くわからない、本体と変わらない質量と圧倒的な存在感だ。腕を組み波留と征哉に妖艶な笑みを向けている。

「波留、どうする？」

「分かれて戦うのは得策じゃない。俺もお前のサポートなしじゃ力が暴走するだけだからな。先に響を片付ける。あっちの姐さんはお前らの先生を使って花織たちを攻撃するんだろうけど」

「大丈夫なのか？」

「何の支援もなしに一人で力の暴走を抑えつつなら大した攻撃は出来ないはずだ。まあ、どっちにしるこっちを早く片付けるに越したことはないが」

波留が両手を正面に掲げると同時に、両端に鋭い刃のついた槍がその手中に姿を現した。全体的にコバルトブルーの光を帯びている。両先端は青い炎の光が刃を包み込んでいた。

「はっは——っ！ 何年ぶりだぁっ？ 腕が鳴るね〜！ 波留！ お前をぶち殺せる日をどれだけ待ち望んでいたか、やっと報われる時が来たぜ——っ！」

右側、上下に構えた響の両手にも、波留と同様に一瞬にして半月型の大ぶりの鎌をつけた長い柄が現れた。こちらはオレンジの髪と同様の色の炎光で鎌の部分が覆われている。

次の瞬間、鎌は波留の横腹を断ち切らんばかりの位置に移動していた。波留はそれを鋼で覆った柄の中央部分で受け止める。互いにニヤリと視線を合わせ同時に距離を取ると、また見えない速さで衝突した。

制御：征哉×紅　～　攻撃：波留×響

二人が持つそれぞれの鋭い刃が、コバルトブルーとオレンジの軌跡が、瞬速の速さで夜の中に火花を散らす。ぶつかり、弾き、交差し、弧を描き、空を切り裂き、重なり、突き放し、激突し、阻止し、振りかぶり、迎え打ち、静止し、跳ね飛ばしを延々と繰り返す。見た目には力の差は全く感じられず、全てにおいて互角に感じられた。

ぶつかり合う二人を中心にやや上から見下ろす位置で、征哉は青と燈の軌跡を追いつつ、波留の有り余る力を制御し続けた。対角線上の同じような位置には紅の分身が見える。敵対する相手ながら、いちばん触れられたくない征哉自身の容姿をネタにしたことを差っぴいても、あの、無鉄砲暴走野郎のパートナーなんて全く同情に価する。波留はまだ、征哉の負担も考えて自分でも可能な限りの制御を効かせつつ相対しているはずだが、相手のバカは全力爆進で何も考えちゃいないんだろう。だが、そういう相手を分身だけで制御できるとは、あの女がそれだけの能力の持ち主であるということが知れる。

紅に多少気を取られている間に、中心にいた二人は一定の距離をおいて一時休戦の態を取っていた。

「思ったより成長してんじゃねえか、響。相変わらず考えなしだが」

「ここはハンデが大きすぎるからなあ。俺様の全力を見せてやれなくて残念だぜ、波留。あ～、にしても、手こずるな、くそっ！　瞬殺出来ると思ったのによっ！」

「あとどれ位だ？　その分身が持つ時間は。制御がなくなればお前は勝手に自爆してくれんだろ？」

「そんなときゃ、お前もここら一帯も道連れだけどなあ！」

「波留、あのバカ本気だぞ。下手に挑発すればなり振り構わねえ筋金入りの考えなしだ」

「言うねえ、かわいこちゃん。紅が喰う前に俺が先にいただきますか」

「んだと！　くおらあっ！」

「まーさーやー、アホを相手にするな、うつるぞ」

くだらないやり取りにも黙ったままで、すっかり口がきけないものと思っていた紅の分身が言葉が発した。

『響、やっぱり限界だわ。そこはあんたも分身に任せて来てくれる？』

「波留は俺が直接殺る」

『わがまま言ってんじゃないよ。最初の目的忘れてんじゃないだろうね。殺るのなんかこれから先いつでも出来んだろ。分身には時間稼ぎさせるだけでいいんだからさ』

「ちっ、分かったよ。いちいちるっせーな」

言うが早く、紅がしたように一瞬響の全身がぶれると一方が圧縮され消え去った。しかし残った方も紅の分身同様、本体と見分けがつかない。

「これだけのマイナスエネルギーって、どんだけ鬱積してたんだ？ お前らの先生」

「まあ、いろいろあったんだろ。俺らが知る限りでも可哀相なくらいな学校生活してたからな」

時々しか気に掛けることもなかったが、やっぱり生徒たちにあんな態度を取られて平気な訳がなかったのだろう。たまに耳にする南先生に関する噂の類も、そこらの最底辺ゴシップ誌並みにひどいものばかりだった。

「ふーん……、まあ、人それぞれ事情はあるか。それより、一気にやるぞ。制御、少し緩めてくれ」

「大丈夫か？」

「早く片付けないと海翔たちが危ない」

真剣な眼差しで目の前の分身を見据え波留が答える。ここでは力の入れ具合、微調整が一つずれただけで、どれだけの反動が波留にも自分にも返ってくるか予想がつかない。けど、眼前に身構える分身も気を抜いて簡単に倒せるようなモノではないだろう。紅の分身が本体の響をあれだけ完璧にサポートしていたのを思えば。更に本体の二人が海翔たちを攻撃しようとしている今、やがて来る時間切れを待つ程の余裕もない。

「——了解」

覚悟を決め、征哉は波留だけに神経を集中させた。

「海翔っ！」

叫び声に近い声で名前を呼ばれた。その瞬間、頭の中で、いや、目の前で信じられない光景がフラッシュバックみたく流れ出した。

同じ間取りの広いリビングフロア。おそらく、このマンションの部屋？ そこに居た人たちが、たまたまそこに居た人たちが、何の前触れもなく、何枚もの見えない刃で同時に横殴りに切られたように一瞬でスライスされていく光景。

映画でも見たことない。

建物には傷一つつけず、人間だけがスライスされていく。

大人も、子供も、年配の人も、赤ん坊も、男も、女も、

料理をしていた人、本を読んでいた人、TVを見ていた人、子供をあやしていた人、ソファでうたたねしていた学生、床で転げまわっていた子供、それを注意する母親、うつむく老人、携帯に向かって怒鳴る男、並んで酒を飲む夫婦、etc etc.....。

あまりの見事なスピードと切り口で血しぶきさえでやしない。

俺は、その場に立ち尽くしたまま。部屋が右から左へ、どんどんその光景を、まさしく切り刻まれていく瞬間を追いかけながら壁も突き抜け、時には切り刻まれたヒトそのモノを突き抜け、移動していく。

ワンフロアが終わったら、次の階へ上昇。今度は左から右へ。

繰り返し、繰り返し、

止まらない。

止めてくれ。

もういい。

もう見たくない。

嘘でも、

幻でも、

こんな映像、見たくない。

なのに、眼が閉じれない。

もう嫌だ。

もういい。

やめろ。

やめろ！

「君のせいよ」

「海翔！」

もう何回目か分からないほど名前を呼んだ。なのに一向に正気に戻ってくれない。どうすればいい？ どうすれば。紅の力がこんなにすごいものだとは思わなかった。海翔は紅の幻惑に完全に取り込まれている。何度も海翔に流れ込む紅の意識の塊を断ち切ろうとするが、何処から仕掛けられるか分からない攻撃に対する警戒を解いて集中しないことには不可能だった。ガードを解いた瞬間に、さっきのような無数のコードに三人とも貫かれるかもしれないのだ。花織は混乱しながらも最善策をフル回転で模索し続けた。

けど、このままだと確実に海翔は相手の手中に持っていかれてしまう。南先生の方向へ吸い寄せられる海翔を比呂が懸命に押しとどめるが、体格も違えば、単純な力比べで比呂が海翔に勝てるわけがない。徐々にその間隔は縮まり、紅の波動もどんどん強固になっていく。もう一刻の猶予もない。どうすればいい？ どうすれば……！

「花織！ ガードを解除しろ！ 一瞬でも紅の幻惑を完全に断ち切れればいい！」

「でも！ そんなことしたら比呂が真っ先にやられるよ！」

「紅も幻惑する方に意識を集中しているっ。同時にこっちに仕掛けてくることはないから大丈夫だ！」

いつの間にかもう、比呂のすぐ後ろの位置で、南先生の両手がゆっくり海翔に向かって差し出されていた。それに反応して、海翔の両手も南に向かって持ち上げられてゆく。比呂が全体重を海翔に傾けて両手を押えこんだ。

「花織！ 一瞬でいい！ 早く！」

「君のせいよ」

————……フラッシュバックが止まった。

殺戮が、止まった……。

誰もいない、薄暗い、広い、リビングフロア。最上階近くに位置するだろうその部屋の片面は、全面ガラス張りで静かに夜景を映し出していた。

息が出来ない

俺は……、俺は、何？ 何者なんだ？ これ、全部俺のせい？ 俺がここに来たから？

全面ガラスの、夜景を背にして人が立っている。

「南……センセ……？」

泣いてる。

「蒼井くん……、」

ごめん、先生、俺のせいで……

「そう……、君の、せいかもしれない……。でも……」

でも、先生、もう……

「私は……、いいの、もう……生きてても、死んでても同じだったから……」

もういい。先生だけじゃないんだ。もう俺、死ぬよ。死んだ方がいいんだ。

「だめよ。君は生きて。君を待ってる人が、たくさんいるわ」

「え？」

視界を一面、赤いモノが遮った。

「比呂っ！」

「え？」

そこはエントランスフロアだった。マンションの入り口。ホテルのロビーのような空間。

「比呂っ！ ごめん！ 比呂っ」

「あ……、ぐっ……」

半泣きの花織の声が背中から聞こえる。目線のすぐ下には、俺の胸に額を押し付け、華奢な両肩を第一関節まで南ちゃんの指で埋め込まれたまま耐える比呂がいた。赤い血が、黒い制服を余計に黒く滲ませている。なんだ？ なにがどうしたんだっ？

「比呂！ おいっ、比呂！」

「海翔！ 戻ってくれたっ？」

「花織、どうなってんだよ！ 比呂が！」

「話は後っ！ 比呂から南ちゃん外さなきゃ！」

「海翔っ、海翔が、傷つけるなっていうからっ……」

だから？ 泣いてるわけじゃないようだが、俺の胸に顔をうずめ、痛みをこらえて絞り出すように比呂がこぼした。なんとか、早く肩に食い込んだ指を外さなきゃだけど、この状態で下手にひっぱったりしたら比呂の肩の骨ごと持っていかれちまいそうだ。

「花織、俺、どうすればいいっ？」

「待って！ 比呂の内側からなんとか指をはじき出す様に持ってく！ 海翔、南ちゃんの両手首、思いっきり掴んどいて！」

「分かった！」

言われた通り、出来るだけ比呂の負担にならないと思われる位置から南ちゃんの細い両手首を掴む。それでも比呂には衝撃が走ったらしく、比呂の額と握られた両手が俺の胸に一層強く押しつけられた。

「ごめん、比呂っ、」

意識してか無意識か、比呂の首が左右に振られる。綺麗な髪が肩に滲む血に捕らえられて塊になりつつある。こんな、こんなに比呂や花織に負担掛けて一体俺、何やってたんだ？　せめて足手まといにならないようにって、思いっきり足引っ張ってんじゃねえかつ。自分で自分に腹が立ってムカついて、思わず南ちゃんの腕を掴む手に力が入った。

「蒼井、くん、」

名前を呼ばれ、南ちゃんに顔を向ける。南ちゃんの眼が、一瞬赤く灯ったかと思ったらまた元の眼に戻っていった。でも、これはもう、南ちゃんじゃないんだ。南ちゃんはもう、

「先生」

「だめっ！　海翔！　南ちゃんに気を取られないで！　お願いだから！　比呂と海翔と、両方別々にはみれないよ！」

「分かってる」

「海翔？」

「先生、ごめん！」

このままじゃ埒が明かねえ、今は何より比呂を早く解放してやるのが先決だ！　傷害罪覚悟で腕を掴む両手に再度力を入れた。瞬間、腕から手に掛けて熱が走ったかと思ったら、比呂の肩に食い込んでいた指が一気に開かれ、予想外に弾き出された指から、比呂の肩の肉片と血が同時に飛び散った！

「ぐっ……！」

「比呂！」

指が抜けた反動にしては大げさに、南ちゃんの体が飛び跳ねるように後退する。比呂は痛みをこらえて息をもらし、肩を丸めるわけにもいかず、額を押し付けてきた。肩からは血が一層滲みだして制服を濡らし、黒髪の間から覗く細くて白い首筋に汗が玉になって浮かんでる。

「比呂っ、大丈夫か？」

「大丈夫……」

気丈にそう応えると、比呂は俺の腕の中で半回転して正面を向いた。ほんとに、このまま抱きしめたら、俺の中にすっぽり収まってしまうようなこんな華奢な体で、こんな怪我しててまだ俺の盾になって戦おうっていうのか。どれくらい、洗脳されてんだよ。

比呂は、そんな俺の思考に答えるように、更にその手に、あの、黒い日本刀のような剣を出現さ

せた。俺の視線の位置は比呂の丁度頭の真上になってるから、もちろん表情は見えないけど、剣なんか持って、肩に負担がかからないわけがない。こころなしか腕は痺れてるように震えて見えるし、後頭部は俺の胸に押しつけられて立ってるのがやっこのようで、セーラーの制服の胸はやたら上下を繰り返している。

「来る」

「え」

顔を正面に向けた瞬間、再び南ちゃんの腹から無数のコードが剛速で驀進してきた！ 花織のガードに阻まれ、半円状のガラスにぶつかった滝のように一気に進路を変えられたそれは、今度は真上に集結してまっすぐに落下してくる。目を見張る間もなく比呂が半円から飛び出し、黒刀で一メートル四方はある槍の束を片手で薙ぎ飛ばした。ぶちまけられた無数の鏃が豪雨のごとく頭上に降り注いでくる。花織が形成した結界の中に戻ってきた比呂は、着地するなり倒れかかった。細い背中で大きく息を繰り返し、両肩の傷のせいで両手をつくのも痛いんだろう、頭を床について体を支えてる。

俺はといえばただ、何もできずに成り行きを見ているだけ。継承者だか何だか知らねえけどこんなんでいいのか？ 何とか出来ないのかよ、俺！ 足を引っ張らないにしてももう、黙って見てるだけなんて限界だっ。俺にも何か、俺にも出来ること……！

「比呂！」

「大丈夫……っ」

「花織、征哉んときみたいに止血とか出来ないのかよ」

「止血までなら、でも、こんなに動いてちゃすぐ出血するよ。キリがない！」

「海翔っ、あいつを殺らないと、終わらない！」

「殺るって……、もう死んでんだろ？ 殺されたんじゃん、先生は！ なのにまだ、粉々に切り刻めってのかよっ！」

「でないと止まらない！ いつまでたっても紅の操り人形だ！」

「その、紅って誰だよっ！ くそっ！ そいつ倒じゃ、いいんじゃねえのかよ！ そいつが南ちゃん巻き込んだんだろっ？ そいつが全部悪いんじゃねえか！」

「ひどい言われようだこと」

ホールに、場違いないやに艶っぽい女の声が響いた。

「あの方と、同じ顔で言われると予想以上にゾクゾクくるわね」

顔をあげる。手を伸ばせば届きそうな位置に、もの凄い色気を放った美女が浮いていた。全体的に黒っぽい、着物を着崩した様なファッションだけど、胸と足の線が際立っている。普段の俺ならデレデレになってるところだが、見た瞬間、こいつが紅だと確信した。途端に血流が速くなり怒りの方が先に頂点に達した。

「お前が紅か」

「声まで同じ」

「誰と」

「あたしらの首魁、継承者様、あんたの双子の片割れ様よ」

「ああんっ？」

なんつった、こいつ。双子だと？ そいつが俺の核だか命だかを狙ってるってか？

「あんたと違って、あの方はそれはそれは苦労されたのよ。あんたなんか想像できない生き方をね、」

「紅……」

自分の話に酔ったかのようにしゃべくり出す紅を、俺の足元で比呂が口を開いて遮った。上目使いで紅を睨みつけている。

「比呂、まあ、いいざまだね。響じゃないけど、あんたは絶対、あたしがこの手で粉々にしてあげる」

妖艶な笑みが一変して比呂を上からねめ付けやがった。これがこいつの本性か。比呂が揺れながら立ちあがる。明らかに痛みに体力を持っていかれてる。右手に引きずるように持った黒刀のせいで、重心も右に傾いた状態。そのまま俺の前に出ようとするのを片手で留めた。いくら俺でもこれ以上傷ついた比呂を最前線に立たせられるかよ。

「海翔……、」

「あら？ 継承者様直々にお相手して下さるの？ 光栄だわあ。でも、記憶喪失らしいじゃない。うまく力が使えるのかしら」

「うるせえよ。お前がやったんだろ？ お前が、南ちゃんをあんなにしたんだろうが」

「そうね、すぐにでも比呂が粉々に切り刻むと思ってたから、この建造物の住人で予備は十分用意してたんだけど、まだ持ってたなんて。エコロジーってやつ？」

「何っ？」

.....——ってえことは、なんだ？ あの、フラッシュバックは、白昼夢なんかじゃなく、無理やり見せられた幻影じゃなく、事実だったってことか——？

何十、何百、大人も子供も赤ん坊も、全然知らない人たちが、俺を倒すための、南ちゃんの予備のためだ.....——？ 許されるわけないだろ、こんなこと、こんな理由、こんな、大量虐殺。ふざけんなよ、それが全部俺のせいだったのか？ てめえでやったんだろうがっ、何がエコロジーだっ、人の命をモノと一緒にしてんじゃねえよっ！

「——ってっめえっ！ ふざけんなっ！」

ガッゴンッ！！！！

体が熱い。自分の躰がもの凄い熱を放ってるのが分かる。

今まで生きてきた中で一番怒り頂点になったのは事実だ。

息が荒くなる。体中から汗が零れ落ちている。

視界が一瞬眩む。だめだ、こんなところで倒れたりすんな。

ホントは自分でも、立ってられるのが不思議なくらいだけど、よく解んねえ意地でさらに足を踏ん張る。ぶれる焦点をなんとか合わせ、拡散しそうになる意識を眼の前の状況を把握することに集中した。

女は、そこにいたはずの場所から、遥か後方の半壊の壁の中に半分埋まりかけていた。そして女の脇には、いつの間にやら女と同じような黒い忍者服を着崩した男が身構えた格好で浮いている。さっき女がほざいてた俺の双子とか言うヤツとは顔も声も違うし、明らかに別の男だ。

ああ……、それにしても心臓の音がうるせえな。汗が目に入って視界がぼやける。一向に息が治まらねえ……。

「あ～あ、つぶねえなあ。覚醒させるにも程があんだろ、紅。めんどくせえ、わざわざこんな急激に難易度あげてどうするよ」

「あたしのせい？ 勝手にスイッチ入っちゃったんだから知らないよ。まあ、あんたのおかげで顔を潰されずに済んだのには感謝するわ、響」

「その顔がなきゃ、お前の能力何もねえのと同じだからな」

「あんたねえ」

「……うるせえ……。黙れ……」

「んだとお？」

こいつら、一体何なんだ？ 見てるだけでムカついてしょうがない。こんなに人が憎いなんて思ったの初めてだ。存在自体が許せねえ。何十何百人殺しといてのこの態度、この会話……！ 八つ裂きどころじゃ気が済まない。男も女も、ぼこぼこにして粉々に擦り潰してやりてえ。

「海翔っ、怒りに呑み込まれないで！」

「何？」

後方でする花織の言ってる意味が分からない。怒りに吞まれるな？

「何言ってるんだ花織、怒って当然だろ！ こいつらが何したか分かって言ってるのかよっ？」

「黒い力は自らをも侵食する。破滅しか生まない。海翔、戦いの基本だ」

比呂にまで諭される。冷静になれってことか？ けど、ここで怒らないでいつ怒るってんだよ！

「わりいけど、無理。こいつら、一回ぐしゃぐしゃにしてやらないと気がすまねえ……」

「——……花織、なんとかこの敷地内で治まるよう外側の結界を硬化してくれ。自分は海翔の力を出来るだけ拡散させるようにする。制御を頼む」

「————了解、」

右手が異様に熱い。見下ろしてみると掌からあふれる位に赤黒い炎のような塊がとぐろを巻いて渦巻いていた。感情がそのままカタチになって集結しているようだ。コレをやつらにぶつける。ぶつけないわけにいかねえだろ。前方のやつらを見据えたまま投球モーションに入った。

「やべえな、紅、分身を回収しろ。でないと次、かわせるかわからねえ」

「同意。遊んでる場合じゃないね」

思いっきり、腕を後方に引き、直球でやつら目がけてダマを力いっぱい投げつけた。放った瞬間、全身の気力も一緒に持っていかれる。一気に力が抜け、降り出した手と一緒に前方に体重が引きずられた。

ドウオオオオオ —————

ンツツ！！！！

比呂が、海翔が振りかぶると同時に、黒刀を右手下段に構えた。そのまま海翔が手の中の炎塊を紅と響目がけて暴発させるタイミングに合わせ、同じく二人目がけて一気に黒刀を振り上げる。花織は比呂が放つ力を制御して海翔の放った炎塊に命中させ、その圧縮された力の塊を拡散させた。

紅と響はおそらくぎりぎりですぐ避けるだろう。命中したとしてもその後の結果は同じだ。そのまま海翔が全力で放った炎塊を轟進させれば、直線上の何十キロという建物を崩壊させてしまう。

力と力がぶつかった瞬間、内臓まで揺すぶられる轟音とともに地響きが鳴り響いた。それでも、拡散された炎は消えることなく、無数に枝分かれしマンションの鉄骨を薄いビニールを破る弾丸の如く貫通していく。そのまま敷地ぎりぎりに張り巡らした結界にぶつかって兆弾し、豪華な高層マンションの外壁や窓にはめ込まれた硬質ガラスに無数の穴をあげ上昇していった。

「海翔！」

花織はすぐさま炎塊を放ったとともに倒れこんだ海翔の傍へ駆け寄った。海翔は息をするのも辛そうに、全身弛緩して、それでもうっすら目を開けて花織を見た。全く自覚ないままただ力任せに暴発させた代償で、体力を全部持っていかれてしまったのだ。普段から行使していれば決してあり得ない状態だったが、十二年ぶりにいきなり発動させたのだから無理もない。

そういう花織自身も、同じくらいのブランクでの実戦だ。ここまで完璧なまでに全ての事象に反応してタイミングを計り制御や結界、防御の力を使いこなしてきたが、さすがに集中力の限界を感じ始めていた。このまま、海翔を守って、比呂の攻撃力の制御と結界を保ち続けるのは体力、時間の問題だろう。

花織はぐったりとして力の入らない海翔の頭を自分の膝の上に抱えあげた。汗で濡れた前髪をそっとかき分ける。弱気になっちゃだめだ。こんなところでやられるもんか。

「海翔、聞こえる？」

「花織……」

「大丈夫。どんなことがあっても、海翔は守るからね」

比呂が、黒刀を引きずった格好で静かに花織と海翔の傍らに立った。視線はまっすぐ、ホールの入り口に注がれている。比呂とて、両肩の傷で相当余計な体力を奪われているはずだ。

「比呂、大丈夫？ 肩」

えんら

「あいつら、閻羅を使う気か？」

「え？」

花織は耳を疑った。比呂のつぶやくように零した単語。

閻羅。

そんなもの、ここで使ったらどうなるか！

「あいつらバカっ？ そんなことしたら……！」

「聞き捨てならないね、そこのお譲さん。残念だけどこっちも余裕なくてねえ。比呂ほどじゃないけどさすが守護者だけあって、あんたも相当なものよ。褒めてあげるわ」

紅はそう言いながら右手の親指と人差し指で、ピアスの石程度の小さな球体を弄んでいた。

二人とも、海翔の攻撃をかわしてホールの入り口近くに場所を変えていたのだ。

花織がすっかりその球体に気を奪われていると、紅の背後から突然何かが爆発したような激突音が響き渡った。屋上から戻ってきた波留がホールへ足を踏み入れるなり、響と再度それぞれの武器でぶつかり合ったのだ。

「波留兄！」

「花織！ 海翔はっ？」

「大丈夫！ いきなり力使ったせいで体力使い果たしちゃって起きれないだけ！ それより、その女の方が閻羅使おうとしてるの！」

その単語に波留も、波留と一緒に戻ってきた征哉も反応する。

「閻羅だって？」

「はぁ？ こんな不安定な世界でそんなもん使ったら、お前らだってどうなるか分かってんのかっ？」

「やってみなけりゃ、わかんねえだろ！ 紅！」

「いくよ！」

凄惨 ～ 浄化

朦朧としかける意識の中、鼓膜を突き破るような金属音がホール全体に反響し、全てを震わせた。俺は花織の膝枕で事の成り行きを聞いているだけで、実際のところ何がどう進行しているのか全然わかつちいなかった。眼を開けても、重い頭を何とか少し傾けても、花織の背面方向で事が起こっているらしく、俺の位置からじゃ全くの死角だ。

金属音の後、ドサドサドサッと、大量のモノが次から次へと落下してくる音が続いた。俺の目線の上で音のする方を見ていた花織の顔がみるみる青ざめる。俺の頭に添えられた手がぶるぶる震え出した。

「な、何……、あれ……」

「花織？」

「か、海翔……」

やっとの思いで俺の方に顔を向けた花織の眼から途端に大粒の涙が次から次へと俺の顔に落下した。あたりに、何とも言えない生臭い、血の匂いが充満してくる。

「ひ、ひどいよ……。もう、見れない……。海翔、海翔……」

「これを鎮めるには、海翔の力が必要だ」

「俺の、力……？」

重い頭を若干持ち上げて、声のした方、俺の足元近くにいる比呂の方を見た。比呂はまっすぐに花織がさっき見ていた方角を顔色一つ変えずに見据えている。

俺の、力……。さっき、あいつらに投げつけたアレのことか？ あんなの、もう一度出せって言われたって、どうやったか覚えてねえよ……。それとも、何か別のやり方があんのか？

落下音がようやく止んで、吐き気を催す臭いが一層強烈になる。と、同時に大勢の人のつぶやき声のようなざわめきがそっちの方から聞こえだした。

「いたいいたいいたいいたい……」

「何何何何何……？」

「どうして？どうして？どうして？どうして？……」

「死んだ死んだ死んだ死んだ……」

「何処何処何処何処……」

「嫌嫌嫌嫌嫌……」

「……………」

「助けて、蒼井くん……」

「え？」

今の声、南ちゃんじゃん。

「南ちゃん……、生きてんのか？」

「海翔……、」

何とか、上半身を起こそうとする俺を弱弱しく花織が手で制しようとする。力をいれたくても気力をすべて奪われてしまったかのようで、同じように、目を合わせると弱弱しく首を横に振った。

「お前……、大丈夫か？ 花織、」

「見ない方がいいよ、海翔……」

でも、このまま寝てるわけにもいかないだろ。ゆっくり体を起こす。花織の細い体から死角はすぐに消えた。

視界の中に移ったのは、高い天井まで続く山盛りの塊。

最初、輪郭しか把握できなかった。頭が細部を認識することを拒否していたんだろう。

その抵抗も空しくだんだん全体像がはっきり見えてくる。

物体は蠢いていた。黒い、霞のような靄が湯気のように巻きついている。

それは、何百人という人の体の部品で出来た山だった。

天井には、山が作る底辺と同じだけの穴が空いていて、そこから落下してきたのだろう。

あの、切り刻まれた人たちだ。しかも、こんな状態で生かされている。

手が、足が、指が、顔が、胸が、腹が、てんでバラバラにくっつき、盛られ、震え、振られ、伸縮し、握られ、開かれ、見開き、瞬きし、口々に、呟いていた。

「ウッ、ゲェ……！ グホッ、ゴホッゴホッゴホッ！ ゴホッ……ッ！」

「海翔……！」

悪いけど、我慢できなかった。その場で両手をついて胃液ごと、夕飯を全てリバーズした。自分の吐瀉物の臭いと鼻にくる酸に視界が滲む。花織が横から背中をさすってくれてようやく落ち着いた。

「巻き添え食うのも割に合わないから、あたしらはこれで退散するわ。継承者を覚醒させる目的は果たしたし。予備のお陰で思ったほど暴走しなくて良かったでしょ」

あの女、この状況でまだほざくか！

「海翔！ ダメっ！」

「海翔っ！」

顔をあげた瞬間、あちこちから名前を合唱され、目の前に黒い塊が猛烈な勢いで迫ってきた気がしたが、すぐに花織の体で視界が遮られた。俺の頭を正面から力いっぱい抱きかかえくる。

「言ったでしょ、怒りにまかせて力使っちゃいけないって！ 今は閻羅が出てるから絶対使わないで！ アレは、そうゆうのが大好物なの、餌与えて余計に強化させるのと同じなの！」

「んじゃ、どうすんだよ！ あのクソ女！」

勢いで体力が戻ったのも束の間、つられて大声でどなった後で、また力が全身から抜け落ちた。思わず花織に全体重預ける格好になる。

「同じ顔でホント、言ってくれるわね、もう少し遊んでたいけど、残念。また次の機会ね」

花織の体の隙間から女の声がした方角に目を向ける。女は天井近くに男と並んで浮いていた。男の手には何処から出したのか、先端を燈色の炎に包まれた鎌のような長い柄の武器が握られている。女の方は余裕そうなセリフに反して、積み上げられた人の欠片の山を頻りに気にしてその表情は引きつって見えた。心なしか山の塊の頂上が黒い湯気と共に二人の方へ傾いている気がする。

「響、逃げるのか、お前」

波留兄のあからさまに挑発する声。此処からじゃ、人の山で死角になって姿は見えない。それにしてもあいつ、波留兄の知り合い？

「逃げんじゃねえ、一旦引くつつってんだよ。継承者が覚醒する前に核が奪えなきゃ、作戦変更ってことだ。お前が生き残ってりゃいずれまた決着付けてやるぜ。これくらいの閻羅に太刀打ちできねえようじゃ、てめえも大したことなかったってことだしな、波留」

「お前こそ、ここから無事に泣かずに戻れたらいいけどな」

「んだと、おらぁ！」

「響！」

女の叫び声と同時に、男の鎌から燈色の炎が波留兄目がけて放たれた……！ その炎ごと黒い靄が一気に二人を飲み込みにかかる。瞬間、男も女も閉じるように消えたけど、靄に引きずられて人の欠片の山の頂上部分、何十人分かも一瞬に巻き添えになって消え去っていった。

二人がいなくなって楽になったのかは全くわからなかった。花織の言うとおりに、怒るとあの黒い靄が襲ってくるのはわかったから、俺にとっての怒りの元凶である余計なものが消えてくれた分はやり易くなったんだろう。

やり易く？ この惨状を一体どう治めるって言うんだ。再び凝視するのも躊躇う、この……、

「オマエノセイダオマエノセイダオマエノセイダ……」

「え……？」

「アナタガイタカラアナタガイタカラアナタガイタカラ……」

ゆっくりと、避けてた目線を正面に向ける。人の欠片の山が、その中に埋もれる何百もの眼が、気のせいでなく全て俺の方を向いていた。眼が離せない。何百という視線に、雁字搦めに囚われる。それぞれバラバラに発せられていた呟きが、だんだん声を合わせて俺に向かってくる。山は不安定に揺れながら、亀並みのスピードで徐々に近づいてきていた……。

「海翔、惑わされるな。これは紅の残留思念だ」

「残留、思念？」

「そう、聞こえるのは紅が仕掛けた罠だ。閻羅は人の弱みに付け込んで取り込もうとする。だが気持ちをしっかり持っていれば大丈夫だ」

比呂のいつもと変わらない活舌のいい落ち着いた声が俺を現実には引きとどめた。気をしっかり持つ。そうだ、あの女の罠になんか誰が嵌ってやるか。しっかり。惑わされるな。俺に、出来ること。

「俺は、何をすればいいんだ？ 俺に、何が出来る？」

「楽にしてやるんだよ、海翔」

「波留兄……」

その声は、確かに波留兄のそれだったけど、声はあり得ない方向からした。遙か上部、視線を彷徨わせるとさっきまであの二人がいた空間、空中に波留兄が浮いていた。まだ、比呂が空中で静止していた時の方が違和感なく受け入れられたのに、いつも見慣れた人物がいきなりそんなとこに浮いて居るのが、どうしても飲み込めずに多少、当惑してしまった。啞然となってしまった俺に波留兄が言葉を続ける。

「立てるか？ 辛かったらそのまま花織に支えてもらっててもいいけど」

「あ……、うん——」

「大丈夫？ 海翔、」

「ん——……、」

全身脱力の筋肉に無理やりスイッチを入れて立ちあがる。って、言っても半分花織に支えられながらだけ。何とか、立ちあがった。

正面には、黒い靄に巻きつかれた肉片の山が、さっきよりもまた距離を縮めてきていた。このままじゃ、あの中にいずれ飲み込まれてしまうんだろう。その肉片の集合体の中、正に飲み込まれた形で、見知った顔を見つけた。

南先生……。

南ちゃんだけは、他のヒトたちの様に切り刻まれずにいたから、その肉片の表面にのめり込むようにして全身を埋めていた。ただ、その腹部は散々に利用された惨状が凄まじく、内臓をミンチ状にされて赤黒い大きな穴を開けている。その部分だけが、左右背中からの圧迫で妙な風に歪んでいた。でも南ちゃんの顔は、周りの無理やり生かされて蠢く顔と違って、全ての生気が切れ静まり返っていた。完全に、死んでいる———。

楽にしてやる。そういうことか。死んでまで、操り続けられるヒトたちを、弄ばれる体を静かに眠らせる。

「そう、気持ちを落ち着かせて、掌を向けるんだ」

波留兄の声に従ってゆっくり右手を上げて掌を向ける。正面には、丁度南ちゃんの顔。黒い靄に引きずられて、塊と一緒にジワジワ接近してくる。

「海翔、あいつだけ見て、集中するといい。海翔が傷つけるなって言ったのは正解だったな」
「比呂……」

言うまでもなく、こんなこと見越してのことじゃない。当然のように無傷で帰せるものとはばかり思ってたんだ。こんなことになるなんて……、ごめん、先生。俺が、もっとちゃんとこの状態を把握してたら。もっといろいろ俺にも比呂や花織みたいに力が使いこなせてれば……。

気づけば右手を、さっきと違う白い炎の塊が覆っていた。熱くはなく、むしろ涼しいくらいだ。

「それが、海翔のホントの力だよ。——征哉、」
「おう、」

まだ微妙にふらつく俺の体を支えたまま、花織はおれの右手に自分の左手をかざした。手の中の白い炎がひときわ大きくなり、そのまま二手に分かれて比呂と波留兄の方へ向かって生き物のように揺らめきながら伸びていく。

すぐ傍らに立つ比呂の黒刀に白の炎がまとわり、刀身をすっかり黒から白へ変えてしまった。波留兄の方も、いつの間にか手には長い槍のようなものが握られていて、その両先端にも白の炎が松明みたく揺らめいている。

この炎が何をするのかなんて知ったこっちゃなかった。もう、成り行き任せだ。ただ、これで何とかなる気がするだけ。やり方が間違っていたら皆が止めてくれるだろ。それより、

改めて正面の南ちゃんに向きなおる。まだ、余裕があると思っていた距離が、予想外に縮まっていた。伸ばした掌が、あと少しで南ちゃんの頬に触れるところまで塊は接近していた。塊の山を取り巻く黒い靄が、塊より先に俺や花織、比呂も取り込もうとその触手を伸ばしてくる。が、寸前で迂回する。進路を阻まれどうやっても取り込めないようだ。ダメになっちは人の塊の中に戻っていく。花織の結界のおかげか。

掌が、南ちゃんの頬に触れた。冷たい。それはもう生きてる人ではありえない体温だった。

「先生……」

さっきまでざわついていた周りのつぶやき声が一段と静まり返った。けど何が起こったかなんてどうでもいい。俺はそのまま南ちゃんに話しかける。

「ごめん、先生。先生は何も悪くないのに……」

きれいな顔。まるで聖母像のようだ。

埋め込まれた体は、十字架に架けられたキリストそのものだけだ。

どうして、こんなことになってしまったのか。

南ちゃんも、この、マンションの人たちも

感情に流されるとまた無限ループに陥りそうになる。

今はこの状況を終わらせることが先なんだ。

死んでも囚われ続ける人たちを開放する。

それが今、俺がするべきこと。

嘲笑うかのように、まとわりつく黒い霧。

これが、元凶か。

これを、消す——……！

瞬間、右手から白い炎が、目の前の塊の山を全て覆い尽くす勢いで噴出した。反動で後ろへ倒れそうになるのを気力を振り絞って耐える。花織も全体重でもって俺をその場に固定してくれた。

すぐ傍らで比呂がまた中空へ飛び立つ気配がした。でももう、姿を追う余裕はない。これで終わりにする……！

「うあああああああああああああああ
あっ！」

俺は、全ての力を出し切る勢いで雄叫びをあげた——.....。

海翔が放った白炎は対象物を業火の如く覆いつくすと同時に、波留と比呂の武器にもより一層の強烈な炎を送り込んだ。白炎に覆い尽くされた塊の山から黒い靄が一気に凝縮し頂上から噴出する。征哉は瞬時に新たにその靄を封じ込めるための結界を形成した。波留と比呂が二メートル四方はある結界ごと、何倍速ものスピードで武器を操り粉々に切り刻んでいく。その刃に燃え盛るそれぞれの白い炎が、逃げようとする黒煙をことごとく飲み込み、霞たりとも逃さず浄化していった。

黒い靄、閻羅が抜けきったあと、積み上げられた人々の欠片たちは吸引力を失い、山の形から一気に雪崩れ落ちた。完全に意識を失って倒れこんだ海翔の上にも肉片の雨が襲いかかる。

征哉の視界の端で、花織がそれらを何とかぎりぎり結界でかわしながら、海翔の体を必死に引きずり後退しようとしている姿が映った。——まったく、無理しないですぐに呼べよな——、少し苛立ちを覚えつつ征哉は大股で駆け寄ると、その勢いのまま自分より一回り大きい海翔を力任せに担ぎあげた。征哉の右手で縫い合わされた皮膚が引き千切れる感覚が走る。血の気の引く痛みと共に包帯に見る見る血がにじみ出た。

「征哉、」

「いいから早く離れろ！」

花織ももう限界近らしい。花織の形成する結界は規模的にも随分弱まっていて、精神的にも肉体的にも力をほぼ使い果たしているようだ。

「あぁー、もう、全然だめだよ、あたし。こんなんでも海翔のこと、これから先も守っていけないかなあ」

征哉の思考を読んだかのように花織が愚痴をこぼした。声が半ベそ状態だ。

「久々の実戦なんだ、勘がすぐ戻らなくても仕方ないだろ」

雪崩がようやく落ち着いて、ある程度距離を取ったところで征哉は海翔を肩から降ろした。痺れて震えが止まらなくなった右手を左手で抑え傍らに立膝をつく。花織もすかさず海翔に寄り添った。そういや、波留とここに戻ってきた時点で海翔は既にふらふら状態だった。慣れない体で立て続けに全力使い果たしたんだとしたらこうなっても無理はない。花織の膝枕で、熱が少しあるようだったが、うなされている風もなく気を失って昏睡している。

征哉は目線を上げ、惨状を振り返った。崩れ落ちた大量の人の肉片は、もうどれもぴくりとも動かず、耐えがたい臭気をあたりに漂わせながら静かにそこに存在していた。かつては人間の形をして意思を持って動いていたものたち。

その惨状の向こう側から波留と比呂がこっちに向かってるのが目に入る。比呂は怪我をしたのか、波留に体を支えられて痛みに顔をしかめながら、海翔の方を見て言葉を落とした。

「海翔は、」

「意識不明。怪我はしてないし、精神汚染されたわけじゃないから、休めば元に戻るだろ。それより比呂、お前それ、どうしたよ」

「……………——」

「女に操られた南ちゃんにやられたの。両肩に指、喰い込まされて」

「ふーん、油断したのか？ お前がこの中じゃ一番戦闘慣れしてるはずじゃなかったのかよ」

意識しないでも言葉に棘が混じってしまう。花織だけじゃなく、征哉もまた、これから先のことを考えると自分に不安にならずにいられなかった。それを思わず比呂にぶつけてしまっていた。

「海翔が、南ちゃんを傷つけるなって言ったからだよ。比呂はそれを守って怪我したの」

無言の比呂に代わって花織が次々と答える。いつの間にそんなに結束固くなったんだ？ これだから女はわかんねえってんだ。

「征哉、もういいだろ。とりあえず後始末をしてここを出よう。お前の結界で警備会社の連中やここに帰ってくるはずの奴らは、周りをぐるぐる回ってるだけになってるはずだが、それもそろそろ限界だろ。比呂、海翔と花織連れて先に俺の部屋に戻っててくれ。二人とも、それくらいの力は残ってるだろ？」

「分かった、」

「ん、大丈夫」

征哉の嫌味に気分を害したわけでもなく、比呂は波留に支えられて肩の痛みに耐えながら海翔の傍へ歩み寄った。征哉は自分の居た場所を比呂に譲って立ち上がる。

「波留兄、征哉も、海翔のおばさんへの言い訳、考えといてよね」

「ああ、そうか、それもあったな」

海翔を両側から抱きかかえるようにして、三人の姿がその場から消え去った。去り際の花織なり

の早く戻って来いってメッセージ。そうだ、いつまでもここでグジグジしててもしょうがない。

「波留、どうやって片付けんだ」

「爆発させようかと思ったけど、こういう高級マンションってオール電化でガスあんま使ってねえんだよな。このまま放置ってわけにもいかねえから、一気に燃やすしかないかな」

「火災報知機、スプリンクラー、どうする？」

「こんだけ海翔が破壊して天井にもあんな大穴開いてたら、それこそ電気系統いかれてるだろうから大丈夫じゃね？」

「テキトーだな」

波留は再度手から槍を出現させ、青い炎をばらばらの死体の上にかざした。それを征哉が一気に火力を上げて燃え広がらせる。青い炎は天井に開いた穴をも貫く勢いで火柱を上げた。

「南先生……」

「え？」

燃え盛る青い火柱の中、征哉はそこに立つ南の姿を見た気がした。

夢、再び ～ 声

はあ、はあ、はあ、はあ、

また、夢だ。まだ、俺は走っている。

いや、走ろうとしても地面が不安定で上手く走れない。

あたり一面血の匂い。

生臭い、肉の匂い。

周りは黒じゃなく、赤一色。

や、一色じゃない。

これは、肉片？

俺が踏んでるもの、これは、人の、欠片。

手。

足。

腕。

腿。

腹。

胴。

首。

顔。

頭。

眼。眼。

口。

眼。

口。口。

そして、ひとつだけ、まともな死体。きれいな顔。南、せんせい。

何も言わない。

死んでるから、

当たり前か。

死んだ。

目の前で、

生きてたのに、

殺された。

「海翔、惑わされるな。気持ちをしっかり持っていれば大丈夫」

「比呂———？」

病室 ～ その後

目が覚めたそこは、全く予想外な場所だった。白い天井と、白い仕切りカーテン。右側には、全面の窓。そして、腕には点滴が……。ここ、病院？ 俺、入院してたの？

「おお？ 海翔、やっとお目覚め？ あれからもう二日目だよ」

「花織……、と、比呂……」

カーテンの向こう側から花織と比呂が並んで顔を見せた。花織は私服だけど比呂はセーラーの制服のまま。ただ、薄手の白いカーディガンを羽織ってはいたけど。

「俺、どうなったんだ？」

「うん、いったんは波留兄の部屋に運んだんだけどね、もう全く目、覚まさないし、おばさんたちに説明するのも大変だから、いっそ原因不明で倒れたことにしちゃって話になって。そのまま海翔んちに、海翔がいきなり倒れた！ って言って、ここ、おじさんの病院に運んでもらったの」

「は～……、そう、それで変な身体組織とか物質でも発見されて、余計話がややこしくなったらどうするつもりだったんだよ」

「その辺は大丈夫よ。あたしたちとここの世界の間人とかじゃ、身体的特徴はほとんど変わらないから。核とか玉はこの世界では目に見えないものだしね」

のんきなもんだな……。

「あ、今何も考えてないとか、テキトーだとか思ったでしょ！」

「思ってねえよ」

似たようなことは思ったけど。

上半身を起こそうとするがちょっと目眩がして断念した。花織がそれを見て電動のスイッチを入れてベッドを少し起こしてくれた。操作しながらも口の方は止まらない。

「それでも大変だったんだからね、おばさんもの凄く心配しちゃうし、比呂もあんたが倒れてる間ずっと傍にいるって聞かなくてさ。ね、比呂、反省してる？」

「当然のことを申し出て何が悪い」

「これだもん。あ、あたし看護師さんに目が覚めたって知らせてくるね。眼が覚めたら一応診断受けて、大丈夫だったらすぐ退院できるって言ってたから」

マシンガンの如くしゃべり倒すと花織は病室を出て行った。今気付いたけどここ四人部屋じゃねえか。さすがに花織も内容が内容だけにボリュームは落してたけど、いわば男部屋に花織と比呂の二人がいるのは異彩を放つらしい。隣は空いてるみたいだけど正面のお兄さんと斜め向こうのオヤジのニヤついた視線が気になった。

比呂は黙って足元近くで立ったまま俺の位置からじゃ死角の外を眺めている。外は快晴。気持ちいい青空と白い雲が浮かんでる。昼の光の下だと比呂の白い肌がよけい際立つ。半分開け放たれた窓から風が入ってきて、比呂の黒髪を柔らかくゆらした。比呂が俺の視線に気づいてこっちに顔を向けた。水分の多い大きな眼と眼が合う。と、その視界の端に正面のベッドの無精ひげをはやした色黒お兄さんのニヤけた顔が入った。

「比呂、」

手招きするとしっかり俺の目を見たまま、枕元まで来た。そのまま、まだ俺が手招きするのを不思議そうにして上半身をかがめてくる。耳打ちしたかっただけなんだけど、真正面に顔が近付いて来てちょっとびびった。しかもこれじゃ、比呂の長い髪がカーテンになって周りから見たら……て、

「あ、あのさ、そこ、仕切りのカーテン、ちょっと引いてくれない？ 窓の方まで」

「それ？」

「そう」

カーテンを指さすと比呂は言われたとおりに素直にカーテンを引っ張って、正面からの視線を遮断してくれた。そのまま、また足もとに立つ比呂を再度手招きしてそばに呼ぶ。

「？」

「椅子、あんじゃん、そこ座んなよ」

比呂は椅子を見て俺の言うなりにそこに座った。そういやさっき、顔が近付いた時、一瞬比呂から薬の匂いがしたのを思い出す。

「比呂、大丈夫か？ 肩」

「ああ、大したことない。海翔のおばさんに消毒してもらった」

「母さんに？」

そりゃ、もと看護師だからあんな傷でも応急手当出来るだろうけど、どう説明したんだか。

「聞かれなかったか？ いろいろ」

「ああ、でも花織が全部上手く説明してくれた。自分がどうしても病院？ に行くのが嫌だからとか、あと、警察？」

どんな説明したんだよ、花織……。

「よう、やっと起きたって？ 海翔」

「征哉、」

カーテンの向こうから顔を出した征哉の横で、思いっきりそれが引かれてまた正面から全開になった。せっかく比呂に引いてもらったのに意味ねえじゃんっ。

「何、個室作ってんのよ。もうすぐお医者さん診断しにくるから。荷物持ちも来たし、そしたら皆で一緒に帰ろ。海翔のおばさんにも電話入れといたからね」

「さんきゅ。ホント気がきくなあ、花織は。いい奥さんになれるね、間違いない。な、征哉」

「あん？ あ〜、そうかもね」

「もう、海翔、征哉に同意求めないでくれる？ せっかく海翔のセリフでいい気になれても、征哉ので台無しだよ」

やる気のない征哉の返答に、腰に手をあててあごを突き出す。写メにでも撮って、吹き出しにプンプンとでも入れたいポーズだ。

なんか、数日前の出来事が——寝っぱなしだった俺にとっちゃ昨日のことのようだけど——嘘みtainな雰囲気だ。時折会話の中に紛れるそれらしい単語が出てこなければ全部夢だったと信じたくなるくらいに。あれから今日で二日目ってことは、土日、無駄にしちまったな。明日からすぐ学校か。学校——……南ちゃん……。

あの子のことを訊こうと思ったら主治医らしい先生が来た。訊きたいことは積もるほどある。ぞろぞろ病室を出て行く三人を見送って家に帰ってからゆっくり訊くことにした。

自室 ～ 最期の願い

俺は原因不明の極度の肉体疲労、精神疲労ってことで、寝てる間にもいろいろ検査されたいらしいけど結局そのまま経過措置を言いわたされて晴れて退院出来た。まあ、養父がここの医者ってのも大きかったんだらうな。

花織と波留兄が作った脚本によると、比呂が暴漢に襲われて俺がそれを力づくで助けて、そのショックでぶっ倒れたことになっていた。ゴースト暴漢は波留兄が警察に突き出したってことで終了。

家に帰ると予想通り、養母に泣きつかれんばかりに叱られたり、心配されたり喜ばれたり。ホントにこんな、事実得体のしれない異次元人だった俺を、——正体がばれてないにしても——ここまで想ってくれていろいろしてくれて、真面目に感謝に堪えないですよ。

俺自身に関して言えば、普通でない自分を、さすがに自覚しないわけにはいかなかった。あの時は無我夢中だったけど、目が覚めてからは、自分の中に今までにないものがある事を、少なからず意識出来た。それが「核」、って言うものかどうかは実感なかったけど。

「とりあえず、無事に退院おめでとうー！」

「テキトーだよな、ほんと。うまい言い訳浮かばなかったから病院送りって」

俺の部屋。病み上がりだからって反対する養母を説得して、夕飯ついでに四人に集まってもらった。低いテーブルの上には病院帰りにコンビニで買った菓子やら飲み物が、所狭しのいっぱいいっぱい広げられた。

「それが一番自然な成り行きだったんだから、むしろこれ以上はない最善策とったんだぜ」

いつもと変わらない波留兄の口調。でも、なんだ？　なんかビミョーに空気のズレを感じる……。波留兄だけじゃない。皆、意識していつも通りを装ってるようにも見えなくもない。弱冠一名、全く意識してないだろう比呂を除いて。誰が本題の口火を切るか、皆窺ってるようだ。そんなもの、誰かが発するのを待ってる時間も無駄だから、あえて俺が空気を破った。

「あのさ、単刀直入に聞くけど、あの後、どうなったんだ？　俺が気絶した後」

しばらくの沈黙。大雑把過ぎたか？　どっから話したらいいのかってのもあるか。

「えーっとさ、今、ここにこうして普通に居られてるってことは、何にも怪しまれずにあの場から脱出できたのは分かるよ。で、あのマンション、あの後どうなった？」

俺の右手、ベッドに腰かけた波留兄があきらめたように小さい溜息をついて話し出した。

「結論からいうと即封鎖されたよ。俺らが全部終わって結界を解いた時点で、帰宅予定だったやつらはようやくマンションの敷地に足を踏み入れることが出来、早々に異常を感知して急行していたセキュリティ会社もやっと到着。そこで初めて事態が発覚だ。ほんとは変な痕跡残さず爆破でも出来ればよかったんだけどな。まあ、死体は全て炭化するまで燃やしといたし、あの惨状の原因も不明なら、身元確認すら容易じゃないだろ」

「原因不明の猟奇殺人。異生物の襲来だとか呪いだとかなんだとか、ネットやテレビじゃ早速新しい都市伝説になってんぜ」

「ふーん……」

どうやったって、どんなに総力挙げて科学分析調査したところで、あれだけの数の死体——それも切り刻まれた——絶対、原因は解明しないだろうな。常識的に考えれば。その上全部燃やしたとなれば尚更……。

「南ちゃんは？」

「——……」

また、皆沈黙。俺も予想はつくけど、はっきり誰かの口から結末を知りたいと思った。正面に座る征哉と、目が合う。

「燃やしたよ。一緒に」

「そう……、か……」

——覚悟はしていた。はずなのに、構えていた以上の打撃を喰らった。

自分のせいで人が死んだ。もしかしたら助けられたかも知れない命。それって、殺したのと同じじゃねえか？ 南ちゃんだけじゃない。あの、切り刻まれたひと達。目の前に蘇る光景。全部、現実のことだ。力を抜くと全身震えそうになる体を、掌を組んで懸命に抑え込んだ。髪の毛を頭頂部でぐしゃぐしゃかき回される。波留兄だ。ゆっくり右手に顔をあげる。波留兄はなんにも言わずに目を細めて、俺を見るだけだった。

それでも少し、体から力が抜けた。すぐ左手に座る比呂は相変わらずの無表情でテーブルの上

の菓子たちを見るときも見てる。その向こう側で心配そうに上目使いで俺を見る花織と目が合う。そのまま征哉の方に視線をずらすと、急に思い出したように征哉は自分のデニムのポケットから何かを取り出した。

「あ——、海翔、そういやこれ、おまえのデニムのポッケから落ちたけど、これお前のじゃねえんじゃね？」

それは見覚えのあるキーホルダーのついた鍵だった。そういえば——、あん時……。

——……もう、君にしか、頼める人がいない……。お願い、蒼井くん……、これで、お願い、全部、処分して……——

「それ……、南ちゃんの……」

「え？」

花織が征哉から鍵を受け取り、じっくり眺める。

「これ、家の鍵じゃない？ いつの間に受け取ったの？ 海翔」

「あの夜、家に来た時、多分一瞬正気に戻った時があって、そんな時——、南ちゃん、これで俺に処分して欲しいって言ってた……」

「何を？」

「さあ……、でも、あんな状態で最後に言った事だから、よっぽど他人に知られたくないモノかも。俺、南ちゃんち行って探してくるわ」

なんか、居ても立っても居られなくなった。キーをもぎ取って立ちあがった俺に慌てて花織と征哉が止めに入ってくる。

「え？ ちょ、待ちなよ。ちょっと海翔、」

「お前、今から？ だいたい、南先生の家、知ってんのかよ」

「いや、えっと、名簿とかに住所書いてなかったっけ」

「今のご時世、個人情報全部プリントして配ったりなんかしないよ。電話番号表くらいで住所録なんてもらった覚えないでしょ？」

「それだ！ 電話番号から住所、調べられないっけ」

「個人宅は無理。ケータイなんかもっと無理」

「くそっ、こうなったら学校に忍び込むしかないか？」

「そこまでして今すぐ行きたいわけ？ 明日担任にでも適当に事情話して教えてもらえばいいじゃん」

「明日じゃ遅いんだよ！ 明日、南ちゃんは無断欠席なんだから遅かれ早かれ誰かが自宅に行くだろ？ その前に見つけときたいんだって！」

思わず激昂。自分でも何こんなに熱くなってんだかって感じだけど、止まらない。でも、頭の隅では分かっていた。これはただのエゴだ。少しでも自分が楽になりたいだけの、自己満足の罪滅ぼし……。

「海翔、パソコン貸して」

「波留兄……、」

勉強机の上のノートをスリープモードから起動させる。そのまま波留兄に席を譲ると、ネットから超高速のタイプ捌きで分けわからんサイトを次々経由して、ダウンロードを繰り返して最終的に目的の情報を表示した。画面に地図入りで出てきたそれは南ちゃんの家を示すものだった。

「すご、波留兄。電話番号も言ってないのにどうやったの、これ」

「いろいろ。裏の裏の裏から学校のサーバーにハッキングして入手。ネットのお陰でね、今や情報はほぼ九九パーセント入手できないものはない、なんてな」

「さすが情報屋、それで飯食ってるだけあるよなあ」

俺と征哉が傍らから賞賛するのを他人事のように受け流して、波留兄はプリントアウトしたものを俺に差し出した。

「お前一人で行かすわけにいかないからな、皆でまたそろそろ連れ立って行くか？」

「あ！ あれ、映画の『ジャンパー』みたく瞬間移動出来ねえの？ あの敵の奴ら、それっぽいことしてたじゃん」

「残念。俺らは、ここの人間より余計な能力は持ってるけど無尽蔵じゃないし、やれることに限界があるんだよ。出来るには出来るけど、俺らは一回実際にそこに行って、イメージが明瞭に浮かべられる場所にしか移動出来ないんだ。あっちの世界からこっちに来るのはまた理屈が違うしな。神出鬼没が出来んのは、このメンバーじゃ今んとこ比呂ぐらいだ。最初にお前の目の前に、いきなり現れたみたいにさ」

「あ——、」

波留兄は説明がてらすっかり忘れてたことを思い出させてくれた。あれ？ まてよ、ってことは。

「じゃ、比呂に連れっけてもらうことは可能？」

「無理。比呂が神出鬼没出来んのもお前が目の前にいる場所だけだよ。玉はもともと核から派生したものだからな。それを利用しただけだ。全く知らない場所にはいけない」

それである時、見事に目の前に居たわけだ。

「ああ、そう。意外と不便なんだな。じゃ、足で行くよ。隣の駅だしすぐだろ」

「だから、一人で行かせられねえって波留が言っただろ。また襲われたらどうするよ」

「またあいつらが来るってのか？」

「あれで終わりじゃないことだけは確かだ。向こうも楽に逃げられたわけじゃないからソッコー出直しては来ないだろうけど、用心に越したことはないだろ。あとついでに、悪いけどこれから先、お前が出かけるときは必ず俺らの誰かが付き添うから。それは覚悟しといてくれよな」

まるで総理大臣とか大統領とか要人扱いだな……。———……って、俺、確かあっちの世界とやらではそういう立場の人間なんだっけ？　なんか、もういろいろ思い出すのもメンドーになってきた。

「———りょーかい。でも、そろそろ皆で行く必要ないから———、この場合どういう人選がいいんだ？」

「自分に行く」

「あ、あたしも！」

「いや、比呂はまだ肩の傷が痛むだろ。何があるか分からないから俺と征哉で行く」

真っ先に名乗り出た比呂と花織を制して波留兄が立ちあがった。比呂の眉間に弱冠皺が発生し、花織が不服を唱える。

「なんでっ？　じゃ征哉じゃなくて、あたしでもいいじゃん！」

「バカ、比呂と征哉で置いておけると思うか？」

本人たちの前で言う波留兄も波留兄だと思うけど、花織も言う前に気づけよ……。

「むー……、仕方ないなあ、征哉、もっと大人になってよ」

「何だよそれ」

腕を組み、比呂と征哉を見比べていかにも自分が物わかりのいい大人風に言っただけやがった。

「比呂だったらそれこそ花織連れてでも海翔のいるところならすぐ移動して来れんだろ。何かあったらすぐ呼ぶ」

もう一人、不服そうな比呂に大人な波留兄がフォローを入れる。

「んじゃ、早く行こ。遅くなるほど母さんに泣いて止められそうだし」

案の定、玄関で養母ともめたけど、何とかなだめすかして外に出た。ほんとに申し訳ない。帰ってきたらちゃんと親孝行しよう。

最寄りの駅から電車でひと駅、そこから住宅街へ五分ほど歩いた裏路地に南ちゃんの住んでいた家はあった。家。勝手にアパートかマンションだと思ってたけど、それは築五〇年以上は経ってそうな小ぢんまりとした古風な木造の平屋だった。明かりはついていない。今、夜の七時すぎだ。おそらく、勝手なイメージで一人暮らしのはずなんだけど、一応呼び鈴を鳴らす。誰も出てこないし、返事もないのを確認して、錆びついた門扉を開け、すぐ真正面の引き戸の入り口に鍵を差し込んだ。

「なんか、泥棒みたいだな」

「頼まれて来てんだからもっと堂々としろよ」

「いや、何が出てくるかわかんねえから慎重に行った方がいいだろ」

波留兄にそう言われてなるだけ音がでないように引き戸を開けて中に入った。

「明かり、つける？」

「まあ、仕方ないか」

懐中電灯でもあればよかったんだろうけど、手探りで玄関のスイッチを入れる。照らし出されたそこは懐かしい外観に合わず、もの凄い殺風景だった。何よりモノがない。壁にも何も飾ってなくて、備え付けの下駄箱があるだけ。靴さえも一足も出ていない。

「まるで空家だな。鍵が合わなかったら違う家に入ったかと思っちまうぜ」

「ん……——」

征哉に同意して三人、靴を脱いで家に上がる。玄関のすぐ正面に締め切られた襖があり、その右側に細い廊下が見える。玄関のすぐ左手にはトイレと風呂があるらしく、そこに続く短い廊下、正面の部屋の左側には台所があった。

正面の襖を開ける。六畳の何もない畳敷きの部屋。その奥にもう一部屋、同じ六畳間が見える。隅にデスクトップのパソコンが乗った低い机がぼつんとあってそれが唯一の家具？ 部屋を見渡してみたけどそれ以外クローゼットも本棚も何も見当たらない。

「なんか、質素にもほどがある部屋だな。余計なモノは全部押入れの中か」

そう言いながら波留兄が押入れを開けた。キレイに収納ケースが、それも必要最低限の数できっちり収まっていた。どんだけ几帳面だったのか、モノに執着がなかったのか。この中の何を

処分しろって言うんだ？ 手掛かりと言えば、家の鍵以外の二つの小さな鍵。

「これ、この鍵があうもの探せばいいのか？」

「そこ、一つ見つけた。机の引き出しに鍵穴がある。合わせてみるよ」

言うが早く征哉が引き出しを指さしたので、まず一つ、差し込んでみた。

「あれ？」

引き出しを開けてみるが何も入っていない。きれいに空だ。引き出しごと外へ全部引っ張り出すと死角だった位置にUSBメモリーがテープで張り付けてあった。

「これのことか？ 処分してほしいものって」

「中身、確かめてみるか？」

「え？ 見るの？」

「見るに堪えないものだったら、即処分すればいいじゃん。ここにいる誰も公言する奴なんかいないんだしさ」

正直、好奇心があったことは事実だ。南ちゃんが最後に残した言葉からしたら、見られたくないものには違いないだろうけど……。俺が迷ってる間に波留兄はさっさとパソコンを立ち上げパスワードを解除してUSBメモリーを読み込ませた。

「人のパソコン、そんなに簡単に見れるもん？」

「XPだったからな。それよりこれ」

中には画像ファイルと文書ファイルが入っていた。開いた画像ファイルのサムネイルを見るとそこには一度も見たことがない綺麗な笑顔の南ちゃんが並んでいた。そして、ほぼ半分以上に同じ顔の男子生徒。制服からして、俺らの学校じゃない。単独だったり、二人で写っていたり。その画像から見ると、二人は明らかに付き合っていた。

何だか、ほんとに盗み見した罪悪感でいっぱいになってきた。でもこれが処分してほしいもの？ それにしてもこんなに幸せそうな笑顔してた南ちゃんがなんであんな……。

「こっちが本命らしい」

俺がうつむいてる間に波留兄が文書ファイルの方を開けていた。

〈×月×日 私は、この手で、人を、殺した。〉

————それは、告白文だった。

ある女子生徒からのいわれのない仕打ち。男子生徒の裏切り。満員のホームで、女子生徒を突き落とし、そして……。

淡々とつづられている文章。その、終りに近い部分。波留兄も征哉も俺も、その方向を思わず向いていた。台所。まっすぐ六畳間の部屋の方に入ってきたので全く気付かなかった。

「これ、全部ホントのことだと思うか？」

征哉が確認を求めてきた。

「ホントかどうか。そこにあるものを見ればわかるだろ」

波留兄の答え。

南ちゃんが、ホントに処分してほしかったもの。

パソコンの部屋から台所へ入ってすぐの右手に冷蔵庫が二台。その一方が冷凍庫になっているらしい。チェーンでぐるぐる巻きにされ、南京錠が掛っている。自分の手の中の鍵束を見下ろす。残りもう一つのカギ。

逸る心臓の音を意識しながら、鍵をはずした。チェーンが音をたてて落下する。それ以上は体が動かなかった。

「俺が開ける」

頭の上から波留兄の声がして横から手が伸びてきた。何のためらいもなく開かれたその中に入っていたのは、告白文通り、人間の、死体だった。

足と首を窮屈そうに折り曲げられ、ガ克兰の制服のまま、全身凍って彼はそこにいた。

あの画像の男子生徒だ。いつからそこにいたのか、肌の色も変わり果てて顔も少し変形し

ていたので、南ちゃんの告白文を目にしてなければすぐにそうとは分からなかっただろう。

「あんな凄いマイナスエネルギーが出せるわけだ」

「これを俺に、どうやって処分しろって言うんだよ……」

あまりの事態に頭を抱えて隣の部屋に戻った。こんなの、俺の範疇を大きく超えすぎてる。確かに、南ちゃんは俺がいたから、俺のせいで俺が巻き込んで、殺したも同然だけど……。

パソコンに目をやる。淡々とつづられた文章。だからこそ、南ちゃんの受けた仕打ちは第三者の俺が見たってひどいものだ実感できる。だから、殺したのか。憎過ぎて。幸せそうな二人の写真。幸せそうなきれいな笑顔。だから、殺したんだ。本気で好きだったから？

「USBは簡単に消せるけど、これはな……。仕方ない。また、燃やすか」

「波留兄……」

「ん？」

「そいつ、男か女か分からない位燃やして、この家ごと燃やすのは可能？」

「————出来るよ。征哉に協力してもらえば」

「どういうつもりだよ、海翔」

「南ちゃんさ、あのマンションで身元不明の死体になっちゃたんだろ。世間じゃ南ちゃんは行方不明ってことで学校じゃまた皆、好き勝手言いたい放題言うに決まってる。それだったら家で不審火とかで焼死したって方がマシじゃないか？」

「……………————。それでも言うやつは言うだろうけど……、まあ、行方不明のままよりはマシか——」

「ごめん——、結局俺、口で言うばかり、守ってもらうばかりで何も出来ねえのな」

「気にすんなって言っても、お前気にすんだろ。貸しな。そのうち倍倍返ししてもらうから」

「比呂はともかく、花織を置いてきたのは正解だったな。あいつもすぐ感情に流されるからさ」

波留兄が、掌から青い炎を出して冷凍庫の中にかざした。それを征哉が横からサポートしているようだ。冷凍庫の中だけで青い炎が死体を焼きつくしていた。俺はというと、隣の部屋から炎に照らされる二人を眺めているだけだった。

————でもホント、二人がいてよかった……。こういう時、一人じゃないって実感する。もちろん、俺を守るって義務も当然あるんだろうけど、それだけじゃないものが波留兄にも征哉にも花織にも感じられるんだ。比呂のことはまだよくわかっちゃいないけど。

「よし、と。あとはこの家を燃やす。出来るだけ延焼しないように頃合い見て通報しよう」

「海翔、帰りは波留の部屋まで一気に飛ぶから、イメージしとけよな。あつと、靴忘れるとこ

じゃん。あぶねえあぶねえ」

靴を履いて、USBごと南ちゃんちを燃やした。後日、ニュースで南ちゃんちの全焼と、身元不明の死体について報道されたけど、炭化しきった死体に結局はっきりしたことは解明されず、行方不明の南ちゃんであることが濃厚ということで落ち着いた。

翌日、学校では高層マンションの怪事件と、南ちゃんちの全焼の話で持ちきりだった。

そしてもう一つ、俺らの学年の主任先生の事故死。あの同じ日にホームから転落して電車に轢かれたらしい。ニュースで流れて新聞にも載ったって事だが俺も花織も征哉も気付いてなくて初耳だった。ホームルームの時間直前には全校放送で正式に訃報が知らされ、ざわついていた教室が一瞬静まり返った。

「まさか、これも俺らが知らないところで、なんか影響したせいだとか……？」

「たまたまその日ただけだろ。そんなこと考えてたら、あの日殺されたり事故死した奴全部俺らのせいになっちゃうじゃねえか」

征哉の言う通りなんだろう。だけど、なんだかすっきりしないわだかまりが残る。もやもやした気分していると放送の後、見計らったように担任が教室に入ってきた。

三〇過ぎのごつい男の担任の後ろで余計華奢に見える見知った顔。クラスメイトも気づきだし、たちまち今までの空気と打って変わって期待と好奇心で教室中がわきかえる。

「高遠、比呂です。よろしく」

どういう裏操作を施したのか、比呂も同じクラスで編入してきた。タベ波留兄に仕込まれた挨拶をたどたどしく何とか言いきる。黒いセーラーに白い薄手のカーディガンを羽織って、等身大のフィギュアみたいだ。男連中は浮かれ放題、女子の中でも比呂に見とれてる子までいる。

「静かにしろ！ うるせえぞ！ 男子！ お前ら黙れ」

文字通り、吠えまくる男子に吠える教師。血生臭い噂や人が死んだ話より目の前の華といったところだろう。比呂はと言えばこんだけ騒がれてるのに相変わらずの美少女鉄火面で、挨拶もそこそこ、担任無視して顔色一つ変えずに、何を考えてかそのまま俺の席まで来た。

「比呂、お前の席あっち」

「ああ。分かってる。お前、悪いが席を替わってくれ。自分が海翔の隣に座る」

「はあ？」

隣の席の有坂さんの表情が一変する。あ～、もう、何言ってんだか！ ったく。

「比呂っ、そんな簡単に席は変更できねんだよ！ 言い方も悪い。お前が間違ってるんだから有坂さんにちゃんと謝れよっ」

「？ 謝る？」

俺の方に向き直って不思議そうに訊いて来る。そういえば、比呂は謝ることを知らないままだった。

「自分の方が悪いことしたら、ごめんなさいって言うんだよ。今のはお前の方が間違ってたの。分んなかったら後で教えてやるから、とにかく今は謝れっ」

「いいよ、もう。高遠さん、蒼井くんと知り合いなんだ。ちょっと変わってるんだね」

俺があまりにも一方的に、説教めいた事を言いすぎたせいか有坂さんが妥協してくれた。気づくとクラス中俺たちの方に注目していた。担任までなんかニヤ付いてるし。

「謝る？ ごめんなさい？」

不覚にも、少し首をかしげて大きな黒眼で見つめてくる比呂にまた心拍数が高なってしまふ。前の席から征哉の盛大なため息が聞こえた。そっちを見なくてもどんな顔してるかありありと想像できる。

「……わかった、」

そう言いながらもいまいち納得いかない顔で比呂は有坂さんに向きなおった。

「自分が悪かったらしい。謝る。ごめんなさい」

「い、いいってもう。いきなりあんなこと言われたから私もびっくりしちゃっただけだよ。私有坂麻衣。よろしくね」

「麻衣。よろしく」

そこで再び俺の方を振り返り——、なんとっ！ 一瞬だけど、かすかに比呂がほほ笑んだのだ！ うあ〜、やられた〜……。完全に調子が狂わされた。やっぱめっちゃ可愛いじゃねえか、比呂って。

「何やってんの、お前」

「へ？」

征哉の声に我に返る。比呂はとっくに二列向こうの指定された席に座り、周りの奴らの質問攻

めにあっていた。俺は比呂にノックアウトされた姿勢のまま、口も半開きでずっと比呂を見ていたらしい。慌てて顔を引き締める。

「お前、気づかなかったのかよ、比呂が笑ったの」

「ええっ？ あいつがあ？」

あからさまな不審顔。絶対信じてない。まあいいや。そうか、ってことはまだ比呂の笑顔を知ってるのは俺と波留兄だけだ。有坂さんには悪いけど、やっぱり隣の席、変われるもんなら変わって欲しかったな……。今日は一日いつも以上に授業に身が入らなさそうだ。

昨日に引き続き、今日も快晴。昼休みの屋上はいつもに増して人が多かったけど、花織と比呂で早々に場所を確保し、四人で昼飯を食べそのまま居座った。日差しと風が気持ちいい。風になびく比呂のさらさらの黒髪を花織が手に取って弄び出した。いいなあ、俺も触りてえ。

「あたしも髪伸ばそうかな～、でも癖っ毛なんだよねえ、いいなあ比呂、めっちゃきれいなストレートの黒髪で」

「そうか？」

「いいじゃん、花織は花織で似合ってるから」

「ありがと一、海翔っ」

「お前、ホント感心するよ。いつもいつもよくそんな女が喜ぶセリフさらっと言えるよな。ほぼ反射神経で全然意識してないで言ってるし」

「あ、そお？ 全然気付いてなかった」

「相手俺じゃなかったらボコボコだな。お前」

「征哉、それ何気に自分の自慢も入ってるから」

いつも通りの日常。全く、あんだけ死体を目の前にして、あんな非日常的な体験した後とは思えないくらいだ。普通ならトラウマにでもなって精神的にもどうにかなりそうだけど、ある意味日常に戻ることで現実逃避しているのかもしれない。でも俺の場合、周りに四人もほんとに信じられる仲間がいてくれたからに他ならない。

「海翔？ 何黄昏ちゃってんの？」

「ん？ いや、あれで終わりじゃないんだろ？ またいつ来るかわからないんだよな。俺たちこのままずっとここにいていいのか？」

「まあ、いつかは戻んなきゃなんねえけど、今はこっちにいる方が時間が稼げるしな。ここにい

ればこっちも全力使えない分、あっちにもハンデがあるから下手に暴走しかけてくることないし。お前ももっとちゃんと力をコントロールできるようにしないと、な」

「俺次第、ってこと？ でもここに居たらまた、関係ない人たち巻き込むことになるんだろ？」

「あっちに戻っても同じだよ。あっちにも何十億って普通の人に住んでる。こんな風にしてて実感しろって方が無理だけど、あたしたちはテロリストと闘ってるのと同じだから、あたしたちがやるべきことは可能な限り犠牲を最小限に抑えること。あっちの世界もこっちの世界も関係なくね」

屋上の金網から街を見下ろす。学校が高台にあるせいでほぼ街が一望できる感じだ。あの、高層マンションも正面に見える。やっぱりもう、今まで通りのんきに生きていくわけにはいかなさそうさ。

「海翔、」

すぐ隣で声がした。比呂がいつの間にか隣に並んで俺の方を見上げている。いつもの目線。いつもの無表情。風がまた吹いて比呂が髪を抑える。金網を掴んだ俺の手の甲を比呂の長い髪が撫でて行った。

「海翔は自分が守るから、安心しろ」

「比呂、自分が、じゃなくてあたしたち、でしょ？」

「花織、早くそいつに常識叩きこんでやれよ。面倒見切れねえ」

「よく言う！ 見る気なんてこれっぽっちもないくせにっ」

「なくても必要に迫られるときがあんだよ」

また夫婦漫才が始まったよ。口に出して言うと否定するのは分かっているから金網を背にして観客に徹する。二人の掛け合いに顔が自然に和らいでいく。青空を低空飛行で飛行機が横切っていった。大音量のエンジン音に紛らせて、意識せずに思わず言葉が口から零れた。

「お前らがいてくれて、ほんと良かった」

「何？ 何か言った？ 海翔」

「当たり前だ」

隣から声がする。比呂だ。今度ははっきりと、俺を見てにっこり微笑んだ。

「わっ、比呂～、何何っ、すごいかわいいっ！ 別人じゃん！」

「笑った……」

比呂の笑顔にまたまた全意識持ってかれた俺の傍らで、花織の歓声と征哉の呟き声が聞こえる。あ～あ、せっかく身内の波留兄以外は俺だけのものだったのに……。比呂のことだから俺にしか笑うなって言ったら、分かったって言いそうだけどな。

ありふれた日常にありふれた会話。だけど、確実に以前とは違う現実が今、俺はいる。近い未来、激変する日がまた来るんだらう。

でも、何があろうと俺は決して、独りじゃないんだ。